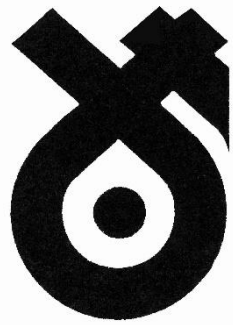


研究紀要

みのお



第 2 1 号

令和 7 年度版

大阪府立箕面支援学校

『みのお』第21号の発刊に寄せて

令和7年9月に次期学習指導要領の論点整理案が出されました。約10年毎の改訂で令和12年からの導入となる見通しですが、現行の学習指導要領をふまえて、「わかりやすさ」や「多様な子どもたちの包摂」が盛り込まれていくようです。現行の学習指導要領よりも柔軟性が高まることが予測されますが、目まぐるしく変化する社会の動静に対応するものにバージョンアップされることと期待しています。

大阪府においては、令和5年度から令和14年度まで第2次大阪府教育振興基本計画が策定され、令和9年度まで前期事業計画が進められています。特別支援学校に関しては、重点取組として「障がいのある子どもたちの教育の充実」が掲げられ、具体的事業として「医療的ケアが必要な子どもたちが安全・安心に学ぶことができる環境づくりの促進」「府立支援学校のセンター的機能の強化」が進行中です。これを基に各校においてより一層、子どもたちを取り巻く環境の整備とその実現に向けての取り組みが進んでいくと思います。

新型コロナウイルス感染症が5類に移行してから学校現場において、コロナ禍以前と同様の教育活動が実施できるようになりました。特にICT機器の活用に関しては、コロナ禍でのリモート学習や動画作成等で格段にそのノウハウが構築されたと思います。デジタル教材の作成や授業での実践、児童生徒の一人一台端末の利用も進み、子どもたちそれぞれのニーズに合わせた方法で学習が進められるようになってきました。

本校においては、「令和7年度 学校経営計画及び学校評価」の中期的目標として、「支援教育に関する高い専門性と授業力の向上」を掲げ、様々な児童生徒のニーズに対応できる専門性や授業力の向上を推進しているところです。その取り組みを実践報告として研究紀要『みのお』第21号にまとめました。ぜひご一読いただき、忌憚のないご意見やご助言をお願いいたします。

これからの新しい時代に向け、「一人ひとりのいのちの輝きを大切に」を合言葉に、すべての児童生徒が幸せや生きがいを感じ、可能性を伸ばしていけるよう取り組んでいきます。引き続き、本校の教育にご理解、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和8年3月

校長 平井 晋也

目次

はじめに

目次

I 本校の概要	1
小学部の教育.....	3
中学部の教育.....	8
高等部の教育.....	11
II 研究・実践の報告・発表	
●実践報告 1	
実践報告小学部	
.....	14
実践報告中学部	
.....	33
実践報告高等部	
.....	44
●実践報告 2	
「姿勢・動作の評価～適切な自立活動の学習内容を考える～」	80
「地域支援整備事業の取り組み報告」	91

あとかき

I 本校の概要

本校の概要

1 めざす学校像

『一人ひとりのいのちの輝きを大切に』を合言葉に、すべての子どもたちの自立と社会参加をめざし、学校・保護者・地域や関係機関との連携を図り、子どもたちの障がいや発達状況に応じた専門性の高い教育活動を行う学校をめざす。その実現のために、以下の4点を重点とした学校経営に取り組む。

- ・ 児童生徒の一人ひとりの教育的ニーズを踏まえた教育活動の推進をすすめる学校
- ・ 支援教育に関する高い専門性に基づく教育をすすめる学校
- ・ 保護者や地域に信頼される開かれた学校
- ・ 児童生徒の生命を慈しみ人権を守る安心で安全な学校

2 学校運営の重点

(1) 一人ひとりの教育的ニーズを踏まえた教育活動の推進

- ・ 児童生徒一人ひとりのニーズに応じた自己実現や社会参加を促進する。
- ・ 学部間の連携を深め、児童生徒一人ひとりのニーズに応じたキャリア教育等の充実を図る。
- ・ 「個別的教育支援計画」の活用による教育活動の充実を図る。

(2) 支援教育に関する高い専門性と授業力の向上

- ・ 学習指導要領に対応した教育課程を実践する。
- ・ 様々な児童生徒のニーズに対応できる専門性や授業力の向上を図る。
- ・ 教育環境（ICT機器、自立活動に関する機器、生涯スポーツ器具、スノーブレンルーム等）を整備し、それらを活用した指導内容の充実を図る。
- ・ 効率的、機能的な運営組織や業務の見直しを図りながら、教員の働き方改革及び業務の負担軽減を推進する。

(3) 保護者や地域に信頼される開かれた学校づくり

- ・ 学校情報の積極的な発信に努める。特に学校ホームページの内容のスピーディーな更新と地域への広報活動の充実をめざす。
- ・ 地域における支援教育の専門性向上のため、リーディングスタッフを中心としたセンター的機能の充実を進める。
- ・ 校内支援の充実のために校内体制の整備と地域連携の充実を図る。
- ・ 進路に関する情報を積極的に保護者に提供し、体験実習等を通じて、生徒の適性に応じた進路の実現に努める。

(4) 安全で安心な学校づくり

- ・ 人権及び人権問題に関する正しい理解を深め、様々な人権問題の解決をめざした教育の推進に努める。
- ・ 大規模災害や防犯等への対応のために、マニュアル等の定期的な検証、及び安全対策・安全教育を推進する。
- ・ 医療的ケアを必要とする児童生徒の安全で安心な教育環境の確保のために、校内体制の充実と関係機関等との連携を強化する。

3 指導の重点

- ・ 小学部、中学部、高等部それぞれの学部の特性を考慮して、学部ごとに教育課程の主旨を踏まえつつ、教科・領域の系統化と指導の充実を努める。
- ・ 一人ひとりの個性を重視し、主体性を伸ばすため、教育活動全般を通じて児童・生徒の実態とニーズを把握する。
- ・ 本人のニーズと保護者の要望を踏まえて、指導と評価の年間計画（シラバス）および個別の指導計画をもとに指導を展開し、それに基づいた評価を的確に行う。

4 設置学部および学級数

学部		修業限年	学級数（公簿による）				通学区域
			一般	重複	訪問	合計	
小学部		6 年	0	23	1	24	箕面市、豊中市、吹田市 池田市、能勢町、豊能町
中学部		3 年	0	14	1	15	
高等部	普通課程	3 年	0	15	1	16	
	生活課程		6	3	0	9	箕面市
全校学級数合計			6	55	3	64	

5 市町別および学年別在籍者数（R 7. 12. 15時点）

		箕面市	豊中市	吹田市	池田市	能勢町	豊能町	合 計	
小学部	1年	0	3	8	2	0	0	13	
	2年	3	2	2	3	0	0	10	
	3年	1	3	3	0	0	0	7	
	4年	0	5	6	1	0	0	12	
	5年	3	2	5	2	0	0	12	
	6年	0	4	5	0	0	0	9	
	小計	7	19	29	8	0	0	63	
中学部	1年	2	6	5	1	0	0	14	
	2年	2	5	6	1	0	0	14	
	3年	2	6	4	0	0	0	12	
	小計	6	17	15	2	0	0	40	
高等部	普通課程	1年	4	4	4	1	0	0	13
		2年	3	7	6	0	0	0	16
		3年	3	7	4	2	0	0	16
		小計	10	18	14	3	0	0	45
	生活課程	1年	12	通学区域外					12
		2年	14						14
		3年	14						14
		小計	40						40
全校		63	54	58	13	0	0	188	

6 医療的ケアの実施状況

（1）本校における医療的ケアの実施内容

胃ろう（腸ろう）、鼻腔経管栄養、口腔内吸引、鼻腔内吸引、エアウェイ内吸引、エアウェイ着脱、気管カニューレ内吸引、薬液吸入、常時酸素吸入、必要時酸素吸入、導尿、浣腸、ブジー、排痰補助装置、パーカッサー、ネーザルハイフロー、人工呼吸器、血糖測定、腹膜透析衛生、口腔内持続吸引、その他

（2）医療的ケア実施延べ人数（学部別）

小学部	中学部	高等部	合計人数
44	20	26	90

小学部の教育

1. 小学部の教育目標

- ＜健康な体と豊かな心＞…基本的な生活習慣を身に付け、健やかな体と豊かな心を育てる。
- ＜人と関わる力＞…身近な人との関わりの中で、自分の気持ちを伝える力を育てる。
- ＜確かな学力＞…様々な体験を通して、「できた！」の経験を増やし、学ぶ意欲を育てる。

2. 「個別的教育支援計画、指導計画」について

各教科の長期目標（年間指導目標）を基に、児童一人ひとりの短期目標（前期・後期）を立て、課題に沿って指導内容を作成し取り組んでいます。

3. 小学部の教育活動の特徴

（1）教科・領域等の指導

① 健康、からだづくり

障がいの重度・重複化、多様化と共に医療的ケアなど健康に配慮を要する児童が増えています。そのため学校生活の土台である健康、からだづくりを重視しています。「活動－休養」を取り入れた学校生活と生活リズムの確立、身辺自立（食事、排泄、衣服の着脱など）の確立も大切にしています。

クラス（基礎集団）では登校後のバイタルチェック、健康観察を欠かさず行い、学校生活の中で常に子どもたちの体調管理に配慮しています。また「自立活動（じりつかつどう）」の時間を中心に心身のリラクゼーション等を行い、様々な学習活動場面で身体への負担を減らす姿勢作りや姿勢変換に取り組んでいます。

② 課題別学習（グループ学習）について

子どもたちが授業の内容を理解し、意欲と見通しを持って活動できるように、発達課題（運動面、操作面、言語（理解）、社会性（対大人）など）を考慮に入れた学習集団を編成し「グループ学習」として取り組みます。低学年と高学年、それぞれ5段階の課題別グループを設定し、より課題の近い子どもたちが適正な人数で学習できるよう縦割りの集団編成を行いません。発達検査KIDSを1年生、3年生で実施しています。

【令和7年度 課題別グループと名称】

低学年グループ名とグルーピング	高学年グループ名とグルーピング
・ たこ : I-①グループ	・ バナナ : I グループ
・ いか : I-②グループ	・ ブルーベリー : II-①グループ
・ いるか : II-①グループ	・ さくらんぼ : II-②グループ
・ うみがめ : II-②グループ	・ いちご : II-③グループ
・ ペんぎん : III グループ	・ シークワサー : III グループ
・ らっこ : IV グループ	・ ばんぺいゆ : IV グループ

③ 多様な集団の保障

「体育」、「運動会」、「学部集会」等は、低学年（１～３年）と高学年（４～６年）に分かれて、定期的に大人数での活動を経験できるようにしています。複数学年による合同活動も重視しており、「春の校外学習」、「もみじフェスタ」（１・２年合同、３・４年合同、５・６年合同）、「クラブ活動」（５・６年合同）を設定し、取り組んでいます。基礎集団の活動としては、すべての学年クラスで「朝の会」、「帰りの会」、「学年活動」、「道徳」、「自立活動」、「音楽」、「図工」に取り組みます。

（２）「自立活動」のとりくみ

障がいや発達状況に応じた個人目標と計画（個別の指導計画）を作成し、身体の機能を高めることと、日常生活動作の向上をめざしています。計画と実施に当たっては、保護者のご意見やご要望を踏まえ、主治医や学校医の助言などを参考にしながら取り組んでいます。

（３）特別活動

① 学校・学部行事〔詳細は別項〕

学部行事として、春の校外学習（１・２年、３・４年、５・６年、各１回）、校外学習（各学年、年１回）などの校外行事や、季節感を取り込んだ学部集会（年４回）などに取り組んでいます。また、５年生では宿泊学習を設定し、家庭を離れ学校の友達や教員と宿舎に泊まる体験をしています。６年生になると、小学部生活の集大成として１泊２日の修学旅行に出かけます。「運動会」、「もみじフェスタ」、「作品展」などの全校行事を含め、基礎集団における活動を基本にしながら、学年や学部を越えた多様な集団による活動経験や交流を大切にしています。

② 児童生徒会活動

学校生活すべての場にわたって子どもたち自身が主体的に活動し、児童生徒中心の児童生徒会運営となるように配慮しています。選挙で選ばれた小学部代表が学部行事の司会・進行を行ったり、人権委員、広報委員、選挙管理委員として児童生徒会の各委員会に参加して一緒に取り組んだりしています。また、児童生徒会行事（全校交流会）には児童全員が参加し中学部、高等部の生徒たちと交流しています。

③ 交流活動

《学校間交流》

箕面市立萱野東小学校と、直接交流会（年１回）および作品交流を行っています。２学期に萱野東小学校２年生の児童が本校を訪れ、クイズ形式でお互いの学校について紹介あったり、本校の施設、スクールバス、給食などについて学んだりします。３学期の作品展週間には、萱野東小学校２年生の作品も展示するなどして交流を深めています。

《居住地校交流》

保護者の希望に基づき、「地域社会の一員として生きていくつながりを作るため、居住地域校の児童・教職員と本校児童が互いに理解しあい、地域の人たちとのかかわりを豊かにしていく」ことを目的として取り組んでいます。実施に当たっては、相手校および保護者と相談しながらすすめていきます。

4. 訪問教育

学校に通学して学習や活動を行うことが困難な子どものために「訪問教育」という制度があります。担当教員が週3回、家庭や病院を訪問して、いろいろな学習に取り組めます。

対象の児童はスクーリング（登校しての学習）を受け、学年や学習グループの友だちと一緒に授業に参加することもできます。

5. 集団編成 ＜基礎集団・学習集団編成、児童・教員数＞ ー令和7年4月1日現在ー

基礎集団（学年・クラス）の編成

学年・クラスを基礎集団としています。

学年の児童数が少ない場合には、複数学年で基礎集団を作る場合もあります。

		低学年					高学年					合計
学年 クラス		1年		2年		3年	4年		5年		6年	
		1組	2組	1組	2組	1組	1組	2組	1組	2組	1組	
児童数		7	6	6	4	7	8 (訪1)	5	7	5	9	64
教員 数	担任 数	5	4	4	3	5	5	3	5	3	6	43
	学部 付	2										2

※非常勤の教員5名が授業に入ります

6. 校時・時間割表および下校時間

(1) 下校時間

	月	火	水	木	金
13:20下校 (小1便)	1、2年		1～6年		1～4年
15:10下校 (全校2便)	3～6年	1～6年		1～6年	5、6年

(2) 校時・時間割表 (令和7年度)

<低学年(1～3年生) 時間割>

	校時	月	火	水	木	金
9:00～9:50	1	せいかつ [朝の会]				
9:50～10:30	2	ことば・かず (グループ学習)	音楽	体育	ことば・かず (グループ学習)	ことば・かず (グループ学習)
10:50～11:30	3	学活/道徳	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動
11:35～12:25	4	給食	給食	給食	給食	給食
12:25～13:10	5	せいかつ [帰りの会]				
13:40～14:20	6	3年 自立活動	1・2年 図工 3年くらし・しぜん		1・2年 くらし・しぜん 3年 図工	
14:20～15:00	7	せいかつ [帰りの会]	せいかつ [帰りの会]		せいかつ [帰りの会]	

※月1回、誕生日会を実施

<高学年(4～6年生) 時間割>

	校時	月	火	水	木	金
9:00～9:50	1	せいかつ [朝の会]				
9:50～10:30	2	体育	自立活動	自立活動	音楽	自立活動
10:50～11:30	3	ことば・かず (グループ学習)	ことば・かず (グループ学習)	学活/道徳	ことば・かず (グループ学習)	ことば・かず (グループ学習)
11:35～12:25	4	給食	給食	給食	給食	給食
12:25～13:10	5	せいかつ [帰りの会]				
13:40～14:20	6	自立活動	4年くらし・しぜん 5・6年 図工		4年 図工 5・6年 くらし・しぜん	5・6年 クラブ
14:20～15:00	7	せいかつ [帰りの会]	せいかつ [帰りの会]		せいかつ [帰りの会]	せいかつ [帰りの会]

※月1回、誕生日会を実施

7. 令和7年度の主な学校行事・学部行事

学 校 行 事	運 動 会〔全校〕	5月24日(土) 予備日 5月27日(火)
	もみじフェスタ〔全校〕	11月14日(金) 11月15日(土) 予備日 11月18日(火)
	作品展〔全校〕	1月26日(月)～ 1月30日(金)
	式行事〔全校〕	入学式： 4月 8日(火) 1学期始業式： 4月 8日(火) 1学期終業式： 7月18日(金) 2学期始業式： 9月 1日(月) 2学期終業式： 12月24日(水) 3学期始業式： 1月 8日(木) 高等部卒業式： 3月 5日(木) 小・中学部卒業式： 3月11日(水) 修了式： 3月24日(火)
学 部 行 事	宿泊学習〔5年生〕	7月 3日(木)～ 4日(金)
	修学旅行〔6年生〕	10月 9日(木)～10月10日(金)
	春の校外学習	1、2年： 5月15日(木) 3、4年： 5月13日(火) 5、6年： 5月12日(月)
	校外学習〔各学年で企画・実施〕	1年：10月23日(木) 4年：10月 2日(木) 2年：10月21日(火) 5年： 9月30日(火) 3年：10月 7日(火) 6年： 6月12日(木)
	学部集会 年4回	新転入生歓迎会 4月21日(月) 秋まつり 9月22日(月) お楽しみ会 12月18日(木) 卒業生を送る会 2月16日(月)
他	学部懇談会 年1回(保護者対象)	第1回学部懇談会 4月15日(火) ※各学期に1回、個人懇談または学年懇談会もご案内します。

中学部の教育

1. 中学部の教育目標

- ・心身の成長を大切にし、健康で楽しい学校生活を営む力を育てる。
- ・友達との関わりを深め、互いの良さや違いに気づき、協力し合う態度を育てる。
- ・より多くの経験を積み重ね、自らチャレンジし、学ぼうとする態度を育てる。

※ 生徒個々の指導目標や指導内容については、「個別的教育支援計画」を作成して取り組んでいる。

2. 中学部の教育活動の特徴

(1) 成長期の教育

中学部の生徒は思春期に入り、心身の成長が著しい時期を迎える。このため、個々の成長に応じて、健康づくりや気持ちの安定、コミュニケーション力の育成を大切にしている。

(2) 生活年齢を意識した基礎的な生活集団：学年・学級

クラス編成は生活年齢を重視し、学年・学級をベースとした集団で構成されている。1日の学校生活の中で、登校時のHR、給食、給食後のHR、下校時のHRをこの集団で過ごす。また、週に1度、学年活動があり、年間のさまざまな学校行事や季節に応じた取り組みを、この集団で活動している。学年および学級集団は、障がい状況の違う生徒で構成されている。日常の活動を通して、訪問籍の生徒も含め、それぞれが学年および学級の一員としての意識を持ち、仲間との関わりを深められるように配慮している。

(3) 生徒の発達課題に応じた集団：学習グループ

個々の生徒の発達課題に応じた学習を保障するために、授業の多くは学年の枠を超え課題別の学習グループで展開している。基本的に4つの類型を設定している。

A 類型：合科・領域学習の教育課程。①健康面、身体面に十分に配慮をした取り組み。②コミュニケーション能力の向上を図る取り組み。③姿勢の保持、運動、動作、移動等、自発的な動きに配慮した取り組み。

B 類型：合科・領域学習の教育課程。①コミュニケーション能力の向上を図る取り組み。②姿勢の保持・安定、運動・動作、移動、歩行等、自発的な動きに配慮した取り組み。③手の操作を向上させる取り組み。

C 類型：教科学習に準じた教育課程。①ルールを理解して集団の中で学習していく取り組み。②生徒どうしの関わりを重視した取り組み。③ことばのやりとりをし、文字や数も含めた教科学習。

D 類型：教科学習の教育課程。①ルールを理解して集団の中で学習していく取り組み。②生徒どうしの関わりを重視した取り組み。③課題や到達度に応じた教科学習。

※ 以上は、学習グループを編成する上での目安であり、実際の生徒集団全体の構成を見ながら各グループを設定・展開している。今年度はA、B、Cの3グループを設定し、必要に応じて、それぞれをA1・A2・B1・B2・C1・C2の小グループに分けて授業を展開している。

3. 校時・時間割表

令和7年度 中学部時間割

大阪府立箕面支援学校

●A1 グループ						●A2 グループ					
	月	火	水	木	金		月	火	水	木	金
1限(9:40～10:10)	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動	1限(9:40～10:10)	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動
2限(10:15～10:45)	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動	2限(10:15～10:45)	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動
3限(10:55～11:25)	ことばかず	保健体育	学活	美術	職業家庭	3限(10:55～11:25)	くらししぜん	保健体育	学活	職業家庭	美術
4限(11:30～12:00)	ことばかず	保健体育	道徳	美術	職業家庭	4限(11:30～12:00)	くらししぜん	保健体育	道徳	職業家庭	美術
5限(13:20～13:50)	G自活	くらししぜん	ことばかず	総合	音楽	5限(13:20～13:50)	G自活	ことばかず	ことばかず	総合	音楽
6限(13:55～14:25)	G自活	くらししぜん	ことばかず	総合	音楽	6限(13:55～14:25)	G自活	ことばかず	ことばかず	総合	音楽
●B1 グループ						●B2 グループ					
	月	火	水	木	金		月	火	水	木	金
1限(9:40～10:10)	ことばかず	くらししぜん	音楽	ことばかず	G自活	1限(9:40～10:10)	くらししぜん	職業家庭	音楽	総合	G自活
2限(10:15～10:45)	ことばかず	くらししぜん	音楽	ことばかず	G自活	2限(10:15～10:45)	くらししぜん	職業家庭	音楽	総合	G自活
3限(10:55～11:25)	職業家庭	総合	学活	保健体育	美術	3限(10:55～11:25)	美術	ことばかず	学活	保健体育	ことばかず
4限(11:30～12:00)	職業家庭	総合	道徳	保健体育	美術	4限(11:30～12:00)	美術	ことばかず	道徳	保健体育	ことばかず
5限(13:20～13:50)	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動	5限(13:20～13:50)	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動
6限(13:55～14:25)	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動	6限(13:55～14:25)	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動	自立活動
●C1 グループ						●C2 グループ					
	月	火	水	木	金		月	火	水	木	金
1限(9:40～10:10)	英語	国語	社会	国語	数学	1限(9:40～10:10)	国語	数学	理科	英語	国語
2限(10:15～10:45)	英語	国語	社会	国語	数学	2限(10:15～10:45)	国語	数学	理科	英語	国語
3限(10:55～11:25)	自立活動	自立活動	学活	理科	自立活動	3限(10:55～11:25)	自立活動	自立活動	学活	社会	自立活動
4限(11:30～12:00)	自立活動	自立活動	道徳	理科	自立活動	4限(11:30～12:00)	自立活動	自立活動	道徳	社会	自立活動
5限(13:20～13:50)	音楽	美術	職業家庭	保健体育	総合	5限(13:20～13:50)	音楽	美術	職業家庭	保健体育	総合
6限(13:55～14:25)	音楽	美術	職業家庭	保健体育	総合	6限(13:55～14:25)	音楽	美術	職業家庭	保健体育	総合

※A、B グループは上記の校時を基準にしつつ、生徒の実態に応じてケアと授業の時間設定をしている。

4. 訪問教育

今年度は1名の生徒が在籍し、本人や家庭の状況に合わせて月1回程度の訪問を行うことができた。

5. 交流教育

他の学校や地域の人々との交流活動を通じて、地域や社会とのつながりを深めていく。

(1) 学校間交流

箕面市立第四中学校との対面での交流を実施した。四中から5～6名の生徒が来校し、各学年に入り、自己紹介やレクリエーションを行い、交流を深めた。

また、年2回、豊中支援学校中学部と本校中学部の3年生同士の交流を行った。

(2) 居住地校交流

生徒・保護者の希望に基づき、居住地校区の中学校と交流を行っている。

6. 今年度の宿泊行事

2年：宿泊学習（1泊）6月19日～20日、「ホテル フルーツフラワーパーク（神戸市）」泊
活動一遊園地体験

3年：修学旅行（1泊）10月15日～16日、「ホテル フルーツフラワーパーク（神戸市）」泊
活動一甲子園球場スタジアムツアー（1日目）、KAWASAKI ワールド（2日目）

7. その他の活動

・「学部集会」

例年、4月新入生歓迎会、6月芋の苗植え、10月修学旅行いってらっしゃい会、芋の収穫、1月人権集会及び3月卒業生を送る会として、年間に5回実施している。今年度は2年ぶりにさつまいもの苗を植えた。異常気象により夏場の猛暑や梅雨が例年より短かったこともあったが、何とか生徒1人1つ持ち帰る分だけ収穫することができた。

・「みのまつり」「ミュージックフェア」

今年度より、「総合」の授業で取り組んでいた「みのまつり」「ミュージックフェア」を、教科横断的な取り組みとして各グループ様々な教科で取り組むことで、1つのテーマにむけて探究的な深い学びを行うことができ、子どもたち自身がより達成感を感じることができた。

高等部の教育

1. 高等部の教育目標

- ・自分の体や心と向き合い、健康で豊かな社会生活を営む力を育てる。
- ・社会参加に向けて、他者と関わる力を高め、自己有用感や自信を育てる。
- ・社会生活に必要な知識や技術を身に付け、自立に向けて、主体的に取り組む態度を育てる。

2. 運営の重点

- (1) 個々の生徒の実態に応じた基礎的な学力や生活力を育てる。
- (2) 人との関わりを通して、相手の気持ちになって行動できる力を育てる。
- (3) 障がいに基づく困難を改善・克服する力を育てる。
- (4) 個性を伸ばし、職業的能力の育成を図るとともに、進路に関心をもたせ社会的自立への力を育てる。

3. 指導の重点

- (1) 「伝え合い」
コミュニケーション能力は、生活していく上でもっとも必要な力である。伝え合いの能力を高めるように、学校生活全般を通して指導する。
- (2) 「学びあい」
学びの意欲は友だちとの関わりの中で強くなる。考える力、行動する力を具体的に身に付けるように指導する。
- (3) 「障がいと向き合う」
自らの障がいと向き合い、よりよい自己イメージを作り豊かに生きていくために必要な心のあり方や生活スキルを身に付けるようにする。
- (4) 「個々に応じて」
 - ① 障がいの実態、個性、成長過程に応じた教育活動をすすめる。
 - ② 各教科や学習グループの教育内容を充実させ、課題に応じたきめ細かな指導を行う。
 - ③ 教科の選択の幅を広げて、一人ひとりの課題や進路に応じて自ら選んで学習できるようにする。

4. 重度・重複障がいのある生徒に対する指導の重点

- (1) 「伝え合い」
感じること、表現することをひとつでも増やし、伝わる喜びをより多く経験するように指導する。
- (2) 「生活リズム」
家庭と連絡を密にして生活リズムを確立する。
- (3) 「個々に応じて」
障がいの様子をしっかり見つめ、必要な教材・教具を用意し、生徒に応じた個別指導を行う。

5. 訪問教育対象生徒に対する指導の重点

- (1) 生理的基盤を整え、コミュニケーションの力を豊かにする。
- (2) 個々に応じた年間指導計画を立てる。
- (3) 週3回、1回2時間、35週訪問。
- (4) 校長、教頭、主事をはじめ、学年・学部の教員と同行訪問を行うこともある。
- (5) 実態に応じて、スクーリングを行う。

6. 学級編成

- ・1年次は生徒間の交流を図るために普通課程と生活課程の生徒を混合した学級編成を行う。
- ・2, 3年次は原則、普通課程と生活課程を分けた学級編成を行う。

7. 学習グループ編成

(1)生活課程、普通課程、または学習到達度によってグループを分けて指導する。

(2)それぞれのグループは必要に応じて分けたり、併せたりして指導する。

Aグループ(普通課程)…主に重度・重複障がいがあり重点的に個別指導を行う生徒

重点指導項目…伝え合い（コミュニケーション能力を引き出す）

学びあい（友だち作りと生活リズムの確立）

個別の課題習得

自立活動（障がいと向き合う。よりよい自己イメージを作る）

Bグループ(生活課程)…知的障がいや主な障がいの生徒

重点指導項目…伝え合い（コミュニケーション能力の進展）

学びあい（社会生活と友だち作り）

個別の課題習得

自立活動（障がいと向き合う。よりよい自己イメージを作る）

自立に向けて（働く意欲、余暇を楽しむ活動、生活する技術）

Cグループ(普通課程)… 肢体不自由障がいや主な障がいの生徒

重点指導項目…伝え合い（コミュニケーション能力の進展）

学びあい（社会生活と友だち作り）

個別の課題習得

自立活動（障がいと向き合う。よりよい自己イメージを作る）

自立に向けて（働く意欲、余暇を楽しむ活動、生活する技術）

8. 校時

9:00 ～ 9:35	I 学年別学習
9:40 ～10:10	II グループ別学習（1限目）
10:15～ 10:45	III グループ別学習（2限目）
10:55～ 11:25	IV グループ別学習（3限目）
11:30～ 12:00	V グループ別学習（4限目）
12:00～ 12:40	VI 摂食指導
12:40～ 13:15	VII 自立活動
13:20～ 13:50	VIII グループ別学習（5限目）
13:55～ 14:25	IX グループ別学習（6限目）
14:30～ 15:00	X 学年別学習

9. 授業のすすめ方と学習内容（一部）

授業は原則として、各学年のA1・A2・B・Cのグループで行うが、3学年合同で行う授業や他のグループと一緒にいる授業もある。

A グループ

・総合:グループ全体で行う。5科目の中から希望調査をし、決定する。

B グループ

・作業:半期ごとに3科目（窯業、木工/園芸、手工芸）と清掃・軽作業を入れ替えて学習する。

C グループ

・芸術・情報美術・音楽・情報の3教科の中から、2教科を学習する。

・1年生は音楽・美術、2年生は美術・情報、3年生は音楽・情報を学習する。

B/Cグループ

- ・国語・数学：両グループを一緒にして学年単位で授業を行う。
- ・総合：希望調査をして決定する。
- ・体育：グループ全体で授業を行う。

職業コース

- ・職業、作業の授業や校内実習、販売学習、見学についてはBグループ全員が履修する。

10. 学校間交流

梅花高等学校と北千里高校と交流を行っている。

11. 時間割

			1年				2年				3年			
			A1	A2	B	C	A1	A2	B	C	A1	A2	B	C
月	Ⅱ	1	自活		音楽	家庭	朝の会	自活	数学		朝の会	自活	数学	
	Ⅲ	2	朝の会				自活	朝の会			自活	朝の会		
	Ⅳ	3	数言葉	数言葉	社理	英語	数言葉	生活 (社会・ コミュ)	情報表現/美術	英語	生活 (自然)	音楽	社理	英語
	Ⅴ	4				自活				自活				自活
	Ⅷ	5	総合		保健 体育	美術	総合		保健 体育	美術	総合		保健 体育	自活 てゆび コミュ
	Ⅸ	6												
火	Ⅱ	1	自活		家庭	保健 体育	朝の会	自活	社理	保健 体育	朝の会	自活	美術	保健 体育
	Ⅲ	2	朝の会				自活	朝の会			自活	朝の会		
	Ⅳ	3	美術		職業	自活 てゆび コミュ	生活 (自然)	生活 (自然)	国語		音楽	数言葉	国語	
	Ⅴ	4												
	Ⅷ	5	生活 (社会・ コミュ)	生活 (社会・ コミュ)	総合		生活 (社会・ コミュ)	生活 (社会・ コミュ)	総合		美術	生活 (社会・ コミュ)	総合	
	Ⅸ	6												
水	Ⅱ	1	自活		数学		朝の会	自活	家庭	情報表現	朝の会	自活	職業	情報表現
	Ⅲ	2	朝の会				自活	朝の会			自活	朝の会		
	Ⅳ	3	保健体育		情報表現	音楽	保健体育		職業	自活 てゆび コミュ	保健体育		家庭	音楽
	Ⅴ	4												
	Ⅷ	5	生活 (自然)	生活 (自然)	美術	自活 保健体育	生活 (自然)	生活 (自然)	音楽	自活 保健体育	生活 (自然)	生活 (自然)	職業	自活 保健体育
	Ⅸ	6												
木	Ⅱ	1	自活		保健体育	英語	朝の会	自活	保健体育	英語	朝の会	自活	保健体育	英語
	Ⅲ	2	朝の会				英語	自活			自活	朝の会		
	Ⅳ	3	生活 (社会・ コミュ)	生活 (社会・ コミュ)	数学		美術	音楽	国語		数言葉	生活 (社会・ コミュ)	英語	自活
	Ⅴ	4			国語				英語	自活			国語	
	Ⅷ	5	音楽		作業	社理	生活 (社会・ コミュ)	数言葉	作業	社理	生活 (社会・ コミュ)	美術	作業	社理
	Ⅸ	6												
金	Ⅱ	1	自活		国語		朝の会	自活	美術/情報表現	家庭	朝の会	自活	音楽	家庭
	Ⅲ	2	朝の会				自活	朝の会			自活	朝の会		
	Ⅳ	3	生活 (自然)	生活 (自然)	保健 体育	社理	音楽	美術	保健 体育	社理	生活 (社会・ コミュ)	生活 (自然)	保健 体育	社理
	Ⅴ	4												
	Ⅷ	5	LHR・道徳				LHR・道徳				LHR・道徳			
	Ⅸ	6												

Ⅱ 研究、実践の 報告・発表

実践報告 1 小学部
中学部
高等部

「折り染めランプシェード」

小学部 1年生「 図工 」



対象生徒	小学部1年生 13名：主に手指の操作では、ある程度自ら操作できる児童や手指の少しの支援が必要な児童、教師と一緒に行う児童まで、様々な実像がある集団である。
ねらい	「色を楽しもう」・変化する色の面白さに気付く。 和紙が染料で染まる過程を見つめたり、色が混じることで生じたりする新たな色を楽しむ。 ランプシェードにすることで、光による色の違いや変化を楽しむ。
授業の内容	火曜日 5限 図工 2コマ 1回目：「折り染め」 ①和紙を好きな形や回数折る。②和紙をつける染料を選ぶ(複数可) ③和紙を広げて、できた模様を楽しむ。 2回目：「シェードづくり」 ①前回作った和紙をラミネートフィルムで挟む。②ラミネートする。 ③出来上がったラミネートの周囲を切り落とし、2枚に剥がす。 ④ランプシェードに成型し、ランプを入れて色や光を楽しむ。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	準備物：・和紙(幅の短い障子紙を切断したもの。後の作業に厚手の和紙が必要であったため)・染料(粉末を水で溶かしたもの ペットボトルで用意した)・ハサミ ・染料を入れるためのバットやトレイ ・洗濯ばさみの付いた棒(マジックハンド) ・ラミネーター ・ラミネートフィルム ・ランプ(100均) ・両面テープ など ランプシェードにする際に、一度作ったラミネートを2枚に剥がす技法を使用した。ポイントとしては、ラミネートする際にフィルムから和紙がはみ出すようにセットする(写真：メーカー推奨ではない)ことで、フィルムの周囲(黒の実線)を切るとフィルムを2枚に剥がすことができる。こうすることで、フィルムが薄手になり光の透過率が上がる。また、表がフィルムで裏が和紙というフィルムを作ることができるので、糊を使用したり折り紙の代わりに使ったりすることができる。
授業を終えて	・折り染め自体が乾燥を必要とするので、一コマで完結することではなく2コマ以上必要になってくる点が留意点。・ラミネート作業は児童が介入する取り組みが少ない作業だが、剥がす工程を入れることによって児童の取り組みを増やすことができた。・フィルムから原稿がはみ出している状態で使用するので、クリーニングなど配慮が必要である。児童が折染めの色の変化に気づいたり、ランプをセットすると「誕生日みたい」という発言がでたりして、ランプという作品の雰囲気を楽しむことができた。



2年と5年「百年に一度 とびきりのえがお」

小学部2年生「 図工 」



対象児童	2年生1組、2組児童10名。人工呼吸器使用の児童が3名、独歩可能な児童1名、車いすを常時使用している児童が9名の集団。自分で道具を握れる児童もいるが、多くは緊張等で一人では道具の使用が難しい児童たち。授業への意欲は高い児童が多い。
ねらい	・5年生の児童と一緒に百年に一度、めぐりの年に「とびきりの笑顔で」、輪になって集まれば作品をつくった子どもたち、それを見る人もみんなが笑顔になれる、明るく楽しい世界をつくる。
授業の内容	・5年生と合同の事前学習。 ・それぞれの学年で、笑顔の作成。 ・合同で一つの笑顔の大屋根リングにする。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	それぞれの笑顔については紙粘土で、陶器のお皿をベースにしてビーズやモールで凹凸をつけた原型をつくった。その後写真の「真空成型」技法を用いた「お面」のような形に成型し、アクリル絵の具等で装飾した。 背景については「モネ」の水連からインスパイアされたイメージを2年生が担当した。抑え気味な色彩のトーンによって「笑顔たち」がより一層浮かび上がる効果を狙っている。  
授業を終えて	・作品づくりを通して他学年との交流を深めることができた。 ・完成した笑顔の大屋根リングを学校玄関付近に置くことで多くの人に笑顔を届けることができた。 ・子どもたちの讃歌展に出品し、さらにたくさんの人に笑顔を届けることができた。

文責：小学部 小川聡・盛園英里

「このシルエットは誰？（スパッタリング技法を使って）」



小学部 3年生「図工」

対象児童	小学部3年生の児童7名。人工呼吸器の児童や視覚障がいのある児童、筋緊張がとても強い児童がいる。それぞれ両手で道具を持つことができる、少し介助をすると道具を握ることができる、手の力が弱く教師と一緒に道具を持って活動する児童など実態は様々である。
ねらい	・2つの道具を使って制作をする。 ・「こする」「弾く」等の感覚も感じ取りながら制作を楽しむ。
授業の内容	シラバスにある「様々な平面技法等に親しむ」の中で、生活の中で身近にある歯ブラシを使つてのスパッタリングを行った。まずは教員が実際行っている動画を見た。その後、星やハートといった簡単な模様や好きな動物のイラストを使い、画用紙・絵の具の色を選んでから行った。使う道具等を変えながら計3回練習をした。3回の練習を踏まえ、道具を少し工夫したり、画用紙の色とその色に映える絵の具の色の組み合わせを試行したりした上で、4回目と5回目で自分の写真を使い本番を行った。6回目として、振り返り＋鑑賞として完成した物をみんなで見た。「このシルエットは誰かな？」とある児童に聞くと、全員のシルエットをしっかりと見て正解することができた。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	【使用した道具】 ◎歯ブラシ、電動歯ブラシ、指筆、スパッタリング用の網、スパッタリング用の網(持たなくても良いように改造したもの)、洗濯槽のごみ取りネット ・歯ブラシを一緒に持てるが、そこからの動きが少なく、少ない児童には電動歯ブラシを使う。電動歯ブラシは網に軽くあてると細かい動きで上下左右に勝手に動くので一か所に集中して飛び散ることなくまばらに飛び散った。 ・持つことが苦手な児童には指筆の先を歯ブラシに付け替える改造を行った。 ・歯ブラシを持ってゴシゴシと動かすことが難しい児童には、洗濯槽のごみ取りネットを使い、絵の具を網に塗り、ビーズが付いているゴムを指で引っ張ってから放して弾かせることで絵の具が飛び散るようにした。スパッタリング用の網に同様の仕掛けを自作した。 ・スパッタリング用の網は握って持つ物なので、それが難しい児童用に置いてでもできるように台付きに改造した。
授業を終えて	飛び散る様子を楽しんで見ながら取り組んでいる児童がいた。ゴシゴシしている音や電動歯ブラシの振動、洗濯槽ネットの弾く音も聞くなど、聴覚からの刺激もありつつの作業であった。特にこの学年には視覚障がいのある児童がおり、作業しながらもその音をよく聞いていた。



文責：小学部 池田芳孝・上原みなみ

「ねんどでつくろう みらいへおくるたまご」

小学部 4年生「図工」



対象児童	小学部4年生児童12名(訪問籍1名含む)全員が座位保持椅子や車椅子を使用している。数名医ケアが必要な児童がいる。介助歩行や介助立位のできる児童もいる。
ねらい	・10歳の記念に未来に残す作品を作る。 ・粘土の感触を楽しみ、粘土を捏ねたり伸ばしたり丸めたりする。 ・立体物を作る技法に触れる。
授業の内容	・毎回図工のテーマソングを歌い、手の準備体操をした後、活動を始める。 ①「かぶせるをつくろう」、②「かぶせるをねんどでつつもう」、③「つるつるにしよう」、という3段階で授業を進めた。 ①の活動では、名前、日時、未来へのメッセージなど教師と考えたことを一緒に自由に書き、写真や手型などを折ってかぶせるにつめた。 ②の活動では、粘土の中に好きな色の絵の具を混ぜて捏ね、その中にかぶせるを入れて自由な形に丸めた。 ③の活動では、紙やすりで削った後、ボンドを薄めた液を塗り、つるつるにした。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	■準備物・紙粘土(500グラム) ・ガチャガチャのカプセル ・児童の写真 ・手型足型など ・自分で書いたメッセージ ・絵の具 ・ボンド ・ニスの代わりにボンドを水で薄めた液を塗ることで、つるつるになる様子を味わえるようにした。 ・絵の具を混ぜた後、しっかり混ぜなくても児童の混ぜ具合で自然なマール状になり、味のある模様ができるように教師が支援した。
授業を終えて	・10歳の子どもたちが、10年後に家族と開けた時に嬉しい気持ちになる作品を作りたいかった。 ・未来に残したいものなので、固めの粘土を使用したけど、少し硬くて扱いづらかった。 ・粘土を捏ねる工程で自分から手を動かす児童や、自分の作りたい色の絵の具を混ぜて作る児童、好きな形に自由に造形する児童がいた。 ・①②の活動の後、③の活動を始める際、自分の作品を見つけて指差し、楽しみに続きをする児童がいた。

文責：小学部 磯部美希・羽田豪

「みんなで はなびをえがこう」

小学部 5年生「図工」



対象児童	小学部5年生12名。道具の使い方を理解して操作できる児童、花火のイメージを持って活動できる児童、線や変化を目で追うことができる児童、教師の支えにより腕を伸ばして動かせる児童など、実態は様々である。
ねらい	道具を動かすことで、感熱紙の色が変化する様子を感じることができる。 大きなキャンパスに、思い思いに描くことができる。
授業の内容	①大きなキャンパスに、みんなで花火を描くことを伝える。 ②道具の紹介や使い方、注意点を説明する。 ③それぞれの使いたい道具を選ぶ。 ④思い思いに道具を動かし、線や点を描く。（やけどに注意する。アルコールが目に入らないよう気を付ける。道具を当てた場所の色が変化していることに気づけるよう言葉かけする。） ⑤完成した作品を鑑賞する。
教材・教具の紹介 （工夫した点）	ワープロ用感熱紙をつなぎ大きなキャンパスを製作した。 感熱紙に対して、ドライヤー、はんだごて、アイロン、アルコールスプレーで熱を加えて描けるようにした。 それぞれの道具によって、線になる、広がる、点のはじけるなど、異なる表現の変化が生まれ、花火の多様な形を表せるようにした。 ※注意点※ それぞれ熱を持つ道具を使うため、やけどに注意する。はんだごては直接握ることがないよう、長い棒にくるようにつけ、熱を持つ部分にカバーをして鉛筆のように先端だけが出るようにした。 カバーをつけた、はんだごて 
授業を終えて	キャンパスを大きくしたことで、それぞれが自由に大きく表現できるように活動を考えたが、熱を出す道具を使用することにより、やけどする恐れがあったため制限が必要であったが、配慮しながら進めることができた。普段の生活で使用している、アルコールスプレーやアイロンで描くことができる驚きや、熱を加えることで浮き出てくる線や点に面白さを感じ、意欲的に道具を動かして描こうとする児童が多かった。 今後も道具の扱い方に気を付けながら、感熱紙を活用していきたい。  ☆完成した花火☆

文責：小学部 吾妻健・上埜咲帆

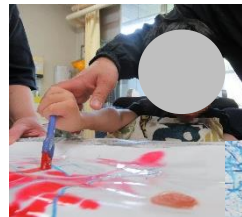


「こいのぼりを作ろう」



小学部 6年生「図工」

対象児童	小学部6年生 9名 道具の使い方を理解し使うことができる児童や、教師と一緒に道具を持って使うことができる児童がいる。また、ペン先に注目して描いている線や色に注目できる児童が多い。手の感覚が過敏な児童もいるが、筆記具に柔らかいグリップを付けるなどのサポートを行うと筆記具を一人で握れる児童もいる。実態は様々である。
ねらい	・様々な筆記具(ペン、クレヨン、筆等)を使って、描く技法(にじみ絵)に親しむ。 ・異なる色の絵の具が混じったときの色の変化に注目し、楽しむ。
授業の内容	① 5月の季節や行事のお話をして、親しみを持たせる。 ② 活動する内容について説明する。 ア)紙にクレヨンで目や鱗を描く イ)水で濡らした筆を使って、ア)の紙を濡らす。 ウ)絵の具を最大2色使い、イ)に色付けする。 ③ 活動の振り返り、作品の紹介 この題材は全2回で行い、上記は2回目の内容である。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・異なる色の絵の具が、混じったときの色の変化を楽しむために、黒色は使用せずに、黄色や緑色、赤色などを使用した。また、使用する絵の具の色を2色までにして複雑な色にならないようにした。 ・濡れた紙に絵の具を一滴落とししたり、力強く描いたりして、にじんでいく様子を観察した。 ・絵の具や水の量は児童に任せた。
授業を終えて	・濡れた紙に絵の具がにじんでいく様子に注目し、じっと観察したり、予測不能なにじみ方に嫌がって泣いてしまう児童もいたが、にじみ絵の醍醐味に触れることができた。 ・紙を水のついた筆で濡らすときに、水の量をそれぞれの児童に任せたことで、児童それぞれの色の濃淡ができた。 ・異なる絵の具の色が交わることに興味を持ち、色が交わる様子を注目し、何度も何度も筆に絵の具をつけてにじませて楽しんでた。



文責：小学部 岸智佳・信國佐代子

「スイートポテトを作ろう」

小学部 1年生「くらし・しぜん」



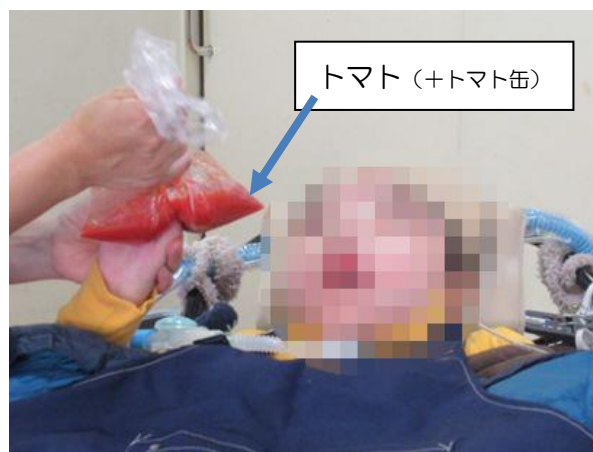
対象児童	小学部1年児童 13名。人工呼吸器の児童が1名、独歩可能な児童が1名、車いすを常時使用している児童が11名の集団。自分で道具を持てる児童や筋緊張が緩く教師と一緒に持って活動に取り組む児童など、実態は様々である。食に関する意欲が高い児童がほとんどである。
ねらい	・授業で育てたさつまいもを使って調理を経験する。 ・友だちや教師と一緒に調理をする経験を積む。
授業の内容	・さつまいもの皮を剥いて、小さく切ってレンジで蒸しておく。 ① さつまいもをジッパー付き保存袋に入れてよく揉む。 ② ジッパー付き保存袋に砂糖を入れてよく揉む。 ③ ジッパー付き保存袋にバターを入れてよく揉む。 ④ さつまいもを丸める。 ・丸めたさつまいもをホットプレートで焼く。 ⑤ 喫食する。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・「くらし・しぜん」で育てたさつまいもを使用した。 ・卵アレルギーの児童がいたため、卵を使用しないレシピで調理した。 ・ジッパー付き保存袋を個別に使用することで、自分の物を一人ずつ作ることができた。 ・その場でホットプレートを使用することで、出来上がる様子や匂いなど、児童が実際に観察できるように設定した。
授業を終えて	・育てた野菜を使用することで、「くらし・しぜん」の授業として一貫性を持たせることができた。 ・経口摂取が可能な児童が、全員同じように食べられるようにメニューを工夫したのがよかった。 ・事前学習で調理の様子を動画で見たり、実際にさつまいもの皮を剥いたりして、調理活動にむけて意識づけを行うことができた。



文責：小学部 芦田麻美・結城耕太・吉田拓

「そだてた やさいで ラタトゥイユをつくろう！」

小学部 2年生 「くらし・しぜん」



対象児童	小学部2年生児童10名。人工呼吸器使用の児童3名、独歩可能な児童1名、車イスを常時使用している児童9名の集団。自分で道具を握れる児童もいるが、多くは緊張等で一人では道具の使用が難しい児童たち。授業への意欲は高い児童が多い。
ねらい	・授業で育てた野菜を使用して調理を経験する。 ・友だちや先生と一緒に調理を経験する。
授業の内容	①包丁でオクラ、ナスを切る。(オクラ:1本、ナス:半分) ②ミニトマトのヘタを取ってビニール袋へ入れる。 トマト缶も入れ、空気を抜いて口を縛り、よく揉んで実を潰す。 ・フライパンにトマト、オクラ、コンソメを入れて火にかける。 ・児童が休憩中は、主担はその間調理を進める。 ③児童休憩中に行っていた調理の様子を動画で鑑賞する。 ④喫食する。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・「くらし・しぜん」で育てた野菜(オクラ・ミニトマト)を使用した。 ・ミニトマトだけでは量が足りないこと、丸く硬いため児童自身が包丁を入れることが難しかったため、トマト缶と一緒に揉んで潰す調理法を取り入れた。 ・ビニール袋を使って洗い物になるべく減らした。 ・サラサラの水分のみ経口可能な児童がいるため、メニューも配慮した。 ・ペースト食の児童には具がわかるものと汁のみのものを用意した。 ・児童の休憩時間に行った過程がわかるように動画で示した。
授業を終えて	・育てた野菜を使用することで、「くらし・しぜん」の授業として一貫性を持たせることができた。 ・事前学習で児童や先生が収穫している写真・動画を見ることで、育てた野菜で調理をする意識づけができた。 ・授業で育てて終わりではなく、みんなで味わうことができ学びになったのではないかな。 ・経口摂取に制限がある児童もみんなと同じものを口にできるよう、メニューを考えることができてよかった。 ・小学部で行う『あきまつり』で、収穫や調理の様子を発表できた。

文責:小学部 奥田愛歌

「葉っぱや実であそぼう」

小学部3年生「くらし・しぜん」

対象児童	小学部3年生児童7名。全員が座位保持椅子やバギーを使用しており、日常生活全般において介助が必要である。介助歩行、介助立位のできる児童もいるが、医ケアが必要であったり、目の見えにくさがあったり、様々な児童が在籍している。
ねらい	・屋外で秋の気配を感じる。 ・落ち葉や実を拾い、秋の季節を知る。 ・落ち葉や実を使って、ゲームを楽しむ。
授業の内容	11月4日(火)から3週にわたり「葉っぱや実であそぼう」という単元で学習した。 ・絵本「どんぐりとんぼろりん」の読み聞かせをして、授業の導入をする。(毎時) ・校内の落ち葉や実を探し、拾って集めて鑑賞する。(1回目) ・集めた落ち葉に風を当てて葉っぱが舞う様子を見る。(2・3回目) ・どんぐりを転がして距離を競うゲームを行う。(3回目)
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・落ち葉やどんぐりを集めるのに、1回の授業だけでは少ないので、あらかじめ落ち葉とどんぐりを準備した。 ・葉っぱが風に舞う様子を見せたくて、どうしたらうまく飛ぶかをいろいろな方法で試した。シラバスの評価規準に、「葉っぱや実を持ったり握ったりしようとしている」という内容があるため、児童は虫取り網に葉っぱを入れる活動をして、網いっぱいの葉っぱを扇風機の風の上から落とすようにすると、風に乗って葉っぱが飛び、木枯らしが吹いている感じを体験できた。 ・どんぐり転がしゲームでは、どんぐりが球形でないので予想できない転がり方になり、遠くまで転がったと思ったどんぐりが戻ってくることもあり、盛り上がった。
授業を終えて	・葉っぱが舞う様子を再現するのに苦戦しながらも、扇風機を使用して葉っぱを飛ばしたが、教室内で行ったので子どもたちがどこまで感じる事ができたのか、屋外で行えたらもっとよかったのかもと感じた。 ・どんぐり転がしゲームでは、子どもたちが自分の力でどんぐりをつかみ、放して転がすことができ、またその軌道が予想外だったのが盛り上がりにつながり、それぞれの転がした距離も含め楽しむことができた。

文責：小学部 山口則子・高難淳治

「花や野菜を育てよう」

小学部 4年生「くらし・しぜん」

対象児童	小学部4年生 全児童12名(訪問籍児童1名、常時呼吸器児童1名)。車椅子で自走できる児童1名を含む全員が、バギーや車椅子を使用。姿勢は、長座位、あぐら座位や立位が取れる児童が多い。手の操作性は教師の支援を必要とする児童、肘を支援するとピンチングができる児童がいるなど様々である。また、認知においては、簡単な対話ができる児童が2名、周囲の様子を見て聞いて、雰囲気を感じるなど、いろいろな五感を働かせ、身体や目の動き、発声などで気持ちを伝えることができる。
ねらい	・実際に植えたい野菜の形に触れたり、匂いを嗅いだりして、興味や関心の幅を広げるとともに、育てたいものを選択して伝える力を育む。 ・選んだ花や野菜の成長を見ることで自然のものに興味関心を持ち、見たり、自分から手を伸ばして触れようとしたりする。
授業の内容	① 自然の花や苗に触れて、育てたいものを決定し伝える。 ② 育てる花の種や野菜の苗を直接手で土に植える。 ③ 植えた花や苗に水をあげたり、写真を見たり、直接畑に行き成長を確認する。 ④ 植えた野菜の収穫をする。植えた花が開花したことを確認する。 ⑤ 収穫した野菜を家に持ち帰り、料理をしてもらい食べる。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	■野菜・・・普段食べている食材で成長が早い、匂いが分かりやすい茄子、胡瓜、椎茸、まいたけ、ピーマンなどを提案した。子どもと一緒に折って音を聞いたり、断面を見て触ったり、香りを楽しみながら育てたい野菜を選択(感覚刺激)した。椎茸は、原木よりも扱いやすい20cm程度の菌床栽培セットを使用した。 ■定植作業・・・畑作業が困難な児童もいるため、一度プランターに植えた後、教師が畑に植え替えを行った。椎茸は、紐付きネットの中心に菌床株を置き、皆でネットを張った状態から張りを緩めて水に浸した。 ■成長確認・・・畑に行けない時は、教師または行ける児童がタブレット型端末で写真を撮って、テレビ画面で確認を行った。 ■収穫・・・畑で実を自身の力で引き抜く、教師と一緒に鋏で切り取る。実の近くに行けない児童は、虫取りアミで教師が切る実を受け止め、重みを感じることで収穫の実感を味わってもらった。
授業を終えて	椎茸や貝割れ大根は、弱い力でも収穫できるため、少ない支援でできた。 植えたい野菜に触れる、持ち帰る野菜に触れるなど、写真に頼らず実際に触れる活動にすることで、子どもの触れた時の思いが表情や声、動きで表現に繋がることを再確認した。育てた野菜を持ち帰り、自宅で調理してもらい、食べることで自然について興味を持てるようになったとの感想もあった。今後も実際のものに触れる活動を重視した授業展開をめざしたい。

文責：小学部 森本りょう・嘉根早苗



「買い物体験をしよう」

小学部5年生「くらししぜん」

対象児童	小学部5年生 12 名。全ての児童がバギーや座位保持椅子に着席して活動に参加している。また、普段から家族とスーパーマーケットに出かけている児童や、発語が困難でも目線で意思を伝えることができる児童もいる。
ねらい	・買い物の手順を知り、教師と一緒に手順通り買い物をすることができる。 ・教師と一緒に商品を選び、買い物をすることができる。 ・自分の好きな商品を探したり、代金を渡したりしようとする。
授業の内容	月末に予定されている校外学習で土産物の購入を控えているため、そのための事前学習として行う。授業のねらいを「買い物体験」としているため、活動では実際に複数ある商品の中から、自分の好きな商品や保護者から頼まれた商品を選ぶ。その際、あらかじめ保護者から校外学習で購入してほしい商品を具体的に決めていただけるよう、アンケートで依頼する。 年間指導計画では、本単元を2時間で実施する。1時間目は、自分の好きな商品を選ぶ。2時間目は、あらかじめ保護者から依頼された校外学習で購入する商品を選ぶ。 買い物手順は、以下の順で進める。 1. 買い物用のバッグ(財布入り)、かごを持つ 2. 商品を選ぶ 3. レジに並ぶ 4. 商品、お金を渡す 5. おつり、商品を受け取る 6. お金と商品をバッグに入れる
教材・教具の紹介 (工夫した点)	■1000 円札(イラスト)…紙を破ってしまう児童が在籍しているため、今回は 1000 円札をイラストで用意し活用する。 ■硬貨…イラストではなく、校外学習や今後の社会生活で実際に使用する硬貨を扱う。 ■コイントレー…お金の受け渡しをしやすくするため、レジ横に置く。 ■レジ…視覚に障がいがある、または見えづらい児童が在籍しているため、操作音で確認できるレジを使用する。 ■土産購入の候補となる写真…校外学習で土産物の購入を実施するため、事前に下見の際に撮影した、値札と商品が写っている写真を使用する。 ■実際にスーパーマーケットなどで売られている商品…日常生活と結びつけるため、スーパーマーケットなど街中で実際に販売されている商品を複数並べる。 ■TVスライド…導入時の説明だけでなく、買い物体験の活動中も手順をモニターに提示し、確認できるようにする。
授業を終えて	【成果】 買い物体験の活動中も買い物手順をモニターに提示したことで、手順を守ろうと活動に取り組む児童の様子が見られた。また、本物の硬貨を扱う実践的な学習は、校外学習の事前学習として有効であり、他の教員からも確かな手応えを感じる声が挙がった。 【課題と今後の改善点】 土産購入の候補として使用した写真には、写真ごとに大きさが異なったり、意図しない他の商品が写り込んでいたりといった課題が残った。その結果、児童にとって写真が見えづらい状況が生じてしまった。今後、年間指導計画で買い物体験の実施をあらかじめ決めておくことで、教材として適した写真の撮り方や準備方法を改善できると考える。



文責：小学部 石丸大幹

「買い物に行こう！」

小学部 6年生「くらし・しぜん」

対象児童	小学部6年生児童 9名。言葉で伝えることができる児童や、手で触ったり、うなずいたりすることでほしい物を選択することができる児童がいる。これまでに校外学習や修学旅行を通して、校外での買い物学習を数回経験しており、活動に意欲的な姿を見せている。
ねらい	・欲しい商品を自分で選ぶ。 ・自分一人もしくは教師と一緒にお金を払って買い物をする。
授業の内容	① 事前学習 お店に行って買い物を知り、買いたいものを自分で選ぶ。 ② 事前学習 お店屋さんごっこを通して、物を買う練習をする。 ③ お店に行って実際に選んだものを買う。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・児童がどこに何をしにいくのかがわかるよう、お店の写真や買う予定のものの写真を示した。 ・お店の雰囲気が出るように、たくさん商品を用意し、好きなものを自分で選ぶことができるようにした。 ・おもちゃのレジやお金、かごを用意し、実際にお金の受け渡しを行えるようにした。 ・お店の雰囲気が出るように、お店で流れているような BGM を流して雰囲気づくりをした。 ・買い物に行かない児童は、教室で買い物の練習を行った。
授業を終えて	・自分が選んだものを買に行くとすることで、児童たちは買い物に行くことを楽しみにしていた。 ・買うものを選んでる写真や、実際にお金のやり取りをするときなど、ふりかえりで写真を見ることで、客観的に自分の行動を振り返ることができたと感じている。 ・本学年は9名の児童がいるため、2回に分けて買い物学習を行った。時間内に終わるため、分けて行ったことで余裕を持って帰ってこれたところがよかった。 ・買ったタオルは、次の単元の「掃除をしよう」で使う予定のものであったため、自分が選んだタオルを使って学習することで、タオルを買に行き必要性を持たせることができたと感じている。 教室で事前学習 をしている様子  お店で買い物を している様子   

「ボールであそぼう」

小学部 1年生「自立活動」

対象児童	小学部1年児童 ・筋緊張が入りやすく、緩めるコントロールが難しい。 ・手足の支持性が弱い、体幹には力を入れやすい。 ・言葉の理解が高く、ある程度教員の言葉かけで力を入れることができる。
ねらい	・筋緊張をゆるめる。 ・よつばい姿勢を保持するために、手や足への荷重感覚を入れる。
授業の内容	個人の活動の際に、週1回程度ファシリテーションボールでの活動を取り入れている。 ①仰臥位で、腰や肩甲骨あたりに小さいボールを入れて、軽い力で圧を加えたり、左右に揺らしたりして緊張がゆるむように言葉かけをする。 ②仰臥位からボールを抱きしめた姿勢でボールごと側臥位を経て、よつばい姿勢になる。 下肢は、腰を屈曲させて脛から足の甲が床につくように整え、手は、肘を伸ばして手のひらが床に着くように設定する。 本人が姿勢に慣れたら、前後に少し動かし手荷重を感じられるようにする。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・活動や児童の体格に合わせて、ボールのサイズを選択し、行った。 ・児童が不安にならないよう、言葉かけをしたり、姿勢に慣れることができるように、十分に時間を取ったりしながら行った。 ・本人の動きを尊重し、ファシリテーションボールでの活動が楽しいものと思えるように取り組んだ。
授業を終えて	・緊張が入りやすい児童だが、ボールを使うことで、力を抜きやすい姿勢になり、緩めることができた。 ・支えがない状態では、よつばい姿勢が難しい支持力の児童だったが、ボールを使うことで、無理なく手足に荷重をかける活動ができた。 ・活動を繰り返すことで、「ボールしようか」の言葉かけに、笑顔でうなずいていた。児童にとって楽しい活動として、取り組むことができてよかった。

文責：小学部 高橋 恵里

「からだをうごかそう！！」

小学部2年生「自立活動」



ベッドサイド端座位姿勢

対象児童	小学部2年1組 児童 Aさん 対象児童は人工呼吸器を利用しており、能動的な動きが少なく、体温調節が苦手
ねらい	・他動的に全身を動かす ・抗重力姿勢に慣れる ・他動的に体を動かす中で、本児の能動的な反応、動きを捉える
授業の内容	1 (クラス全員で)歌遊び「うどん粉こねこね」 2 手足及び腰部、肩(肩甲帯周辺)と手指足指など末梢のマッサージ 3 左右側臥位姿勢、うつ伏せに近い左右側臥位姿勢 4 ベッドサイドでの(介助)端座位姿勢 5 (介助)ゆらゆら椅子 6 バルーンでの(介助)座位 7 振動スピーカーをつかった動画鑑賞(お楽しみ) 4～6は看護師の協力が必要である。4～7はその日の体調や取り組み時間によって選択する。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	1, 2を実施していると表情が緩むことがあるので、見逃さない様にし、表情変化を感じたら、「楽しいなあ。」などの言葉かけを行った。また、比較的激しい動きが好きなので、体調によっては、少しオーバーに実施すると、表情がより緩んでいるように感じられた。 3～6については看護師のサポートが必要となり、あらかじめ、取り組みの時刻を決めておき、援助を要請した。 3は少し苦手な動きで、うつ伏せ近くまで倒すとちょっと迷惑そうな表情をする。 4～6では介助している教員に少しもたれるような姿勢(後傾)気味をとり、安全を確保する。  5 ゆらゆら椅子姿勢  7 振動スピーカー
授業を終えて	基本的に児童の身体状況が重度になるほど、看護師のサポートが必要だと、改めて感じた。

文責：小学部 根本貴明

「ゆらゆら椅子の取り組み」

小学部 3 年生「 自立活動 」

対象児童	小学部3年 A さん 友だちや教師との会話を通じてのコミュニケーションが好き。 身体を反らしたり、腕を引き込んだりと、筋緊張が少し強い傾向が見られる。 床上座位は基本的に教師の介助が必要。座位姿勢の際に、一定時間顔を上げることは可能。
ねらい	ゆらゆら椅子を使って頭部挙上の時間をのばす。
授業の内容	【期間】 2025 年 11 月 4 日～12 月 23 日の自立活動の時間 【内容】 ①マットで臥位姿勢になり身体をほぐす。主に下肢の筋肉中心におこなう。 ②教師と一緒にゆらゆら椅子に座り、左右の揺れに対して、なるべく頭を上げるようにする。 ③主に小刻みな揺れを起こして、深層筋群への刺激にアプローチする。 ④座位姿勢をとっている間、本児の好きな電車などの話題をもとに話をする。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	【ゆらゆら椅子とは】 この椅子は、10 年前に本校に在籍されていた教師が考案されたもの。バランスボードが椅子になったようなもので、主に左右の揺れを引き起こすことで、座っている子どもがバランスを取ろうと姿勢を変えたり、維持しようとしたりするねらいがある。本授業では、小刻みな揺れを加えることで、姿勢を維持させようとするのをねらいとしたが、他にも、立ち直り反応を引き出したリや側弯傾向の子どものストレッチの効果も期待される。また、椅子の向きを変えることで、ロッキングチェアのような前後の揺れを活かして、立ち上がりの練習にも使うことができる。  
授業を終えて	この取り組みでは、毎回①箱型椅子②ゆらゆら椅子③箱型椅子の順番で座ってもらった。頭部挙上の時間は、毎回ばらつきは見られるが、箱椅子に比べてゆらゆら椅子に座ったときに顔を上げ続けることが多かった。自分で姿勢を保持しようとした姿が見られたのは、ゆらゆら椅子の揺れも一つ要因として挙げられるが、それに加えて、顔を上げ続けることが多かったときは、本児との会話も多かった。肢体不自由校における自立活動は、指導をする際に身体的アプローチが多いが、会話等を通じて楽しいと思ってもらえるような心理的なアプローチも大事なことでありと再度気づかせてもらった取り組みとなった。

「歩いて、今日はどこまで行こうかな？」

小学部 4 年生「自立活動」

対象児童	小学部4年女子児童 1 名 【身体状況等】車椅子(自走可能)・手指少しブレあり、目的物を指すのに中心がブレてしまう。不定期に特に左足の腫張と痛みが出現し立位不可になる事がある(特に冬場)。本児の疾患との関係性は不明。コミュニケーション良好。不明瞭な事はあるが、会話ができる。
ねらい	・PC ウォーカーか SRC ウォーカーを使用し、自分の決めた場所まで歩き、教室まで帰ってくる。(歩行能力の向上) ・目的地では自分の決めた活動をし、粘り強くやり通す。(筋力強化 手指を使った活動)
授業の内容	ふれあいマッサージ、マットでのストレッチ、SRC ウォーカー歩行、PC ウォーカー歩行、介助歩行、ゆらゆら椅子でのバランス強化、立位台を使っての立位、中間姿勢での活動、手指活動(ペグさし、つまみ、数を数える活動など)、ごっこ遊び、ホールでの歌唱(主に童謡)を本児のその日の体調や希望に応じて週に 4 日行っている。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	この日の活動は、「ブーブで歩く」「2 階行く」と言ったので、PC ウォーカーで歩き、2 階の自立活動ホールまで行った(写真①)。そこで「かいだんする」と階段の昇降活動をし(写真②)、中間姿勢でままごとをした。みかんを1つずつお皿に入れていき、「これ食べて」など会話を楽しみながらごっこ遊びをした(写真③)。 その日によって SRC ウォーカーで保健室まで行き、様々な人とのやり取りを通してコミュニケーションを取る活動もしている。  ① PC ウォーカー歩行  ② 階段の昇降活動  ③ 手指活動とごっこ遊び 普段から少しでも足を動かすため、また減量のために本児の希望を尊重しつつ、歩く活動ができるように声をかけている。歩いていく場所も自分で決めて見通しを持って活動できるようにしている。
授業を終えて	① この日は本児の体調が良かったので自分で PC ウォーカーを選び、頑張って歩くことができたのでたくさん褒めた。②階段の昇降は、降りる時に一歩ずつゆっくりと足底をついて降りられるように言葉かけをしていきたい。③手指を使ったごっこ遊びを通して、会話を楽しみ、語彙が増えていったらと考えている。入れ物からお皿へみかんを並べながら数を一緒に数えることができた。日によっては10まで数えることができるようになってきたので、数を覚えることで今後お金を使ったお買い物ごっこなどもできたらと考えている。

文責：小学部 磯部美希・森本りょう

「表現あそびをしよう」

小学部 低学年「体育」



対象児童	小学部1・2・3年生児童 30名
ねらい	・音楽の流れている場所で教師と一緒に手や足を動かそうとしている。 ・音楽に合わせて教師と一緒に手や足、体を動かしている。 ・音楽のリズムや教師の言葉かけで意欲的に手や足、体を動かしている。
授業の内容	曲のリズムやイメージに合わせて動きをつけて、その曲が流れている間、ムーブメントスカーフを持ってそれぞれの動きを行う。 「ちょうちょ」→大きく上下に動かす 「ブンブンブン」→早く細かく動かす 「ゆらゆらみのむし」→左右に動かす ・はじめは1枚のムーブメントスカーフを学年内の児童2～3人程度で持って動かす。 ・慣れてきたら学年混合で2～3人のグループを作って行う。 ・最後は、学年混合でパラバルーンを持って、曲に合わせて動かす。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・聞きなじみがあり、曲調の違いがあって、動きが連想しやすい曲を選んだ。 ・ムーブメントスカーフを使うことで、動きが小さい児童も視覚的に自分の働きかけを感じられるようにした。 ・またムーブメントスカーフを共有することで、友だちと一緒に楽しめるようにした。 ・説明のスライドで、それぞれの曲に出てくる生き物のイラストを動きに合わせて、動かした。 ・スカーフを持ち続けやすくするために、洗濯ばさみ付きのリストバンドを作成した。 ・テーマを昆虫に絞って選曲した。
授業を終えて	・スカーフを気に入って、自分で動かそうとする児童の姿が見られた。 ・わかりやすい動きを設定したことで、曲を聞き分けたり、教師の言葉かけを聞いたりして、1人で動きを行うことができる児童がいた。 ・自発的な動きが少ない児童も、友だちと一緒に1枚のスカーフを持つことで友だちからの動きを感じて活動に参加することができた。

文責：小学部 塩崎 史香・山口 則子・高橋 恵里

「せきエチケット」

小学部 高学年「体育」



対象児童	小学部高学年。児童全員がバギーや座位保持椅子を使用している。 数名の児童は医療的ケアが必要である。
ねらい	・健康な生活に必要な事柄について知る。 ・清潔について知る。
授業の内容	・感染症の流行する10月に行った。 ・座学になるので学年単位で場所は教室でおこなった。 ・教材を用いて咳やくしゃみが2メートル程度飛ぶことを学んだ。 ・知識を深めるため、マスクについての絵本の動画を鑑賞した。 ・実際にマスクを装着して使用方法を学んだ。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	円状に切った段ボールにウイルスのイラストを描き、それに2メートルのスズランテープを貼り、一人ひとり飛沫の飛ぶ様子を体感できるようにした。 
授業を終えて	今となっては子どもたちにとっても馴染みの深いマスクだが、改めて正しい知識を確認することができた。感染症の学習以外にも、保健領域が充実すると思った。

文責：小学部 有友勇人・森大樹・福本隆行

「注文の多い料理店～えらんでみよう～」

小学部 いちごグループ「ことば・かず」



対象児童	小学部高学年 いちごグループ(第Ⅱグループ) 5名
ねらい	ア:言葉がもつ音やリズムに触れたり、言葉が表す事物やイメージに触れたりしている。 イ:絵本や事物を見て、示された身近な事物や事柄を注目や発声、身振りで選んでいる。 ウ:言葉の表すイメージに触れ、感じたことを身振りや声、表情で表し伝えようとしている。
授業の内容	①注文の多い料理店の絵本を読む。全てを読むと長いため、宮沢賢治独特の言い回しは残しつつ抜粋して読む。全て読んだのは初回のみで、以降は授業する場面のみ音読した。 ②場面ごとに2つの選択肢から、カードを選んで行動する。(写真②) 例)料理店で注文を受ける(第二場面) 指示:「靴をお脱ぎください」 (選択肢) 靴を「脱ぐ」「脱がない」 脱ぐ→靴を脱いで足元に人工芝マットを敷く (写真①) 脱がない→手で人工芝マットに触れる 指示:「壺の中のクリームを体に塗ってください」 (選択肢) クリームを「塗る」「香りをかぐ」 塗る→手や足にボディークリームを塗る 香りをかぐ→クリームの香りをかぐ 一度の授業で3つの指示を場面ごとに3回繰り返し、1カ月間行った。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・絵本:いもようこ挿絵のものを使用。分かりやすいイラストでとてもよかった。 ・料理店の扉:段ボールで作って木枠に吊るし、押して入れるようにした。(写真③) ・選択肢カード:ドロップトークの絵を組み合わせで作成。握りつぶしてしまう児童がいるため、ラミネート加工をした。 ・選択肢の小物:視覚障がいがある児童がいるため、感触や香りを感じられる追体験を考えた。
授業を終えて	「生活年齢に合った教材を実年齢の授業に落とし込む」をテーマに、領域研修「広がる授業」での研究授業として行った。実践発表する中で、「絵本をいつまでも(高等部でも)使っていて良いのか」「実年齢に合った教材とはなにか」という意見が多くあがった。実年齢の教材は準ずる教科書などを参考に探することができる。「注文の多い料理店」という一見難しい教材でも、追体験という方法で児童が学ぶことができたと考えている。



文責:小学部 中島彰子・信國佐代子・奥田愛歌

「 オリジナルスライムフロースンドリンクを作ろう 」



中学部 Aグループ「 ぐらししぜん 」

対象生徒	中学部 A グループ 1年生4名、2年生4名、3年生7名(訪問生1名含) 計15名 重度重複障がい、視覚障がい、聴覚障がい、医療的ケア(吸引・経管栄養・酸素吸入・人工呼吸器) バギーもしくは座位保持椅子を使用。発語はないが表情や声、身体の動きなどで快・不快を表現したり、コミュニケーションをとったりすることができる。生徒によって差はあるが、手指を自発的に動かし、物に触れたり握ったりして触感を味わうことができる。
ねらい	・教師に自分の好みや作りたいものを伝えながらデザインを考える。 ・自発的に手指を動かし、スライムの感触を味わおうとする。 ・スライムに触って感じたことを自分なりの方法で表出する。
授業の内容	①大手コーヒーチェーン店のフロースンドリンクを参考に、自分の作りたいオリジナルフロースンドリンクのデザインを考える。 ②色付き紙粘土、ビーズ、スタンドグラスペン等の材料を用いて、カップの蓋にフロースンドリンクのクリーム部分を作成する。 ③洗濯のりと水を混ぜたものに絵具で色を付け、ホウ砂を溶かした水を加える。教師と一緒に割り箸を握り、腕を動かして素早くかき混ぜる。かたまってきたスライムを手に取り、感触を楽しむ。 ④色付きスライムを、デザインを見ながらカップに盛り付け、クリーム部分の蓋をかぶせて完成。 【おまけ】シェービングフォームや炭酸水など、様々な液体でスライムを作り、その違いを楽しむ。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・スライムの色や硬さの変化がわかりやすいように、透明のカップを使用して作成した。 ・ホイップ部分にかけるソースにスタンドグラス用のペン(100均)を使用した。粘度が適度で、垂れすぎることがなく、色の種類も豊富で乾くと半透明になり、ソースの質感を上手く表現することができた。
授業を終えて	・スライムに触れると、ひんやりとした感触に驚いた表情を見せる生徒が多かったが、自ら手指を動かし感触を楽しんでいる様子も見られた。触れる内に温度や硬さが変化していくので、生徒の様々な表情、動きを引き出すよい教材だと感じた。また、見た目にも華やかな教材で、完成したフロースンドリンクを嬉しそうな表情で見つめる生徒も多数おり、感触だけでなく目で見ても楽しめる教材だと感じた。



文責：中学部 徳永佳苗・田口幸司

「 「膝立ちぬ」と「うつ伏せぬ」 」

中学部 Aグループ「 自立活動 」



「膝立ちぬ」



「うつ伏せぬ」

対象生徒	中学部 A グループ 1年生4名、2年生4名、3年生7名(訪問生1名含) 計15名 重度重複障がい、視覚障がい、聴覚障がい、医療的ケア(吸引・経管栄養・酸素吸入・人工呼吸器) バギーもしくは座位保持椅子を使用。発語はないが表情や声、身体の動き等で快・不快を表現したり、コミュニケーションをとったりすることができる。生徒によって差はあるが、手指を自発的に動かし、物に触れたり握ったりして触感を味わうことができる。
ねらい	・膝立ち姿勢を維持することで、抗重力練習や覚醒を促す。 ・うつ伏せ、オンエルポーの姿勢を維持することで、排痰を促し、抗重力、首周りの筋肉の強化を図る。
授業の内容	・自立活動の時間で主に使用している。 ・前半に十分にストレッチやマッサージを行い、後半に膝立ち姿勢、うつ伏せ姿勢などに取り組む。 ・移動も可能なので、校内を散策して視覚からの刺激も入る。 ・膝立ち、うつ伏せ共に高さや角度を可変できるので、生徒に合わせて調整して取り組む。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・「膝立ちぬ」は、天板の高さ、角度を変えられることができるので、生徒に合わせて、前もたれ姿勢にもできる。 ・「うつ伏せぬ」は、上半身を支えるクッションの角度を変えられることができるので、股関節の可動域に制限がある生徒でも合わせることができる。下半身のクッションは、向きを変えると膝の可動域に制限がある生徒でも合わせることができる。 ・仰向けで使用することも可能。生徒に合わせてクッションをかさ増しして調整できる。
授業を終えて	・股関節の可動域の制限や定頸具合にもよるが、クッションやファンファン、タオルで隙間を埋めることで膝立やうつ伏せの姿勢を維持することができた。 ・角度をある程度変えられることで、排痰しやすく、生徒に合わせた姿勢を作ることができた。

文責：中学部 横田智幸

「みのまつりに向けて（フライドチキンを作ろう）」



中学部 Aグループ「美術」



対象生徒	中学部 A グループ 1年生4名、2年生4名、3年生7名（訪問生1名含） 計15名 重度重複障がい、視覚障がい、聴覚障がい、医療的ケア（吸引・経管栄養・酸素吸入・人工呼吸器） バギーもしくは座位保持椅子を使用。発語はないが表情や声、身体の動き等で快・不快を表現したり、コミュニケーションをとったりすることができる。生徒によって差はあるが、手指を自発的に動かし、物に触れたり握ったりして感触を味わうことができる。
ねらい	・みのまつりに向けて作るものを選んだり、制作したりする ・紙粘土やアルミホイルなど様々な素材の感触を感じる
授業の内容	① テーマの「アメリカ」の、有名な料理を選ぶ。（投票でフライドチキンに決定） ② フライドチキンの芯材を作る（木のスプーンにアルミホイルを巻き付け握って成型） ③ フライドチキンの外側を作る（紙粘土に絵具を混ぜ、こねて心材の周りを覆う） ④ フライドチキンの衣を作る（着色し、乾燥させた紙粘土をおろし金で削る） ⑤ フライドチキンに卵液と、衣をつける（水ボンドに黄色を混ぜ卵液に見立てる） ⑥ 乾燥させ、塗膜スプレーをして紙コップに盛り付けて完成（紙コップには MFC（ミノタッキーフライドチキンのシールを貼る）
教材・教具の紹介 （工夫した点）	・質感やディテールを本物に近づけられるように、盛り付けていく塑像と削っていく彫刻の作業を取り入れ、同じ紙粘土でも変化を持たせた。 ・作り方は卵液（黄色ボンド水）に入れてから、衣をつける、というふうに揚げはしないが、工程を料理に似せて取り組めるようにした。
卵液に漬けて… 衣にまぶす！ 愛情を込めて…	
授業を終えて	・制作する中で、こねる・叩く・握る・削る・挟む・まぶす・貼るなどいろいろな動きを手や道具を使ってアプローチできた。

文責：中学部

横田智幸

「リサイクルはがきをつくろう」

中学部 B グループ「職業家庭」

対象生徒	中学部 B1・B2 グループ生徒計 17 名。発語はないが、掴む・引っ張る・ちぎるなど、自分の手を動かして作業できる生徒がいる。
ねらい	・ リサイクルに興味・関心をもつ。 ・ 手を使って作業する。 ・ 自分の好みの色や模様づけをして制作する。
授業の内容	①あらかじめ水に浸しておいた牛乳パックからフィルムを剥がして取り除き、残った紙の部分を手で小さくちぎる。 ②ミキサーに水・洗濯のり・ちぎった紙・好きな色の絵の具を入れ、攪拌する。攪拌したものを型に流し込み、水分を切る。 ③色紙を型抜いて作った星形やハート型の模様を置き、一週間程度乾燥させる。 ④作品鑑賞をし合う。   
教材・教具の紹介 (工夫した点)	各家庭から使い終わった牛乳パックを持参していただいた。生徒自身に関わりのある身近なものを原料として使って制作でき、リサイクルを意識することができる教材である。制作には、市販の「紙すきセット」を使用した。型が網目状のはがきサイズになっているので、どの生徒でも同じ形になるよう制作でき、型に攪拌物を流し込んだ後も手で押し付けるだけで容易に水切りできた。
授業を終えて	生徒たちは、フィルムを剥がしたり紙をちぎったりするなど、自分のできる力を大いに使って作業することができた。細やかな手の動きが苦手な生徒でも、意欲的に作業することができた。また、自分の好きな色の絵の具を複数の中からタッチして選び、はがきの色を決めることもできた。同じリサイクルはがきでも、色や模様、はがきの厚さなどで個々の個性を出すことができ、味わい深い作品ができあがった。

「リアル野球盤」

中学部 Bグループ「保健体育」

対象生徒	中学部1～3年生 Bグループ17名 Bグループは、人数の関係で2班に分かれて授業している。 障がいの状況や活動に対しての意識の違いや得意不得意等によって、生徒間での課題の差が大きい。認知面では、概ねの生徒が文字を読むことや数の概念を理解することが難しい。身近なものや簡単な二択を理解し選択できる生徒が数名在籍する。行動面では、独歩が可能な生徒や、介助歩行で活動が可能な生徒、歩行器を使用している生徒など実態は様々だが、自ら移動できる生徒が多い。コミュニケーション面では、自ら発語により伝えられる生徒や、二者択一など選択肢を示すことで、意思の表出が可能な生徒が在籍している。
ねらい	・道具を操作して、基本動作を身につけることができる。(知・技) ・ボールを使った動きの中で、楽しさを表現することができる。(思・判・表) ・野球の試合を通して、友だちと協力しようとする態度を養う。(学・人)
授業の内容	◇攻撃(バッティング) ・バットを持って、打つ ・目標に向かって打ち分ける ◇走塁 ・目標(1塁ベース)に向かって移動する
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・グローブ(革の匂いや重さなど体感する) ・モニター(本日の流れと目標の掲示)・タブレット端末 ・バット・ボール・ティースタンド・ベース(目標物)・コーン(目標物)・打撃補助用具 ・ヒット、アウトなどの的　・スピーカー(活動時のBGM用)   
授業を終えて	初回はバッティング形式で行い、授業の回数を重ねるごとに走塁や的に当てる目標を決めて徐々に進めていくことで生徒も競技に慣れ、少しずつ内容を理解していく様子がみられた。 バットの長さや持ち手の太さを選択できるようバットの種類を複数準備したことや、高さ調整できるティースタンドを使用したことで、それぞれの得意な動きなど実態に合わせてゲームを展開することができた。打席に立って自分のバットにボールが当たると、その感覚や遠くに転がっていくボールを目で追うなど、できた喜びを表出する生徒の姿も多く見受けられた。試合形式の回では、ヒット・アウト・ホームランの的を所定の場所に設置し、守備を的にしたこと視覚的にもわかりやすく、ゲームを展開することができた。

文責：中学部 美馬高司・高島愛

「自分たちでお楽しみ会を企画して楽しもう」

中学部 C1グループ「社会」



対象生徒	中学部 1 年生が1名、3年生が3名、計4名の生徒 意思疎通は会話で行うことができるが、友だち同士話し合うことは難しく、教員の手助けは必要である。
ねらい	・自分の意見を全員に発表する。 ・友だちの意見を聞き、全員で話し合って決めることができる。
授業の内容	・お楽しみ会で、自分が食べたいお菓子・飲み物をタブレット端末で検索して決める。自分がやりたいく、また全員でできるゲームを考える。 ・全員で話し合って、当日どのお菓子・飲み物を飲食するかを決める。 ・それぞれ考えたゲームを少し体験してみる。 ・話し合って、どのゲームにするかを決める。 ・飾りつけを作る。 ・当日全員で楽しむ。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・パワーポイントで、お楽しみ会までのスケジュールを伝え、見通しを持たせた。 ・自分自身が飲食したいものだが、全員で飲食できるものを選ぶよう意識づけさせた。 ・タブレット端末を1人1台使用し、自分が飲食したい、やりたいゲームを検索させた。 ・上限金額を提示し、その中に納まるように、電卓で計算させた。
授業を終えて	校内でお菓子などを飲食できることに、とても喜んでいる生徒が多かった。日頃から自分が飲食しているものを検索することは、全員積極的に行い、また自分の意見として堂々と発表することができた。ゲームは、自分もしたいが、「全員でできるゲーム」をそれぞれが意識して選ぶことができた。話し合いでは、食べることができるお菓子が少ない生徒のことを気遣って、その生徒が食べることができるものを全員で決めることができた。また、当日体調不良で欠席となってしまう生徒に対して、お菓子をどうするか問うと、「かわいそうだから、分けてあげる。」と個包装のお菓子を分けようという優しさが見られた。欠席していた生徒が登校してきたときには、全員でできなかったゲームを昼休みに再度実施することもできた。

文責： 中学部 植阪可織

「やってみよう！モルックモルック！」

中学部 A グループ「保健体育」

対象生徒	中学部 A グループ生徒14名(1年生4名、2年生4名、3年生6名(訪問生1名含)) ・すべての生徒が、日常的に医療的ケアが必要である。
ねらい	・障がいのある方や老若男女問わず、シンプルなルールで取り組みやすいモルックを体験しながら、スポーツの楽しさを感じる経験を積む。また、外国(モルックはフィンランド発祥)のスポーツを知ること興味の世界を広げたい。 ・簡単なルールを理解しようとする。 ・笛の合図を聞き、自分の番であることを意識する。
授業の内容	毎火曜3・4時限目(40分) 全5回 ① 始まりの挨拶 ②出席確認・体調共有 ③ラジオ体操 ④競技の簡単なルール説明 ⑤ チーム分け、チーム名決め、順番決め ⑥ゲーム開始 ⑦振り返り、最後の挨拶
教材・教具の紹介 (工夫した点)	モルック棒 モルックを知る第1歩として、授業のはじめに1人ひとり触って感触を確かめた。「結構重たいね」「固いね」「落としたらすごい音が鳴るね」など生徒と教員間で様々な感想があった。  スキットル 1～12という馴染みのある数字が飛び交うため親しみやすそう。  モルッカーリ(今回は使用していない) 投げる位置は作らず、ペアの教員やチームメイトと相談して投げる位置を決めた。 
授業を終えて	気温や生徒の体調などを考慮し、体育館で行なった。体育館で行なうと、木が床に当たり音がより鮮明に響くことで、ゲームの進捗状況が分かりやすかったり生徒の表出が出やすかったり、聴覚優位の生徒が多い本グループの実態には合っていたのではと考える。ペアの教師とコミュニケーションをとりながら、できるだけ自分の力でモルック棒に触れたり落としたりしようとする気持ちが見られたり、周りに注目されながら自分の番であることを意識して取り組むことができた。

文責：中学部 土肥祥子

「ICT を活用したミシンの制作実習」

中学部 Cグループ「職業・家庭」

対象生徒	中学部1～3年生 Cグループ7名 このうち4名は自分で積極的に挙手し、発言・説明ができる。 3名は言葉でのコミュニケーションが難しく、絵カードやタブレット端末を活用し、自分の意思を伝えている。
ねらい	・制作に使用する用具の名称と使い方を理解する。 ・ICT 機器や支援ツールを活用し、制作や交流に取り組む。
授業の内容	2学期最初の単元(全5時間)で、アイロンやミシンの基本的な技能を活用しながら、「ポケットティッシュケース」の制作に取り組む。作業では、タブレット端末を活用し、生徒が主体的・協働的に学習できる環境を整える。ペアの生徒同士でミシン縫いやアイロン作業の様子を撮影し合い、その動画を振り返りの場面で活用することで、自分の姿を客観的に捉え、めあてに照らし合わせて振り返る力を養う。 最後に鑑賞する場を設け、そこで感想を伝え合うことで、友だちの作品の良さに気付くとともに、その学びを今後の自分の作品作りに生かそうとする態度を育てたい。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	■タブレット端末の活用 ペアの生徒同士でミシン縫いやアイロン作業に取り組む様子の動画を撮影し合う。その動画を学習時の交流や振り返りの場面で活用することで、めあてに対する自分の姿を客観的に振り返る。その際、良いところや既習事項が生かされているところなどを全体で確認させ、次の作業への意欲を高めさせたい。 作品発表では、タブレット端末で撮影した作品を見せながら紹介する。言葉だけの説明よりも視覚支援があることにより、聞き手も興味を持って話を聞くことができ、質問の幅も広がると考える。 ■Google スライド ミシンやアイロンの説明では、導入部分でスライドの一部を意図的に隠すという「しかけ」をし、生徒の興味関心を高めさせる。生徒は見えている部分を手がかりにして、隠れている部分を探っていく。 ■生徒の考えが生かされるような制作 自分が作ったものであるという達成感を得られるようにするため、制作の中に生徒の考えが生かされるよう、布の選定やレース、ワッペン等の飾りつけは生徒自身で考えて行う。
授業を終えて	導入部分では、Google スライドの一部を隠してクイズ形式で行ったことで、生徒は関心を持ちながら、既習事項の定着を図ることができた。またタブレット端末を活用しながら、実習を進めたことで即時評価ができ、振り返りの場で活用することで、生徒にとって分かりやすい学びとなった。ワッペンやリボン等の飾りを選ぶ場面では、生徒が夢中になって組み合わせを考え、楽しむ様子が見られた。このように「自分が作った、自分にしか持っていないもの」を作ることによって、ものに対する愛着心や作る喜び、達成感を味わうことができたように感じる。最後に発表や鑑賞を行ったことで、更に新しい物を作りたいという意欲や新たな発想の広がりにつながることができた。





「^{カフト}Kahoot!でクイズ大会」

中学部 Cグループ「総合」



対象生徒	中学部1～3年生 Cグループ7名 このうち4名は自分で積極的に挙手し、発言・説明ができる。 3名は言葉でのコミュニケーションが難しく、教師が選択肢を用意し答えたり、絵カードやタブレット端末を活用したりしながら自分の意思を伝えている。
ねらい	生徒の実態は様々であるが、どの生徒も主体的に参加できる授業を展開する。
授業の内容	9月の防災月間に、地震時の防災についての学習を行った。教師の説明だけでなく、生徒が主体的に関わることでできる授業の展開を考え、授業の前半は映像を使った授業を行い、後半にkahoot!アプリを使ってクイズ大会を行った。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	学校や家庭でクイズ大会を開催できる無料の学習アプリ「Kahoot!」を利用して授業を展開した。出題者がクイズを作成し、参加者はゲーム PIN を入力して参加する。基本的に4択問題で、早く正解するほど高得点が得られる。Kahoot!は教育アプリとゲーム番組が融合したような体験ができ、生徒はタブレット端末などのデバイスを使ってクイズに回答できる。 [アカウント登録方法] 1, Kahoot!の公式サイトにアクセスする。 2, 「サインアップ」をクリックし、アカウントの種類(教師、生徒など)を選択する。 3, 勤務先などを選択し、メールアドレスとパスワードを設定するか、google アカウントなどで登録する。 [クイズの作成方法] 1, ホーム画面から「作成」ボタンをクリックし「Kahoot!」を選択する。 2, クイズ形式を選択する。無料版では4択クイズと○×問題が利用可能。 3, 問題文と選択肢を入力し、正解を設定する。 4, 「問題追加」ボタンから2問目以降を作成できる。 5, 回答時間やポイントなどの設定も可能。 [クイズの出題方法] 1, 作成したクイズを保存する。 2, クイズを起動すると、参加コード(ゲーム PIN)が発行される。 3, 参加者は、Kahoot! の回答ページ(Kahoot.it)でゲーム PIN を入力しクイズに参加する。 4, 参加者が揃ったら、出題者は開始ボタンを押してクイズを始める。 [その他の機能] ・作成したクイズはライブラリから確認できる。 ・他のユーザーが作成したクイズを検索して利用することも可能。 ・自宅学習やフラッシュカード機能など、様々な学習モードがある。
授業を終えて	ゲームや、タブレット端末などは、最近は大変身近にあるため抵抗感は少なく、全員が主体的に楽しめるアプリである。言葉でのコミュニケーションが難しい生徒でもボタン1つの操作なので、積極的に参加できる。ボタンを押すだけで最後に結果発表が出るため、自分の順位がわかり、3位以内の生徒はアプリ内で表彰される。生徒はゲーム性があることで大いに盛り上がり、楽しむことができ、本グループには最適の教育アプリだといえる。

文責: 中学部 原木

「野球」

中学部Cグループ「保健体育」

対象生徒	中学部Cグループ生徒7名(1年生2名、2年生3名、3年生2名) 簡単な計算や読み書き、意思疎通を会話で行うことができる。友だち同士での会話は難しい。 独歩や介助歩行、車椅子での自力走行、介助移動、腕を上手く操作できる生徒もいる。
ねらい	・身体動作と簡単なルールの理解。「打つ」「投げる」「守る」といった基礎的な身体動作を習得し、大まかなゲームの決まりを理解する。 ・集団参加と役割の遂行。「打つ」「守る」などの役割を通じ、チームメイトと協力するといった社会性を養う。 ・成功体験と余暇活動。ルールや用具を使いながら「できた」という達成感を味わい、将来のスポーツ活動習慣につなげる。
授業の内容	毎木曜5・6時限目(50分) 全5回 ① 始まりの挨拶 ②体調確認 ③ラジオ体操 ④競技の簡単なルール説明 ⑤ 順番決め ⑥ゲーム開始 ⑦振り返り、最後の挨拶
教材・教具の紹介 (工夫した点)	打撃 バッティング用シートを作成。ホームベース上にティーをセットし、その上にボールを置いてバッティング練習を行った。 守備 虫取り網や「大谷グローブ」を使用。車椅子を利用している生徒の足元に転がったボールは教師がキャッチし、生徒の手元に置く。生徒はそのボールを掴み、走者をタッチしに行ったり、投げたりした。 走塁 打ってすぐに1塁へ走塁。守備側はボールを持ったり、1塁手に投げたりしてアウト、セーフを行い、簡単なルールが理解できるように練習した。      
授業を終えて	授業を通じて生徒たちは「打つ」「守る」「走る」という基本動作を楽しみながら学ぶことができた。ルールを生徒の実態に合わせ、簡略化したことで全員が試合に参加しているという実感を持ち、楽しさを共有できた。スポーツを通じた社会性を感じる場面が多々あった。

文責：中学部 岡上

「なにわの伝統野菜“大阪しろな”で紙漉きに挑戦」

中学部 Cグループ「理科」



対象生徒	中学部 C1 及び C2グループ生徒7名 会話ができる生徒、言葉の意味は理解できるが表出が困難な生徒が在籍している。全生徒がある程度の意思疎通が可能である。
ねらい	・SDGsや未来社会の課題を主体的に考える。 ・地域の特産品を通して、郷土への愛着を深める。 ・みのまつりにおける他者との関わりを通して、コミュニケーション能力の育成を図る。
授業の内容	1. 大阪関西万博における地元‘大阪’について取り上げ、‘なにわの伝統野菜’に関する知識・理解を深める(4時間)。 2. 廃棄野菜を和紙の原材料に加え、紙漉きを通して食品ロスの課題に取り組む。さらに資源の有効活用、持続可能な消費・生産システムについて考える(4時間)。 3. みのまつりにおいて、自分たちの作品を紹介する(2日間)。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	■使用野菜:なにわの伝統野菜“大阪しろな” ・根本、食害部、規格外などの廃棄部分を使用。繊維質が多く、加熱することで繊維が柔らかくなり、扱いやすくなる。 ■漉き方法: ・手に持ちやすく準備・片付けが容易である500mlの空ペットボトルを使用。 ・繊維を均一に分散させ、紙の強度を高めるために PVA のりを使用。更に書道用紙も併用。 ■用途:メッセージカードとして作成。今回の取り組みについて説明カードを添えて包装。   
授業を終えて	普段は捨ててしまうものでも、工夫次第で新しいものに生まれ変わることを実際に体験し、生徒たちは驚きと喜びを持って活動していたように感じる。手で触れ、形の変化を感じながら作業することで、ものづくりの楽しさだけでなく、「もったいない」という気持ちや資源を大切に作る心も育むことができるよう留意し指導した。SDGsについて学ぶことで、環境を守ることが自分たちの生活とつながっていることを理解する機会を持つことができた。

文責: 中学部 吉村江里

「夏祭りを体験しよう」

高等部 Aグループ「生活（社会コミュニケーション）」



対象生徒	高等部 A グループ8名。全員車椅子を使用。医療的ケアや発作など体調の変化に配慮しながら授業を展開している。物事や人との関わりの中で表情や声、身体の動きで表現表出できる。
ねらい	身近な人や行事に向けて社会の出来事などに興味関心を広げ、制作活動や体験活動を通して感じたことを伝えようとする。
授業の内容	週2回2コマ(計60分)の授業×4回程度で作品(かき氷や看板)や視線入力機器を使って花火の打ち上げ体験を行った。 1:折り紙でかき氷の作成 2:看板の作成 3:視線入力機器を使って花火の打ち上げや射的
教材・教具の紹介 (工夫した点)	1・2折り紙でかき氷の作成&看板の作成 作り方の動画をみて見通しがつくようにした。どの色の折り紙を使うか複数枚提示し、自分で選べるようにした。紙を折る作業や看板づくりでは教師と一緒に折ったり色を塗ったりした。 3:視線入力機器を使って花火の打ち上げや射的 専用の機器を使って、パソコンのマウスを視線で操作する仕組み。注視(見つめること)でクリックすることができる。手で操作することが難しくても、学習の幅や広がることが期待できる。
授業を終えて	制作以外に視線入力機器を使うことで、自分の視線で花火が打ちあがるという因果関係を理解して、たくさん花火を打ち上げることができた。また、花火以外のところにも注視することで新たな反応を見ることができ、「ここは、どうなる?」や「ここ見てみて」など生徒だけではなく、教師も一緒になって楽しむことができた。

文責: 高等部 大谷秀幸

「 段ボールアート 」

高等部 A グループ「 美術 」



対象生徒	A・高等部 1 年生8名を2グループ展開。グループは全員が車いすユーザーで、制作のときには道具等の支持にサポートが必要。
ねらい	・身近にあるものを使って、その時にできた形から連想して作り出す創作活動。 ・手先に触れる、つかむ、握る、たたくなど「つくった」という体験を得る。
授業の内容	A グループ週1回2コマ(計60分)の授業×8回程度で作品を完成させた。 ① 導入: サンプルの作品を提示し、どんな形にするかイメージする。 ② 制作の準備: 15センチ四方の段ボールを色んな方向からくるくる丸めて柔らかくする。 思い思いの形につくり、ボンドでとめていく。 ③ 制作: 段ボールをさらに形づくっていくために、段ボールをめくって皮のようにして水で薄めボンドを塗りどんどん貼り重ねていく。くつつくまでは手で押さえたり、洗濯ばさみでとめたりしながら作っていく。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・さまざまな形のサンプルを先に提示することで、イメージを共有することができた。 ・難しくとらえずにできるだけシンプルに出来るように伝えた。 ・段ボールをめくって1枚ものにして、たくさん作っておくことでスムーズに作業ができた。 ・洗濯ばさみを使うことで、形成作業がはかどった。
授業を終えて	昨年は、みんなで1つの段ボールアートに挑戦した。今年は1人1つの段ボールアートで大きな部分から細部まで作ることを体験することで、達成感を味わうことができた。

文責: 高等部 小倉秀・桑鶴朗子

「 スチレンボード版画 」

高等部 B/C グループ 「 美術 」

対象生徒	[高等部1年生 B グループ生活課程生徒11名] 自分なりに持つイメージを表現できる生徒が多く、丁寧に、または大胆に彩色したり、教師と共に制作に取り組んだりする生徒など、表現方法にも違いがありその実態は幅広い。 [高等部1年生 C グループ普通課程5名] 独歩で移動する生徒や車いすで移動する生徒から、四肢麻痺があり制作の際には介助が必要な生徒、医療的ケアがあり健康面に配慮を要する生徒、文字盤を使用してコミュニケーションを図る生徒までと幅広い。
ねらい	【B グループ】 ・曼荼羅模様を使って、一版多色版画の制作過程を経験する中で、色の組み合わせや版画ならではの風合いを味わい楽しみながら表現する。 【C グループ】 ・回転版画の制作過程を経験する中で、版を回転させて刷ることで重なり合う色や線から生まれる版画の風合いを味わい、楽しみながら表現する。
授業の内容	【B グループ】(一版多色版画:60分授業を5コマほど) ① 一般多色版画について知る。 ② 数種類の曼荼羅模様のデザインの中から下絵を選ぶ。 ③ 配色を考え下絵に色鉛筆で色付けする。 ④ スチレンボード上に下絵の用紙を置き、鉛筆などで強くなぞって溝をつける。 ⑤ 溝を確認し、さらに油性ペンでなぞり視覚的にわかりやすくし、さらに溝を深くする。 ⑥ 画用紙を版に固定し、版画ができるよう用意する。 ⑦ 配色デザインに沿って絵具を版に色を置き、画用紙に刷る。色ごとに刷る過程を繰り返す。 【C グループ】(回転版画:60分授業を4コマほど) ① 回転版画について知る。 ② スチレンボードにさまざまな道具で溝をつける。 ③ 画用紙をボードに貼り付け、版画の準備をする。回転する順番がわかるよう印をつける。 ④ 赤色の版画用絵具をボードに塗り画用紙を重ねて刷る。 ⑤ 90度ボードを回転させて置き、青色絵具をボードに刷り、画用紙を重ねて刷る。 ⑥ さらに90度ボードを回転させ、黄色絵具をボードに塗り、刷る。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・スチレンボードを使うことで彫刻刀などを使うことなく身近にある道具で凹凸を作ることが可能なので、安全に、より簡単に版画をすることができた。 ・モニターに簡単な版画制作過程動画を映して視聴することで、制作手順の見通しを持てるようにした。
授業を終えて	扱いやすい教材、身近な素材を使うことで、安全で簡単な方法で版画制作をすることができた。版画は版があれば比較的やり直しなどもしやすく、他の色を使った違う雰囲気の商品も作ることができるので、面白い教材であると感じた。

「ポップコーンの栽培・収穫・脱穀・調理まで」

高等部 B グループ「職業」

対象生徒	高等部1年生 B グループ11名 重度～軽度の知的障がいの生徒
ねらい	・ポップコーンの育成(種まき、追肥、水やり、除草)、ポップコーンの収穫、脱穀、選定を体験し、生産から出荷、消費までの流れを学ぶ。
授業の内容	1学期 草抜き、土づくり、畝づくり、種まき、追肥、水やり、除草 2学期 ポップコーンの収穫、脱穀、選定、調理実習、振り返り
教材・教具の紹介 (工夫した点)	ポップコーンの種を使用。 大陸の植物なので、比較的育てやすい。 朝と放課後の水やりをかかさずに行う。 苗が密集すると大きく育たないので、間引く。 間引いた苗を再度植えても大きく育つ。 カラスや小鳥、小動物などの害獣に茎をかじられたり、実を食べられたりするので、ネットなどで害獣対策が必要。 ポップコーンの実がなったら、収穫せずに夏休みに脱水・乾燥させる。 トウモロコシを近くに植えると品種が混ざってしまうので注意が必要。 調理時は、透明の蓋を用意すると中の様子が見える。 ホットプレートだと温度が上がりきらず、種が焦げるので注意が必要。 テフロンのフライパンだと空焚き状態になるので注意が必要。
授業を終えて	ポップコーンは、育てやすく、視覚や聴覚だけでなく、嗅覚や味覚、触覚を刺激でき、生産から出荷、消費までの流れが学べる非常に良い教材であった。 脱穀の軽作業は非常に職業に向いていた。 ポップコーンを食べながら、生徒のリクエストの映画を観ることで余暇を広げることできる。 肢体不自由の生徒や知的障がいの生徒の職業・作業・社理など横断的に幅広く授業展開できる教材である。

文責：高等部 武田 和樹

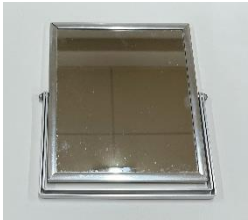
「肢体不自由校における調理実習の工夫」

高等部 Cグループ「家庭」



対象生徒	高等部1年Cグループ 肢体不自由生徒4名(男子3名、女子1名) バギーを使用している生徒1名 立位台を使用する生徒1名 独歩の生徒2名 四肢麻痺があり作業の際には介助が必要な生徒から、医療的ケアがあり健康面に配慮を要する生徒、文字盤を使用してコミュニケーションを図る生徒までと幅広い。
ねらい	・便利な道具を使って、安全と衛生に留意した調理をする。 ・調理の状態を確認しやすいように視覚的な工夫をする。
授業の内容	調理実習「簡単な和食(おにぎりのみそ汁を作ろう)」 1、日時・・・2025年10月6日(月)1～2限 ※7月に1回目の調理実習「簡単なお菓子(カップケーキ)」を実施した。 2、場所・・・本校調理室 3、事前学習・・・①「旬の食材」「おにぎりの具、みそ汁の具」 ②「計量カップ200ml、お米1合、みそ大さじ1の計量の仕方」 ③「だしの歴史と種類について」 4、材料・・・おにぎり(米、味のり、昆布、鮭フレーク) みそ汁(かぼちゃ、油揚げ、ねぎ、味噌、鰹節) 5、作り方 おにぎり・・・①ラップを敷き、味付けのり→ごはん→具→ごはんの順に置く。 ②おにぎりを握る。握るのが難しい場合は、おにぎりメーカーを使用する。 みそ汁・・・①かぼちゃと油揚げを幅1cmに切る。ねぎは小口切りに切る。 ②鍋に水を入れて沸騰させる。 ③かぼちゃと油揚げを入れて 中火で8分煮る。 ④かぼちゃが柔らかくなったら、ねぎを入れ、火を止める。 ⑤味噌と鰹節を混ぜた味噌だしを「味噌こし器」でこしながら入れる。



教材・教具の紹介 (工夫した点)	①グリップ包丁  ②指ガード  ③おにぎりメーカー  ④フードプロセッサー  ⑤ガラスボウル  ⑥計量カップ  ⑦曇り止め鏡  ①グリップ包丁・・・持ち手の角度を調整できる。体の力を使って切ることができるので、座ったまま使用するのにも向いている。 ②指ガード・・・安心して包丁が使える。指にはめて使用する。ステンレス製で錆びにくい。 ③おにぎりメーカー・・・ご飯や具材を詰めて押すだけで、簡単にきれいな形のおにぎりを作ることができる。 ④フードプロセッサー・・・ボタンを押せば、材料を切る、混ぜる、すりおろすなどができる。 ⑤ガラスボウル・・・透明なので、食材の色や形を確認できる。また、耐熱性なので、オーブンやレンジでも使用でき、調理の手間を省くことができる。 ⑥計量カップ・・・傾斜のついた内側の目盛りを上から見るだけで、簡単に計量ができる。腰をかがめて水平に目盛りを見なくてもよい。 ⑦曇り止め鏡・・・炊飯器で炊いた炊き立てのごはん、沸騰した鍋の中など、湯気や蒸気を生徒に見せることができる。バギーや立位台に乗ったまま、間近でのぞき込めないときでも鏡を使うことで遠くからでも調理の状態や様子を確認することができる。
授業を終えて	・ユニバーサルデザインのグリップ包丁を初めて手にした際、よく考えられている商品だと感心した。「ユニバーサル調理器具」と検索してみると、様々な道具が商品化されていた。本校の調理実習でも便利な道具を使用し、安全に楽しく調理実習ができるよう試みた。実際に、教員と一緒に道具を握って調理をする生徒もいれば、コツを覚え一人で道具を扱う生徒もいた。調理実習後にアンケートをとると、「おいしかった」「包丁で切るのが楽しかった」「自分で作れてうれしかった」「また作りたい」「家でも作った」などの意見が出た。 ・肢体不自由校の調理実習では、四肢の機能が制限される中、いかに五感(視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚)を刺激し、楽しさや達成感を味わう体験をさせることができるのか、授業の工夫が不可欠であると思った。 ・日常食の調理に関わる学習活動を通して、いかに生活体験を増やし、また日常生活を健康に送れるよう、今後どのような食育のアプローチができるのか、引き続き工夫を重ね改善していきたい。

「すごろくゲーム」

高等部2年 A1 グループ「生活（社会コミュニケーション）」

対象生徒	高等部 2年 A1 グループ生徒 4名 座位保持車椅子や車椅子を利用している。医療的ケアが必要な生徒、目の見えにくさ、音の聞きにくさのある生徒等、様々な実態の生徒が在籍している。
ねらい	・身近な人との関わりを仲間とともに楽しもうとする。 ・ゲーム内容の活動について理解してみようとする。 ・学習内容に興味を持ち、意欲的に取り組もうとする。
授業の内容	火曜日の5・6限と木曜日の5・6限が生活(社会コミュニケーション)の授業がある。 主に火曜日の授業で行った。前期(全14回) ① はじめのあいさつ ② 出席確認 ③ どんなきもち ④ ふれあいあそび ⑤ きょうの取り組み「2025大阪・関西万博ミyakミyakすごろく」 ⑥ ふりかえり ⑦ おわりのあいさつ
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・どんなきもちでは、直径30センチぐらいの丸い形の色画用紙(黄色と水色)を使い、両面にして黄色は笑っている表情で水色は泣いている表情にしたもの。表裏で表情を変えながら、生徒の前で見せながら「今の気持ちはどんなきもち？」と言葉かけをして生徒の気持ちを窺う。 ・＜準備物＞ 大きなサイコロ(1個) 名前の一文字をひらがなで書いたカード(教員と一緒にペンで書いたもの) 新聞「2025大阪・関西万博のすごろく」 ホワイトボードに新聞紙を貼るための棒磁石5本 ・自分の順番がきたら、サイコロを転がせるように工夫した。生徒によっては、手を添えて一緒にサイコロに触れたり、肘で押すようにしたりしてサイコロを転がした。 ・情報端末機器を準備し、手元ですごろくの出た場所のパビリオンの情報を検索して見せた。テレビ画面に映して見せる方が、音量が大きくて画面からの迫力も伝わり見やすかった。
授業を終えて	ある生徒は、サイコロを転がして自分でできたことを褒めると笑顔を見せて表情が緩んだ。 パビリオンの情報を得ることで、大阪・関西万博に興味を持てるようになった。 大阪関西万博に出かけられた教員から、実際の体験談を聞いたり、写真を見たりして情報を得ることができた。

文責：高等部 山川千雅子

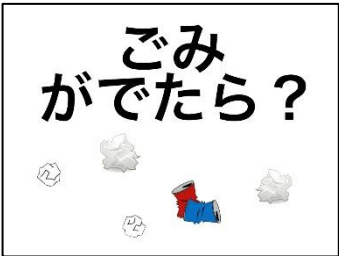
「年間の生活自然学習について」

高等部2年生 A2グループ「生活（自然）」

対象生徒	高等部2年 A2グループ 7名 バギーの生徒5名 独歩の生徒2名 2択程度の画面や絵カードのタッチで選択し、意思を伝えることができる。
ねらい	・手や身体を使い、身体を動かす楽しさを感じる。 ・課題へ積極的に取り組み、活動を楽しむ。 ・水や風や日光などに触れた際、季節により感じ方が変化していくことを体感する。 ・植物に旬があることや、季節により変化すること、種類毎に様々な特徴があることを知る。 【年間目標】身の回りにある生命や自然、ものの仕組みや働きに関心を持つ。
授業の内容	週2回 2コマ（計60分）の授業 以下の内容で実施。 “春を見つけよう【自然との触れ合い】【動物の飼育・植物の栽培】【季節の変化と生活】” 土筆の観察と作品づくり “季節の変化を感じよう【自然との触れ合い】【動物の飼育・植物の栽培】【季節の変化と生活】” 大葉栽培 夏に水遊びをすると何故か興奮することを体験する。（水鉄砲・水たたき・水飛ばし） “物の重さを感じよう 【物体が風を受けたときの軌跡を観察】 扇風機・うちわ・ブロワの力利用した観察や体験活動。 紐などを靡かせて風を可視化・モビール制作・紙切れ落とし・涼む 【氷の状態変化と重さの変化の観察】 溶けゆく様子を観察。前後の重量変化を計測。状態変化と質量保存の法則を学ぶ。 “秋を見つけよう【自然との触れ合い】【動物の飼育・植物の栽培】【季節の変化と生活】” 先輩から「バジル」を引き継ごう・・・先輩が春から育てたバジルの観察。先端部を摘ませてもらい、水差し栽培を実施。発根の観察や季節の移ろいによる栽培方法の変化を体験する。また引き継ぐことでより大切に扱おうとする心を育む。 “冬を感じよう 【自然との触れ合い】【季節の変化と生活】” 冬に身体を温めると気持ち良いことを感じる。（手浴・湯たんぽ） 植物の変化を知ろう。（紅葉や落葉の観察） 冬の野菜について知ろう。（給食献立の確認、実物の観察と野菜スタンプ）
教材・教具の紹介	特になし
授業を終えて	週2回繰り返し学習を行い、生徒たちが授業の流れや内容を理解して取り組むことができた。 季節の移ろいを体験し、その時々を楽しむことができた。 楽しみながら理科分野の実験を行うことができた。

「ごみ処理場見学に向けて～ごみについて学ぼう～」

高等部 A2グループ「生活社会コミュニケーション」

対象生徒	高等部2年 A2グループ 7名 バギーの生徒5名 独歩の生徒2名 2択程度の画面や絵カードのタッチで選択し、意思を伝えることができる。
ねらい	・宿泊学習で、関心を持って舞洲ごみ処理工場を見学できるよう、どういう場所なのかを知る。 ・様々な素材に触れて、特徴を味わい、知識や経験を増やす。 【年間目標】簡単なゲームや制作活動を通して身の回りの生活や社会に関心を持ち、感じたことを伝えようとする。
授業の内容	週2回 2コマ（計60分）の授業 以下の内容を前期に取り組んだ。 ① 舞洲ごみ処理場はどんなところ？（動画と写真、スライド） ② ごみのはなし（スライド） ・日常生活ではゴミがでる。ゴミをそのままにしておくと大変なことになる。ゴミはごみ箱へ。捨てられたゴミはどこへ行くのか。） ③ ごみ箱にごみを捨てよう（ゲーム） ④ ごみの分別のはなし（スライド、動画） ⑤ ごみを分別してみよう（ゲーム） ⑥ 缶モルックをしよう（ゲーム）
教材・教具の紹介 （工夫した点）	■②④では、アニメーション機能や効果音を使用して、動く絵本を見ているような教材にした。      ■③持ち運びしやすいごみ箱を準備する。生徒がごみを持って、手を離せばごみ箱に入るように、生徒によってごみ箱の位置を調整する。  

■④⑤・段ボール(小さく切り、紐で結んで持ちやすくする。)

・ペットボトル

・缶(けがをしないよう飲み口部分はテープを貼る)

を準備し、感触や色、音の違いを実際に触れることで経験させる。

ごみ箱を2つ用意し、それぞれに段ボール、缶、ペットボトルのマッチングができるようにする。



■⑥木製の棒ではなくて、缶をモルックとして使用する。

木製のピンも缶で使用する。缶に数字をつける。

テレビの画面に得点版や、投げている様子を中継して大きく映す。

投げる、落とすなど生徒によって取り組み方を変える。



授業を終えて

週2回で繰り返し学習をしていくことで、生徒たちが授業の流れや内容を理解して取り組むことができるようになった。

初めての物に触れることに時間がかかる生徒も、授業を重ねていくうちに自ら手を出して触れることができるようになった。ゲーム形式で楽しみながら取り組むことで、身の回りの生活や社会に触れることができたと考える。

そして、宿泊学習での舞洲ごみ処理工場への見学先では、授業で取り組んできた事前学習で見通しが持てたようで、「動画で見たね」「見たことがあるね」と、笑顔で見学を楽しむことができた。

文責: 高等部 紀之定克文・加藤寿美

「 光のたからばこ 」

高等部2年 A1グループ「 生活（自然） 」

対象生徒	高等部2年 A1グループ生徒4名 座位保持椅子や車椅子を使用している。医療的ケアの必要な生徒であり、活動の際にはサポートが必要である。
ねらい	・光の反射や明るさを知る。 ・光が当たった時の色の変化を観察する。 年間目標:「物のはたらきとしくみを知る」
授業の内容	毎週火曜日3・4時間目と水曜日5・6時間目に生活(自然)の授業があり、合計 2 コマ×6回の計12時間で行った。 ① 導入:光と色について。絵本「なにをたべてきたの?」を読み色について関心をもつ。またカラーセロハンによる光の色の変化を見て知る。 ② 前回の絵本の復習。カラーセロハンの重なりによる色の変化を知り、好きな色を選ぶ。箱を作る。(牛乳パックを切る) ③ 反射用のアルミホイルの筒を作る。アルミホイルによる光の反射を体験する。 ④ カラーセロハンとクッキングシートを貼る。 ⑤ 箱のまわりに好きな紙を貼り、完成させる。 ⑥ 完成した箱を見て光の反射と色の変化を知る。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	絵本:「なにをたべてきたの?」 使用したもの:牛乳パック、カラーセロハン、クッキングシート、色紙、マスキングテープ、両面テープ、携帯ライト、黒い布 ・絵本の中で色が出てきた際には、その色のカラーセロハンを目の前にかざして色の世界を感じられるようにした。 ・アルミホイルに光が当たって反射することを知るため、アルミホイルの筒を作る際にライトにかざしてキラキラする様子を観察した。 ・完成した箱を見る際には、より光を感じるために黒い布で覆った中で箱に光を当てた。また、反射を感じるために箱を上下左右に動かしてキラキラする様子を味わえるようにした。 ・完成した箱は、友だちの作品も体験することで、カラーセロハンの重なりによる色の違いや、アルミホイルの反射の違いを感じられるようにした。
授業を終えて	・カラーセロハンを使用することで、目の前で単色と色の混ざりあいの違いを感じることができ、好きな色になった時に生徒の表情も笑顔になっていた。 ・自然光や蛍光灯のあかりだけではなく、ライトを使用することで、より光の反射を感じることができた。また黒布を使用することで、より光に注目することができていた。

文責: 高等部 鎌田典子・松下恵子

「 によきによき建物をかこう 」

高等部 A1・A2 グループ「 美術 」



対象生徒	A1・高等部2年生4名、A2高等部2年生7名。A2 グループの2名以外は車いすユーザーで、ほぼ全員が制作の際に道具等の支持にサポートが必要。
ねらい	・舞洲工場の建物デザインを参考にし、宿泊学習の思い出を作品づくりに活かす。 ・手先や腕を動かし、「制作した！（例：色を塗った！）」という実感を得る。 【年間目標】造形素材の形や色などを感じ親しみながら、道具や用具を用いて表現することを経験し、創造することの楽しさを知る。
授業の内容	A1・A2 それぞれ週1回2コマ(計60分)の授業×6回程度で作品を完成させた。 ① 導入：宿泊学習の振り返り、舞洲工場の紹介、デザインした作家の紹介、世界のおもしろ建築の紹介を行い、楽しく制作へのイメージを膨らませる。 ② 制作の準備：10センチ四方のダンボール片にマジックで建物の形の部品(三角や丸、アーチ等)の形を描き、切り抜いた形を台紙のダンボールに貼り、ダンボールスタンプを作る。 ③ 制作：画用紙をドレッシングボトルに入れた折り染め液を手で握って出し、ドロップングのような手法で空の色を染める。ダンボールスタンプに自分で選んだ色の絵具を刷毛で塗る。ダンボールスタンプを画用紙に押し、しっかり手や肘で押さえてスタンプ、版を押す。いろいろな形や色のスタンプを画用紙の縦方向に押し、建物を表現する。(空へによきによき伸びていく建物)
教材・教具の紹介 (工夫した点)	■大きなアクリル絵具のボトル・・・生徒が色の違いを視認しやすく、選択した色のボトルを直接掴んで示すこともできたので、用意してよかった。 ■ダンボールスタンプ・・・10センチ四方で任意の形に切り抜いたダンボールを台紙のダンボールに貼り、その凹凸で版になる。手や肘など身体のいろいろな部分を使って押すことができる。たくさんの形を用意し、版を組み合わせることで、バリエーション豊かな建物の作品ができあがる。版として使った後のダンボールはいろいろな生徒の版を一つに貼り合わせるとダンボールの巨大な壁画の合同作品になり、おもしろい作品ができあがった。
授業を終えて	昨年度より絵具のボトルを使って「色を選ぶ」という場面を繰り返し設けてきた。2年目になり、生徒の中で「選ぶ」ということが定着してきたと思う場面が多くあった。授業を振り返ると道具は刷毛を用いることが多いが、様々な道具を使用し、直接素材を手で触り、素材の違いを感じる工夫をし、美術の授業を通して楽しく経験を豊かに広げていきたい。

「肩ひもタイプのひもを結ばなくていいエプロン」

高等部 B グループ「 家庭科 」



エプロン



ミシンをかけているところ



印付け

対象生徒	高等部2年 B②グループ 8名。手先の器用さに差はあるものの、ハサミや針を使った基本的な作業ができ、学習に対しての意欲も高い。
ねらい	・実用品(自分が使うもの)を作ること、意欲的に学習に取り組む。 ・生活に役立つ基本的な裁縫の知識や技術を学ぶ。 ・ミシンの基本的な使い方を身につける。 ・様々な裁縫道具の使い方を知る。
授業の内容	週に1回、30分×2時間の授業。前半は座学等で後半の時間に製作に取り組むことが多い。1学期の後半から少しずつ製作を始め、他の課題と並行しながら時間をかけて取り組んだ。 製作の手順は、①型紙づくりの②裁断、③印付け、④ひもを縫う、⑤エプロン本体を縫う、⑥ポケットをつけるの順番で行った。 基本的に自分の分を製作するが、型紙の製作などでは皆で協力し、線を引く人、ハサミで切る人など分業しながら行った。エプロンの生地は、あらかじめ生徒に希望の色や好みを聞いたうえで教師が生地を準備し、その中から自分の気に入ったものを選ばせた。 作業の中心はミシンとアイロンであり、使い方や注意点を繰り返し何度も指導した。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	肩ひもタイプにすることで、ひも結びが苦手な生徒でも自分一人で着脱ができる。 自分の気に入った色や柄の生地で作ること、意欲的に学習に取り組むことができる。 製作の手順では、ひもや裾の部分などの直線の部分を先に縫うことでミシンの使い方に慣れさせた。その後で、曲線やポケット口など難しい部分に挑戦させた。
授業を終えて	生徒の反応は、一枚の布が少しずつエプロンの形になっていくと「早く着たい」と喜んでいる様子だった。ミシンの使い方も上手になり、手順も覚え、まっすぐ縫えるようになった。



文責: 高等部 長 聡子

「バジルの栽培」

高等部A1グループ「生活（自然）」



対象生徒	A1グループの生徒7名。全員車椅子やバギーを使用。人工呼吸器、常時酸素投与、経管栄養などの医療的ケアが必要であるため随時体調の変化に目を向け、常に看護師等との連携をとりながら授業を行っている。
ねらい	身の回りの生命や自然などに関心を持ち、感じたことを伝えようとしたり、意欲的に取り組もうとしたりする姿勢を養う。
授業の内容	毎週月・水曜日、60分授業を週2回、半期にわたって継続して授業を行った。 ・土づくり(スコップでプランターに土を入れたり肥料を混ぜたりした) ・水やり ・間引き、追肥などをしながら成長の過程を観察した。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	■プランター・・・生徒に合わせて場所を変えたり、高さを調節して手の届きやすい位置に設定したりすることができる。 ■スロープ・・・長さを調節できるため、ベッド上から移動が難しい生徒でも、移動せずに種植えができる。 ■紙コップ・・・指先を使っでの作業が難しいため、持ちやすい容器を用意して種植えや肥料を行った。 ■じょうろ ■スコップ
授業を終えて	土づくりから行うことで、カナブンの幼虫やダンゴムシなど、生き物の観察も同時に行うことができた。比較的香りが強く分かりやすいバジルを選択したことで、香りに対して生徒の表情の変化や反応を表出させることができた。

文責： 高等部 川北恭子

「屋台を運営しよう」

高等部 A1 グループ「生活（社会コミュニケーション）」



対象生徒	高等部3年生 A1グループ8名 本グループは肢体不自由の生徒で構成されており、物を持ったり、切ったり貼ったりする作業を行う時は教師の補助が必要である。具体物を目の前に提示すると視線を向けたり、手に当てると掴もうとしたりすることができる生徒もいる。生徒それぞれが得意なことを生かしながら、作業、準備を行った。
ねらい	・夏祭りの屋台の準備や運営を通して、他者と関わりながら活動に取り組む経験をする。 ・自らの役割に意識を向けて取り組む経験をする。
授業の内容	・時期:6～7月 ・お好み焼きの模型の作成 ・屋台の装飾 ・接客の練習
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・食材の素材 生地、キャベツ、麺の3つに役割を分けて作成した。 生地:画用紙を丸く切り、筆でソースを塗ってから歯ブラシや刷毛を使ってブラッシングで青のりを表現した。 キャベツ:緑、黄緑の画用紙や折り紙をシュレッダーしてキャベツを表現した。 麺:茶色の毛糸を切ってまとめて麺を表現した。 ・それぞれの食材に感触が異なる素材を使用し、担当ごとに感触を味わいながら作業に取り組んだ。 ・素材の違いが分かりやすくなるように、層になっている広島のお好み焼きを採用した。 ・持ち帰り用にパックに詰めたものと、大きなお好み焼きを用意し、屋台に設置して参加している生徒が触ったり体験したりできるようにした。
授業を終えて	・役割を3つに分けることで生徒が興味を持ったものを選んで取り組むことができた。 ・屋台の準備から運営まで行うことで取り組んできたことと結果を明確にすることができた。

「電子レンジとフライパンでオムライス」



高等部3年 Bグループ「家庭」

対象生徒	高等部3年Bグループ 家庭での調理経験がある生徒や、集中が続かず道具を扱うのが苦手な生徒など様々である。
ねらい	・簡単な洋食料理の作り方を知る 同じメニューを違う作り方で作る方法を知り調理する。 ・混ぜる・炒める・電子レンジの操作などの調理技術を知り、短時間での調理を実践する。 ・皆で協力して買い物や調理、後片付けに取り組む。
授業の内容	調理実習「簡単オムライスをつくろう(電子レンジ・フライパン)」 1、日時…2025年7月16日(水)1～4限 ※前年度に「キーマカレー(電子レンジ・フライパン)」を実践済み 2、場所…本校調理室 3、事前学習…①買い物学習 事前学習(材料とスーパーまでの経路、支払い方法確認) ②買い物学習(フレスコ箕面船場店まで長期保存できる材料を購入) ③調理実習 事前学習(役割分担、動画とレシピにて作り方確認) 4、材料…ごはん・カットベーコン・卵・ミックスベジタブル・ケチャップ・油・塩こしょう・ソース・みりん 5、作り方 (A チーム)ケチャップライス(フライパン) ① フライパンに油・カットベーコン、ミックスベジタブルを炒める。 ② 塩こしょう・ケチャップ・みりん・ウスターソースで味付けし、炊いておいたご飯を入れ、味がなじむように炒める。 (B チーム)ケチャップライス(電子レンジ) ① ガラスボールにご飯、カットベーコン、ミックスベジタブル、調味料すべてを入れ、電子レンジ700wで5分加熱する。 ② ガラスボールを取り出し、中身をよく混ぜる。 (AB 全員)オムライス ① たまごをボールに割り入れ、みりんとしおを入れてよく混ぜる。 ② フライパンに油を入れ、温める。 ③ おたまで2杯卵液をフライパンに流しいれ、フライ返しでひっくり返し両面焼く。 ④ ケチャップライスを小さい器に入れ、ひっくり返しお皿に乗せる。 ⑤ 焼いた卵をケチャップライスの上に乗せる。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	前回も買い物から自分たちで準備し、同じ料理を違う作り方で作る実習を行い(電子レンジ・フライパンでキーマカレー)交換して味見をした。 今回も同様に買い物から準備し、ケチャップライスを違う作り方で作り、卵は各自、自分の分は自分で焼くことに挑戦した。動画やクイズ、レシピでイメージを持ち、自ら次の工程を考えながらできた生徒もいれば、教師と一緒に入れる・混ぜるなどの作業を行った生徒もいた。
授業を終えて	これまでも包丁を使わず、電子レンジなどで家で一人でも実践できるようなメニューを実習してきた。今回も夏休みのお昼に作った、と報告してくれた生徒もいて、実生活につながる実習ができてうれしく思う。

文責:高等部 小林 千晶

「選挙のしくみ・模擬選挙にむけた事前事後学習」

高等部 Bグループ「 社理 」



対象生徒	高等部3年生 Bグループ 14 人(2グループ展開) 週1回2時間実施している。 書字が可能な生徒が大多数いるが、発語や指差し、挙手で意思を伝える生徒もいる。
ねらい	・有権者としての意識をつける。 ・選挙の具体的な仕組みを学習する。 ・投票の方法とルールを学ぶ。 ・選挙後も関心を持ち続け、社会に参画することの重要性に気づく。
授業の内容	12 月上旬におこなわれる模擬選挙にむけて、11 月に入ってから3回6時間程度事前学習を行い、模擬選挙後に事後の振り返りを行った。 (事前事後学習の内容) ・「おとなになったらできること」を絵カードを使って考える。その中に 18 歳になったら投票する権利があることを示し、「投票とは何か」を動画やスライド教材をつかって学ぶ。 ・投票にあたって、自分の考えで選ぶ練習や投票したい人名を正しく筆記する練習を行う。 ・選挙公約とは何かを理解し、学校の生徒会選挙の選挙公約を一緒に読み、自分の考えと合うかどうかを判断する。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・パワーポイントや動画教材 ・絵カード ・実際の投票カードや支援カード ・立候補者のポスターや公約
授業を終えて	模擬選挙を終えて「候補者名を書き間違えたらどうしようと思うとドキドキしたけれど、記載台のところに候補者の名前が書かれていることを初めて知った。安心して投票できた。」や「18歳になったら家族で絶対に投票に行きたいと思った。自分の一票を大切にしたい。」などの感想が生徒から上がり、選挙後も関心を持ち続け、社会に参画していこうとする姿勢が見られた。 毎年、模擬選挙が実施される時期にあわせて事前事後学習を行い、選挙への関心を持ち続けていってほしいと思う。



文責： 高等部 北村陽子・藪内温子

「海の生き物キーホルダー」

高学部 Bグループ「職業」



対象生徒	高等部3年生 B グループ12名(2班展開)。毎週水曜日、4時間実施。 1班は比較的手先が器用な生徒が多い。2班は個別に指導し、配慮が必要な生徒が多い。
ねらい	・学年全員でおそろいのキーホルダーをつけて修学旅行に行くという目標に向かって、グループを越えて作業に取り組み姿勢を高める。 ・自分のものだけでなく、友だちのものを作成することで丁寧に作業することの大切さを学ぶ。
授業の内容	毎週の職業の授業の中で行った。夏休み前に「海の生き物」をテーマに生徒がデザインした。複雑な形のものが多かったので教員が切ったものを、生徒がヤスリがけした。 その中から好きなものを選んで、それぞれ思い思いのデザインを行い自分のキーホルダーにした。裏面には名前を書いて手持ちカバンの名札の役割も。 また他グループの生徒のものや教員のもの、修学旅行に同行する教師のものも含めて計60個分を作成することを目標に作業に取り組んだ。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	■木材・・・適度な大きさに木材を切ったり、端材などを使用。 ■デコパージュ用紙・ペーパーナプキン・・・様々な色や模様のものを多数用意。 ■デコパージュ液・・・木材と紙をつけるために使用。用紙の色味によって複数種を使い分け。 ■ラメやマニキュア・・・光沢や艶を出すために使用。 ■ネジ・・・目として使用。 ■ヒートン、革紐・・・キーホルダーつぼくするように使用。
授業を終えて	生徒がデザインをしているので個性や面白味があって、味のあるキーホルダーができた。 また学年全員でおそろいのものを自分たちが作るというのも生徒たちにはいい経験になったと思う。 私個人的な感想として修学旅行の良い思い出になったと感じた。

文責：高等部 近藤啓祐

「コーリング」

高等部 A1 グループ「 体育 」



対象生徒	高等部 A1グループの生徒 10 名(1年:2名 2年:5名 3年7名) 多数が医療的ケア、人工呼吸器、常時酸素投与経管栄養などが必要で、自発的な身体の動きがほとんどないが教師の支援に対して反応できる生徒も多い。
ねらい	・自分の身体の動かし方に合った方法で氷の球を投げることができる。 ・チームの一員として順番を守り、仲間を応援できる。
授業の内容	週に1回 60 分の授業で、全 10 回授業を行った。 ・個人練習で投球を数回行う。 ・チーム分けを行い、試合形式でゲームを行う。 ・試合の得点発表、振り返り、本日の〇〇賞の発表を行う。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	●教材の工夫 ・教員が実演を行い、「氷の球」を的に近づけるというイメージを生徒に持たせる。 ・的に中心に近いほど高得点や、枠から外れた時のボーナス点などルールをシンプルに設定した。 ・本グループだけではなく、練習した成果をたくさんの人や仲間と共有できるように、A1,A2 グループ合同で大会を開催した。 ●教具の工夫 ・的に大きめに作り、「届く」という成功体験を重視した。 ・使用する「球」を氷にすることで、目だけではなく「冷たい」などの感覚にもアプローチを行った。また、チームカラーが視覚的にも分かりやすいように氷に赤、青など色付けをした。 ・生徒の実態に合うように、「球」の大きさを変えたり、「スロープ」も短いもの、長いもの、カーブしているものなど様々な種類を用意したりした。
授業を終えて	氷の球に触れると、冷たさに驚いた表情を見せる生徒も多かったが、感覚にアプローチすることで、自ら手指を動かそうとする様子も見られるなど生徒の様々な表情、動きを引き出すことができた。また、生徒だけではなく、教師も一緒になって楽しめたことで、「もっとやりたい」「次は勝ちたい」などの雰囲気と共に作り上げることができてよかった。

文責：高等部 安井敏樹

「 モルック 」

高等部 A2 グループ「 体育 」



対象生徒	高等部1～3年 A2グループ 19 名。(1 年6名、2年7名、3年6名) 1年生から3年生までのA2グループ全員で授業を行った。
ねらい	・仲間と喜びを共有し楽しむ。 ・「狙って投げる」など集中力や手指の巧緻性を高める。 ・みんなで考えた合図に合わせて投げるができる。
授業の内容	水曜日3・4時間目(60 分) 全5回 ・ラジオ体操 ・ウォーキング ・ルール説明 ・試合
教材・教具の紹介 (工夫した点)	【ルールについて】 ・本来木製のピン 12 本を倒し得点を重ね 50 点にする。50 点を超えた場合は 25 点に戻し競技を続ける。先にジャスト 50 点になった方が勝ち。 【工夫した点】 ～ピンについて～ ・ピンは木製だと倒れにくいとため、ペットボトルを代用して行った。 ・ペットボトルを使用することで、少しの力でも倒すことができる。 ・慣れるまではピンの本数を増やし24本で得点を取りやすくした。 ～ボールについて～ ・ピン同様木製だと重く投げにくいとため、大小、柔らかさなど様々なバリエーションのボールを用意し各自あったものを選べるようにした。 ～その他～ クリスマス前の授業では、モルックのピンにツリーとプレゼントをつけた。 特定のピンを1本のみ倒すとプレゼントとしてお題(得点2倍や、もう一回投げれる等)のくじをひけるなど季節に合わせたルールも追加して行った。
授業を終えて	生徒たちが投げやすいボールを選んだり、どこを狙うかを一緒に決めたりすることで、ボールやピンに視線が向きやすくなっていたように感じた。また生徒のやりやすいボールを選ぶことで、自らボールを押し出したり投げようとしたりするなどの動きを引き出すことができた。

文責：高等部 林久実子

「 歩こうよ! 」

高等部 BCグループ「 総合 」



対象生徒	高等部1～3年 BCグループ8名 全員、外での活動は好きで、3km 程度の距離を歩くことができる。集団が苦手な生徒やその都度教員の言葉かけが必要な生徒、全体指示を理解し活動できる生徒など実態は様々である。
ねらい	・活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴に関心をもつとともに、身の回りの生活において必要な基本的な習慣や技能を身につける。(知識及び技能) ・自分自身や身の回りの生活のことや、身近な人々、社会及び自然と自分との関わりについて関心をもち、感じたことを伝えようとする。(思考力、判断力、表現力等) ・自分のことに取り組もうとしたり、身近な人々、社会及び自然に関心をもち、意欲をもって学んだり、生活に生かそうとしたりする。(学びに向かう力、人間性等)
授業の内容	・「準備を整えよう」…服装や持ち物の確認 ・「決まりを守って歩こう」…交通ルールを守る ・「いろんな場所に行こう」…公園やスーパーなどの近隣の施設へ行く ・「自然に親しもう」…自然環境に触れ、四季を感じる
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・服装や持ち物 傘や帽子、上着など複数の物を提示し、その日の天候に合わせて何が必要かを全体で考えられるようにした。実際の物を見ながら選択することで、手に取ってみたい、着用してみたいしながら考えることができた。 ・左右確認用ボード 横断歩道を渡る際に、必ず「右・左・右」を見て渡ることができるようにした。渡る際に「右見て、左見て、もう1回右見て」と言葉による支援に合わせて、目で確認する動作をイラストと一緒に示すことで安全な歩行を促すことができる。視覚的な手がかりによって、一人でも安全に道路を渡る習慣を身に付けられるようにした。 ・工夫した点 様々な場所に行き、生徒が興味を示す場所にできるだけ行けるようにした。また、ただ歩くだけではなく、社会に出たときに活かせるよう、歩くときの準備や交通ルールなどは細かく指導を行った。
授業を終えて	授業を重ねるごとに、集団行動や交通ルールなどを守りながら活動することができるようになっていった。授業で学んだことを、実生活に活かせるようになってほしい。

文責：高等部 鹿島由衣

「 旅行プランを考えよう 」

高等部 B グループ「杜理」

対象生徒	高等部1年 B グループの生徒5名。 認知度にはばらつきはあるが、都道府県名は概ね書くことができる。
ねらい	・都道府県名と観光地等を結びつける。 ・外出するときにかかる時間やお金について知る。
授業の内容	1学期から各都道府県の観光地や特産物を中心に学び、地方ごとに行ってみたい場所を選んできた。都道府県の学習のまとめとして、行きたい場所をひとつ選び、そこまでの交通手段や必要な費用、所要時間について調べた。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	「小学生版 1 日 10 分日本地図をおぼえる本」を活用し、わかりやすいイラストを提示しながら、都道府県と有名な場所や食べ物のイメージを掴みやすくした。特に反応の良かった内容については、写真や動画を用いて理解を深めた。また、座学と交互に「どこでもドラえもん日本旅行ゲーム6」を使用してすごろくゲームを行い、そこに登場する場所や食べ物については、学習内容に結び付けて説明した。 この学習では、生徒一人ひとりの認知度に差があることを踏まえ、イメージしやすいように近場へのお出かけやもう一度行きたい場所を想定させた。また、認知度の高い生徒には複数の交通手段を用いる場合や、修学旅行で行きたい場所を想定させることで理解を深めた。 使用した教材 『小学生版1日 10 分日本地図をおぼえる本』株式会社白泉社／あきやまかぜさぶろう 『どこでもドラえもん日本旅行ゲーム6』株式会社エポック社
授業を終えて	はじめは、都道府県の位置や名前は答えられていても、「何がある？」と質問すると答えられない生徒も見られた。しかし、授業を重ねる中で、学習した都道府県について「〇〇があるところ」「〇〇に行ってみたい」「すごろくにでてきた」と具体的なイメージをもって捉えられるようになってきた。

文責：高等部 小西菜月

「トークすごろく」

高等部 Cグループ「自立活動（手指コミュニケーション）」



対象生徒	高等部1年Cグループ 肢体不自由生徒4名(男子3名、女子1名) バギーを使用している生徒2名 独歩の生徒2名 四肢麻痺があり作業の際には介助が必要な生徒から、医療的ケアがあり健康面に配慮を要する生徒、文字盤を使用してコミュニケーションを図る生徒までとその実態は幅広い。
ねらい	・すごろくを通して友だち同士のコミュニケーションを深める。 ・自分の考えを分かりやすく相手に伝えるよう意識する。
授業の内容	時期 ・高等部に入学してからすぐの4月から5月中旬までの期間、計4回(60分)授業を行った。 内容 ① 「トークすごろく」とは？活動の内容やルールを確認した。 ② すごろくのコマとなる車を作る作業を行った。 ③ 友だちに聞きたいことをマスにしてい活動を行った。 ④ トークすごろくの活動を行った。 普通のすごろくとは異なり、トークマスに止まったらテーマに沿って質問に答えていきゴールを目指していく。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・生徒が話したいと考えた内容をすごろくのマスにした。 ・すごろくのマスを手描イラストやカラーにしたことで、生徒が何を今話せば良いかを明確にできた。 ・すごろくのマスにマグネットをつけたことで、マスの移動や入れ替えを行うことができた。毎回違う内容のすごろくに組み入れ、生徒も飽きずに活動に取り組めた。 ・発語が難しい生徒は視線入力用のパソコンを使用した。五十音の文字盤から伝えたい文字を見ることが教師や友だちに自分の考えを伝えることができた。
授業を終えて	・初めは生徒同士でコミュニケーションを取りあうことは少なかったが、活動を重ねる度に、教師の支援が無くとも生徒同士で会話する場面がみられた。身体を話し手にむけて友だちの話を聞くといった、自分が話す力だけでなく、聞く態度の力を養うことができた。

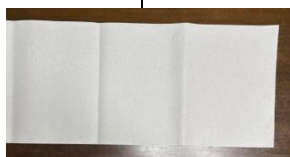
文責： 高等部 早野敦貴

「おりぞめ封筒づくり」

高等部Cグループ「自立活動(手指コミュニケーション)」



対象生徒	高等部2年Cグループ(普通課程)肢体不自由生徒5名(うち1名は訪問籍。スクーリング時に授業に参加)。文字盤を使用する生徒もいるが、言葉でのコミュニケーションが取れる。口頭指示のみで作業のできる生徒もいるが、病弱で長時間の作業が難しい生徒や視覚障がい、手指の巧緻性が低い生徒もあり、個々に合わせたサポートが必要である。
ねらい	・「切る」「貼る」「折る」の年間の作業課題の中で「折る」に着目し、手指の巧緻性を高める。 ・繰り返しの作業を継続して進めることができる。 ・自分で折った紙を好きな色に染めて封筒づくりをすることで制作物への愛着を深める。
授業の内容	これまでおりぞめの経験はあり、例年学期末にプリントを持ち帰るための封筒づくりに取り組んでいる。今回は、すでに三角に折られた和紙を「染める」だけでなく、手指の巧緻性を高めるため、「三角に折る」という継続した作業を組み込んだ内容とした。2コマ続きの授業(60分)で、生徒5名に教員3名体制。他の授業で染めた和紙をラミネート加工する作業にも取り組んだ。 第1回 おりぞめみくじ(どんな模様ができるかな)→あらかじめ折られた和紙を染める。 第2回 和紙を折ってみよう(三角折り)→じゃばら折りにした和紙を三角折りにする。 第3回 おりぞめ(実際に染めてみよう)→染色液も混ぜて好きな色を作る。 第4回 おりぞめ封筒をつくってみよう→ラミネート加工をして、封筒に仕上げる。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・じゃばら折り…角を合わせて「半分に折る」を繰り返す。(じゃばら折りの紙幅は1/4) ・三角折り…じゃばら折りをした紙を二等辺三角形に折る。折り始めに水で消えるチャコペンで折線を入れておき、「三角折りをした後ひっくり返して折る」を繰り返す。
授業を終えて	おりぞめは染めるところに醍醐味があり、その染紙を使ったものづくりを進めることが多かったが、今回授業の一環として「折る」ところから実施した。これまでに簡単なペーパークラフトをしていたこともあり、作業そのものは取り組みやすいように見えた。長い紙の角を合わせて折る(じゃばら折り)ところは、長い和紙の扱いに、また三角折りはひっくり返して折り進めるところに苦戦していた。継続することでどこを押さえたら折れるのか、単純な作業の繰り返しの中で、片方の手で紙を押さえる自分の手指の動きや動かし方にもそれぞれに工夫が見られ、自分の体と向き合う機会ともなった。「折る」作業は、各々が課題としている「(衣服などを)たたむ」にもつながる。今回の取り組みで、おりぞめは、染めの工程そのものや染め紙を加工した作品づくりだけでなく、折る作業そのものが単純作業の繰り返しであり、集中力や手指の巧緻性を高めるといふ課題にもとても有効であることがわかった。今後も継続して取り組んでいきたい。



「この野菜(果物)水の中に入れて浮くかな?沈むかな?」

高等部 A2グループ「生活自然」

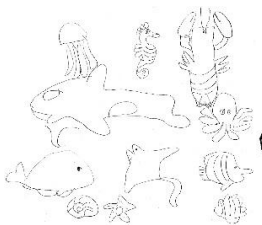
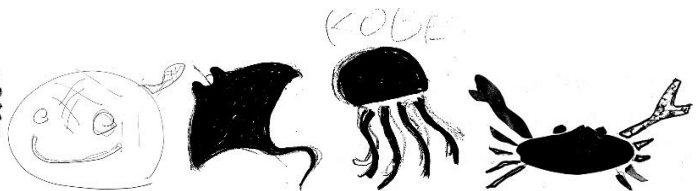


対象生徒	・高等部3年生 A2グループ6名 ・6名全員が車いすを使用している。 ・動きに制限がある生徒もいるが体を動かしたり、教師からの声掛けに反応したりできる生徒が多い。
ねらい	・野菜や果物を水の中に入れる実験を通して、身近の物の重さに関する感覚を身につける。 ・予想したことを自分なりに伝えることができる。
授業の内容	・週に2回の授業で、全2回行った。 ・野菜や果物を水に入れた際に、浮くか沈むかをそれぞれが予想する。 ・目の前で実際に水の中に入れて、浮くかどうかを確認する。 →可能な生徒には、野菜や果物を水の中に入れる役割を与える。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・予想方法を毎授業のはじめに行っている出席確認と同じ、自分の名前カードを貼る形にした。(上記写真では○が浮く、×が沈む) ・透明な水槽を用意することで、水に入れた野菜や果物の「浮く・沈む」の結果が一目で見えるようにした。 ・予想する野菜や果物を入れるときに、「浮くのか沈むのか、どっちなんだい」という掛け声を行い、注目してほしいタイミングが生徒にもわかるようにした。
授業を終えて	・身近な野菜や果物を使うことで、物事に関心が向きにくい生徒も興味を持って取り組むことができた。 ・本題材は、他の教科・領域の授業の中でも、それぞれの予想を聞き合ったりしながら楽しく学べる内容になるのではないかと思います。

文責: 高等部 香山凌太郎

「 修学旅行のおもいで 」

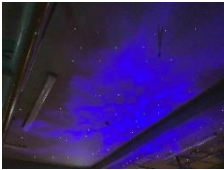
高等部 A・Bグループ「 美術 」

対象生徒	高等部 3 年 ABC グループ ・A グループは全員車いすで、ほとんどが教員の介助を必要とする生徒である。 ・B グループは、手先が器用な生徒から、介助が必要な生徒、感情のコントロールが苦手な生徒など様々である。
ねらい	・修学旅行前に作ったお揃いのTシャツのデザインを、造形作品として形に残し、思い出を共有する。 ・日常生活ではあまり触れない材料を扱うことで、その性質を指先などで感じ、他の材料との違いを確認する。
授業の内容	・修学旅行で作ったTシャツのデザインを、壁飾りにする。 ① 授業前にTシャツのデザインをシールにしておく。 あらかじめカッティングマシンを操作しシールを作っておく。 ② タイルにデザインを彫る。 生徒自ら、サンドブラストを順番に操作しタイルにデザインを彫りこんでいく。 ③ セメントで額縁を作る。 木枠を組み立て、セメントを流し込む。 ④ ②を③にはめ込み壁飾りを完成させる。 セメントが固まったら枠から取り出し、研磨したのちタイルをはめ込み壁飾りを完成させる。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・Tシャツのデザインは、修学旅行前の授業でたくさんイラストを描き、その中から4～5個選択(絞り込み)し決定した。  スケッチ  スケッチの絞り込み  デザイン決定  タイルにサンドブラスト  セメントの額縁 ・サンドブラストの操作は、コンプレッサーの稼働音とともにやや大きな音が出るためすぐ近くで見守りが必要である。
授業を終えて	・「様々な材料を手に取り、感触や性質の違いを感じる」ことを縦軸に、 ・「いろいろな製作方法を体験する」ことを横軸に考えて取り組んでいる。 ・あまり手にすることが無い材料や、初めての技法などをできるだけ取り入れた体験をすることで、創造力を少しでも高めていくことができたと思う。

文責：高等部 前田幸朗

「スヌーズレン体験～クリスマス スノードームの制作～」

高等部 BC グループ「総合（リラクゼーション）」

対象生徒	高等部 1～3 年 BC グループの生徒 8 名 感覚刺激や視覚刺激を好む生徒が多い。言葉でのやり取りが難しい生徒もいるが、視覚的な提示や実物を見せることで理解を促すことができる。
ねらい	・創作活動を通して季節感を味わい、心身の安定を促す。 ・光の当て方を工夫し、水やラメの動き・反射を視覚的に楽しむ。 ・香り・光・音楽など多感覚刺激により、安心感と集中力を得る。
授業の内容	日時:2025年12月9日(火)5、6限 場所:3階ホール 1. 導入:香りと音楽によるリラクゼーション アロマでレモンの香りをを感じる。 明るいクリスマス音楽で活動への期待を高める。 2. 展開:クリスマス スノードームの創作活動 ラメ、ビーズ、クリスマスモチーフなど飾りを選び、ビンに入れる。 水と洗濯のりを入れてスノードームを完成させる。 3. 鑑賞:光と音によるリラクゼーション空間 完成したスノードームにライトを当て、色の変化を楽しむ。 季節のお話「クリスマスの鐘」を聞く。  アロマディフューザーで レモンの香りを拡散
教材・教具の紹介 (工夫した点)	1. 導入 ・集中力を高め、気分を明るくするレモンの香りを使用した。 ・明るいクリスマス曲で活動に入りやすい雰囲気を作った。 2. 展開 ・生徒が自ら選択できるように、ラメ、ビーズ、クリスマスモチーフなど飾りを複数用意した。 ・「飾りを選ぶ」「ビンに入れる」など、わかりやすく達成感を得られやすい工程で構成した。 3. 鑑賞 ・光を変化させて、水やラメの動きがより美しく見えるよう工夫した。    ・スヌーズレン機器で空間全体を幻想的な雰囲気に演出し、ゆったりとしたオルゴール曲で心身の落ちつきを促した。 天井に星空を投影 した様子  惑星のような淡い光 を灯した様子  ・最後に物語を聞く時間を設け、静かに余韻を味わえるようにした。
授業を終えて	創作活動では、生徒が飾りを見比べて選び、主体的に取り組む姿が見られた。鑑賞では、光の変化、水やラメの動きを静かに眺め、落ちついた様子が見られた。今後は、光・音楽・香りのバリエーションを増やし、組み合わせを工夫して、落ちつくことのできる環境を広げたい。

文責:高等部 真期康子

「清掃・軽作業」

高等部 Bグループ「職業・作業」



対象生徒	高等部生活課程2班 10 名 2班は個別支援が必要なグループである。配慮が必要な生徒が多い。
ねらい	・将来の職業生活に係る技能を身につける。【知・技】 ・将来の職業生活を見据え、「報告・連絡・相談」ができる力を養う。【思・判・表】 ・清掃や軽作業に意欲的に取り組むことができる。【学・人】
授業の内容	【清掃】 台拭き・ほうき掃き・モップ拭き 【軽作業】 フード玩具の仕分け、ボールの色分け、ペットボトルキャップの仕分け・箱入れ、ペットボトルの箱詰め、ペットボトルの分解・潰し、ゴミ捨て、ナットとボルトの締めと分解、ボールペンの組立と分解、タオル畳み、ビニール袋畳み、玉の仕分け・紐通し その他
教材・教具の紹介 (工夫した点)	「清掃」については、清掃技能検定をベースに台拭き、ほうきかけ、モップかけを行った。動画を見て動き方を理解した上で、生徒と教師がマンツーマンになるように体制を整え行った。口頭指示での清掃の遂行を促し、それが難しい場合は教師と一緒に手順を追って行うなど、集中して取り組む力を育んだ。 「軽作業」については、作業の難易度や個々の作業能力(巧緻動作能力)を評価した上で、3グループに分け内容を変え取り組んだ。いずれも将来的に事業所等で行う可能性のあるものを、本人の適性や能力に合わせ取り組むようにした。 【ペットボトルの分解・潰し】作業については、比較的個別支援の手厚い生徒も、作業手順を理解し自ら取り組むことができる教材として使いやすかった。自らペットボトルを潰し、それを袋に入れる姿も見られた。 【玉の仕分け】作業については、トングのようなはさみ・ピンセット・スプーン・箸、また利き手が逆の手かを組み合わせることにより、作業の難易度を変えることができる。淡々と集中して取り組む姿がよく見られた。
授業を終えて	清掃・軽作業とも、事業所等で働くうえで、また今後の生活とも切り離せないものである。報告などの基本的なコミュニケーションも含め、将来に密接に繋がる内容であるといえる。 動画と実際の作業実践を併用することで、イメージを身体でどのように表現するのかを学び、さらに色々な事を経験することで、清掃や作業に少しでも慣れて将来的に少しでも過ごしやすく、暮らしやすくなることを考慮して指導を行った。身につけた基礎的なことを今後の生活の中でも生かしてもらいたい。

文責: 高等部 清家結

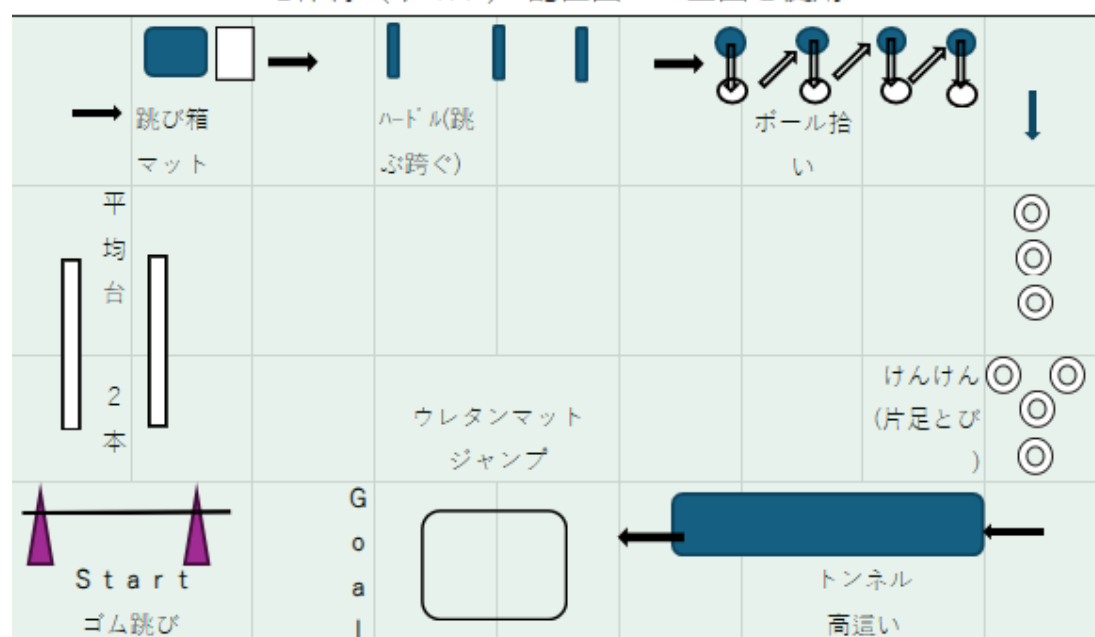
「サーキットトレーニング」

高等部 Bグループ「保健体育」

対象生徒	高等部 保健体育 Bグループ40名 身体的に走・跳・投など基本的な運動の行い方を理解している生徒も多く、こちらが手本を見せると、模倣しようとする生徒が多い。また、運動を楽しもうとする生徒が多く、全体が主体的に競技に取り組もうとしたり、意欲的に体力の向上を試みたりする生徒も多く活気が溢れているグループである。
ねらい	・手足を伸ばして転がったり、左右交互に手を出して這う動きを行ったりすることができる。 ・しゃがんだり、跳んだりするなど、足を使つての活動ができるようになる。 ・サイドステップ、横歩きをしながら物を移動させるなどして、いろいろな体勢で動く。 ・左右交互に足を出し、平均台を渡ることができる。 ・跳び箱に両手を着き、またいぎ乗ったり、またぎ下りたりする。 ・ミニハードルをまたいだり、跳び越えたりする。 ・ケンパー跳び、片足だけや両足での連続跳びなどで進む。 ・トンネルを四つ這いや、高這いの状態で進む。
授業の内容	・各ポイントを作り、8つの種目を周りながら各々のペースで10分間×2回取り組んだ。 ①マット上で、動きを模倣し進む。 ②膝上の高さに張ったゴムひもの下を這ったり、上を跳び越えたり、当たらないよう跨いだりして超える。 ③マーカーコーンの上にテニスボールを置き、拾った後、隣のコーンまで横移動してコーン上に乗せる。その2つの動きを順番に行う。 ④バランスを保ちながら、足を交互に出し進む。 ⑤跳び箱を、両手の力で体重を支えながら越える。 ⑥10センチ程度の高さのハードルを跨ぐか、両足ジャンプで跳び進める。 ⑦フットマーカーの上を片足か、両足で跳びながら進む。 ⑧トンネルの中を手足を交互に出して、這った体勢で進む。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・普段の生活で経験しない動きや体勢を意識できるような教具を用意した。 ・手の着く位置や、足を着く場所が分かりやすいようマーカーで示した。 ・各々のペースで進めるよう、列に並ばせたり、人込みを避け次にとばしたりして進むよう言葉かけを行い、生徒同士が安全に接触せず動き続けられるように促した。 ・生徒の手足を補助し、自重を感じたり、動きを学んだりできるよう支援した。
授業を終えて	口頭指示だけではわかりにくいと、指導者が寄り添い補助したり、教員が同じ動きを何度も手本を見せたりしたことでスムーズに活動に参加する場面が増えた。同じグループの中でも個々に差があるため、生徒の動きや性格、傾向を見ながら少しずつ言葉かけや補助の仕方などの支援方法を変えるように心掛けた。初めは普段しない動きに抵抗があり、参加できない生徒もいたが、何度も反復練習を行うことで内容を理解し、教員の補助なしで取り組むことができるようになった。また一人ひとりを応援できるようリレー戦を実施して、お友だちが成功した際には拍手や言葉かけで称賛し、ゴールへと進めるよう生徒同士が鼓舞し、意欲につながったように感じた。

文責: 高等部 吉川瑞穂

B体育（サーキット）配置図 全面を使用



「 熱中症に気をつけよう！ 」

高等部 B グループ「 保健 」

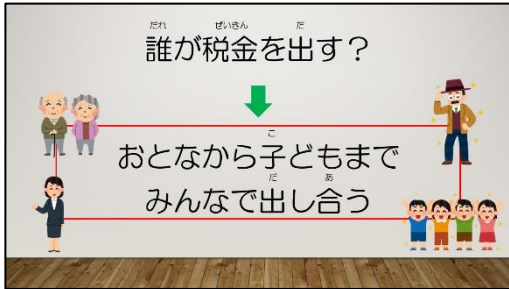
対象生徒	高等部 B グループの生徒 10 名(1年:2名 2年:4名 3年4名) 発語は少ないが、相手の話している内容を理解することができる。また、ジェスチャーを用いて自分の意志を表現することができる。
ねらい	・熱中症の原因や予防の方法について理解し、自分の生活にいかすことができる。 ・水分補給や休憩の必要性を学び、必要に応じて周囲に伝えることができる。 ・自分の体調に関心をもち、危険を避ける行動につなげる。
授業の内容	週に1回30分の授業。全4回授業を行った。教師は5名体制。 ・パワーポイントで熱中症の原因・予防についての講義 ・熱中症対策の動画教材を視聴 ・熱中症に関する2択クイズ
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・パワーポイント資料 熱中症の原因や予防法について、写真やイラストを多く用いてわかりやすく提示した、文字情報を最小限にし、視覚的に理解しやすい構成とした。 ・製薬会社から提供されている DVD 教材 ストーリー性のある映像で、登場人物の行動や場面を追いながら、熱中症予防の大切を理解できる教材。クイズ形式でわかりやすく、動画を止めて生徒の意見を聞きながら、授業を進めることができる。
授業を終えて	身近な「熱中症」というテーマであったため、生徒も自分の生活と結び付けて考えることができていた。特に映像やイラストを通して場面ごとの状況を理解しようとする姿がみられ、ストーリー性のある内容に集中して取り組むことができていた。また、2択クイズでは、ジェスチャーで自分の考えを伝えようとする姿も見られ、自分なりに理解したことを表現できていた。

文責: 高等部 瀬川宗史朗

「税金」

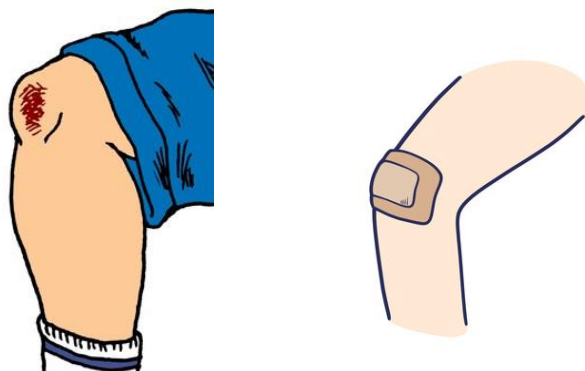
高等部 Cグループ「社会」



対象生徒	高等部Cグループの生徒5名(高1:2名、高2:3名(内訪問籍1名))。文字盤を使う生徒もいるが、基本的に全員が教師と口頭でのコミュニケーションが可能。訪問籍の生徒はスクーリング時に授業に参加している。
ねらい	・身の回りの施設やサービスが税金で運営されていることを学ぶ。 ・税金はみんなで出し合うものであることを理解する。 ・税金に関心を持つ。
授業の内容	・週に1回2コマの授業、「税金」の単元は7回行った。教師は3名体制。 ・税金支払い体験(買い物練習) ・国民の三大義務「教育・勤労・納税」 ・クイズで学ぶ税金(税金が使われている施設、税金の種類、税金がある世界・ない世界など)
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・モニター、パワーポイント資料 ・教師による寸劇形式での説明。 ・国民の三大義務については、リズムに乗ってラップ調で声に出して記憶する。 「Kyoiku! Kinro! Nozei!!」 ・うんこ税金ドリル →財務省とうんこドリルのコラボレーション教材。ウェブ上でのダウンロードや財務省から必要分の冊子を取り寄せることが可能。また、その他税に関するパンフレットも取り寄せ可能。 (参考:うんこ税金ドリル：財務省)  
授業を終えて	身近な話題、視覚的に理解を促す資料・寸劇、リズムに乗ること、楽しいドリルを活用することによって、税金という難しいテーマでもグループ全体が明るい雰囲気の中で学ぶことができた。全員が国民の三大義務を暗唱できるようになったほか、自分も納税者であることも認識できた。後の主権者教育(選挙)につながる内容にもなった。

「自分で絆創膏を貼ってみよう！」

高等部 Cグループ「保健」



対象生徒	高等部 C グループ(1 年生2名、3年生2名) 車椅子で活動する生徒、独歩で活動する生徒がいる。口頭でのコミュニケーションができる生徒と、文字盤を使つてのコミュニケーションをとる生徒がいる。 手指の操作は、ある程度自分で操作できる生徒と、全介助の生徒がいる。
ねらい	ちょっとしたケガをしたときに手当ができるように ・手順について考えられるようになる ・手当に使うものについて知る ・絆創膏を使って傷口に貼ることができるようになる ことをねらいとした。
授業の内容	週 1 回 30 分授業、全2回授業を行った。 時期は 6 月、講義1回、実技1回で授業を行った。 講義では、プレゼンテーションソフトを使い、「ちょっとしたケガをしたときにまず何をしたら良いか」、「出血したらどうするか」、「消毒薬の効果」を 2 択クイズにして提示し、考えさせながら授業を進めた。実技では、傷口が載ったものや傷口に絆創膏を貼っているもののイラストをコピーした用紙にラミネートをし、傷口の部分もしくは絆創膏が貼られている部分に、絆創膏の包装をとるところから貼るまでの一連の流れを取り組んだ。全手指操作が全介助の生徒は教師と一緒に取り組んだ。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	講義では、「日々の生活の中で、ちょっとしたケガをしたとき」などとテーマを示すことで、考えたり思い出したりしたことがしやすくなるのではと考えた。 実技では、本物の絆創膏を使用し、傷口に絆創膏を貼ることを意識できるように、傷口のイラストや、絆創膏が貼ってあるイラストを使った。
授業を終えて	ちょっとしたケガをしたときに使う身近なものを教材にしたことで、生活の中で身近なものとして感じてもらえたのではないかと思います。もし、今まで使ったことのなかった生徒が使うことになった時に授業で取り組んだことを生かして挑戦できれば良いと思う。

文責：高等部 小西秀和

「心肺蘇生法にチャレンジしよう！」

高等部 Cグループ「保健」

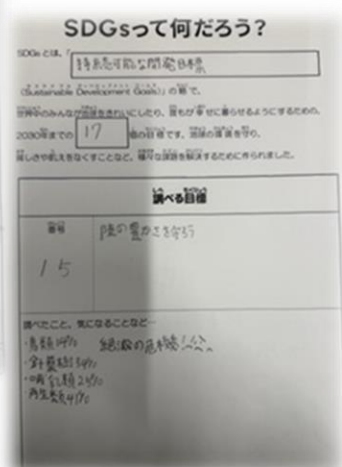
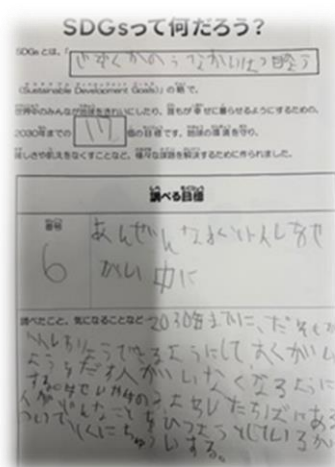
対象生徒	高等部1年生3名、2年生5名、合計8名 車いすで活動する生徒が多い。多くの生徒は口頭でのコミュニケーションは可能であるが、中には、文字盤を使用する生徒がいる。また、発作や不調など体調面に配慮する生徒もいる。
ねらい	・心肺蘇生法の流れを理解する。 ・緊急時にどのような行動をとるとよいのかを考えられるようにする。 ・119番通報でのやりとりがどのようなものなのかを学ぶ。 ・胸骨圧迫のリズムや方法を実践で学ぶ。
授業の内容	週1回、30分授業。全4回授業を行った。 時期は10月、授業はプレゼンテーションソフトを使用して行い、講義2回、実技2回に取り組んだ。講義では、「もしも身近な人が倒れたら・・・」「クイズ」「心肺蘇生法の手順」「胸骨圧迫の方法」等の学習をした。実技では、保健室にある心肺蘇生法練習人形を活用し、プレゼンテーションソフトを見せたり、その他の動画を観ながら実技に取り組んだ。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	胸骨圧迫の方法では、生徒たちのなじみのある音楽を流してリズムを取らせつつ、リズムをとりやすいようにメトロノームのような動きをする GIF を画面で示しながら胸骨圧迫をした。 また、全体で役割分担をする際に救命コーチングアプリを活用して救急隊員とのやり取りや胸骨圧迫の正しい方法を学べるよう工夫した。
授業を終えて	アプリを活用することで生徒たちが意欲的に取り組んでいた。また、それぞれの生徒が見えるところに人形を配置することで、自分の出番ではないときでも、観察し、学ぶ機会をつくることができた。胸骨圧迫の時間をそれぞれの生徒にしっかりとったことで、実践していくうちに上達する生徒もいたが、疲れてしまい、体調が悪くなってしまう生徒もいたので、調子を確認しながら今後の授業を実施していきたい。



文責：高等部 津田伸吾

「SDGsについて考えよう」

高等部 Cグループ「理科」



対象生徒	高等部2、3年生 C グループ3名。2人は車いす、1人は独歩で活動している。
ねらい	・さまざまな自然現象に興味を持ち、日常生活に生かす力や自然を大切にすることを養う。 ・SDGsについて自分で調べ、様々な課題があることを知る。また身近な行動を通して、個々でできることはなにかを考える。
授業の内容	・2学期に全3回取り組んだ。SDGsとは何かを画像や動画を用いて説明し、17項目の中から気になる項目を選んでタブレット端末機器で調べる。調べた内容をプリントにまとめ、発表する。 ・発表後、身近にできること、すぐに実践できることはあるのかをみんなで考える。
教材・教具の紹介 (工夫した点)	・17項目とはどのような内容があるのかを第1回目の授業でユニセフのサイトを見て調べながらみんなで確認した。 ・調べた内容を書きやすいように、まとめ用のプリントを準備した。 ・どのサイトがわかりやすいのか伝え、そのサイトから気になる項目を選ぶようにした。 ・17項目の目標に対して年代別(小・中・高・大)でできることについてのサイトがあったため、それを参考に一人ひとりができることを考えた。 ・SDGsすごろくを使って身近にできる内容について学習した。
授業を終えて	・【貧困をなくそう】や【安全な水とトイレを世界中に】などのわかりやすく取り組みやすい目標がある反面、【産業と技術革新の基盤をつくろう】などの個人でできることが少ない目標もあった。すべての目標に参加したり、個々にできることを考えたりするのは難しいが、食に関することやエネルギーに関することなど、身近でなじみのある目標は一緒に考えて実行できることがわかった。またすごろくを通してこんなこともSDGsに関わることなんだと知ることができた。

「 光で線や形を描いてみよう 」

高等部 Cグループ 「 理科 」



対象生徒	高等部Cグループの生徒5名(高1:2名、高2:3名(内訪問籍1名))。文字盤を使う生徒もいるが、基本的に全員が教師と口頭でのコミュニケーションが可能。訪問籍の生徒はスクーリング時に授業に参加している。
ねらい	・科学的な興味・探求心を育てる。 ・光を使った表現活動を通じて、理科への関心を高める。
授業の内容	週 1 回、30分×2で授業。全4回 ・プレゼンテーション(スライドで説明した後1度体験) ・ペンライト上下左右に動かして光が線になるように撮影し、その後鑑賞 ・ペンライトを○や□など形ができるように動かして撮影し、その後鑑賞 ・友だちと一緒にポーズをとって撮影してみよう
教材・教具の紹介 (工夫した点)	教材・教具:ペンライト(または懐中電灯)、セロハン(懐中電灯を使う場合、光に色をつけるため)、タブレット端末、テレビ ・タブレットでの撮影の仕方 ① カメラを LIVE モードにする ② タイマーを3秒にする ③ 撮影後、写真を開き右上の「LIVE」をタッチし、「長時間露光」をタッチする。 ・ペンライトはボタンを押して色を変えられるもの(100均で売っている)にすると、誰でも自分で自由に色を選びやすく撮影できる。 ・撮影時、タブレットをテレビに接続することで生徒はテレビ画面で自分の動きを見ながら撮影することができる。 ・ペンライトを両手に持つとペンライトの色を変えることができ、よりきれいに見える。 ・暗い教室ほどきれいに映る。 
授業を終えて	ペンライトの動きでいろいろな線や形を作ることができるので、回数を重ねると興味を持って進んでしようとする生徒が増えてきた。

文責:高等部 石井広行

Ⅱ 研究、実践の 報告・発表

実践報告 2

姿勢・動作の評価

～ 適切な自立活動の学習内容を考える ～

指導教諭 楠 大智郎

1. 自立活動の評価

本校では肢体不自由児を対象に、自立活動の時間の指導が行われています。私は自立活動教諭の立場で自立活動の時間に各学部を巡回して、児童生徒の評価や指導方法の助言を行っています。

学習指導要領において、自立活動の指導は6区分27項目から必要項目を選定し、それらを相互に関連付け、具体的な指導内容を設定すると明記されています。また、学習指導要領解説自立活動編では、「流れ図」と称される、実態把握から具体的な指導内容を設定するまでの流れの例が示されています。これらの区分横断的な評価については、令和5年度の本校研究紀要で、「流れ図」方式でない思考方法に関する実践報告を掲載しました。

一方、区分内の各項目に関する評価方法については、学習指導要領及び学習指導要領解説のどちらにも記載されておらず、現場での裁量に委ねられているのが実情です。

例えば、区分「身体の動き」の項目「身体の移動能力に関すること」を例に挙げると、歩行が困難な生徒への適切な指導内容を考える際に、「歩行が困難である」という課題の原因分析が行えないため、現実的に「歩行練習をする」という指導しか選択できなくなります。

私は支援学校に自立活動教諭として入職する前に、病院で理学療法士として勤務していました。医療現場における理学療法では、例えば「人間関係の形成」や「コミュニケーション」といった概念に関する評価方法はないですが、「身体の動き」「健康の保持」といった身体活動に関わる区分の各項目に関しては、具体的な原因分析方法があります。

自立活動は、心理学、運動学、生理学等の様々な学問をベースとした教育と捉えることができ、各区分を横断的に見つめて一人の児童生徒に全人的な教育アプローチをすることで、その独自性と魅力があります。しかし、区分内の各項目に関して更に詳しく評価する知識や方法論が伴わなければ、適切な指導方法を考える上で不十分だと言えます。

冒頭に述べたように、私は自立活動の時間の巡回活動で児童生徒の評価を行っています。が、「身体の動き」「健康の保持」の領域では、主に理学療法の評価方法を活用しており、その概要に関して令和7年の夏季に校内研修を行いました。今回の実践報告は、研修内容を基礎に加筆したものです。

私は、肢体不自由校の教師も理学療法の評価方法の概要を知っておくことは必要であると考えています。その知識は、目の前の児童生徒の「身体の動き」に関する各項目の課題の原因を深く考え、自立して適切な指導内容を考えるための基盤になるからです。また、私を含めた様々な療法士の助言指導を無条件に受け入れるのではなく、その内容を吟味

し、取捨選択する能力を養うことにも繋がるからです。それが、自立活動の時間を充実させる一助になると考えています。

2. 姿勢・動作の評価項目

「身体の動き」区分で課題となる児童生徒の姿勢や動作の改善には、その原因の特定作業が必要になります。まず姿勢や動作を観察し、評価項目の観点で原因を考えていきます。仮説（考えられる有力な原因）を設定し、仮説に基づいて学習内容を決定し、授業を行います。一定期間後に結果を評価し、設定した仮説や学習方法の妥当性を検証し適宜修正するサイクルを繰り返します。各評価項目は以下の通りです。

①姿勢・動作の観察、①疾患情報、運動発達段階、②筋出力、筋力、筋持久力、心肺持久力、③関節可動域（関節脱臼、側弯）、④運動協調性（motor coordination）、⑤バランス、⑥運動・姿勢イメージ、⑦筋緊張、⑧心理・環境的要因

この評価項目は理学療法の評価法を基盤としていますが、⑧は自立活動の観点で追加した項目です。⑩は評価項目ではありませんが、観察の重要性を強調するために列挙しました。次に、各評価項目の概要を説明します。

2-1. 姿勢・動作観察

児童生徒の様々な姿勢や動作を観察し、「できる」と「できない」の境目を見つけます。例えば、床上での座位移動はできるが、四つ這い移動はできない。教師が生徒の腰を支えていれば椅子に座れるが、手を離すと倒れる。介助歩行はできるがP C ウォーカー歩行はできない等です。そして、後者の姿勢や動作が「なぜできないのか」を評価項目から考えていきます。姿勢や動作時の全身を観察することで考察のヒントが得られるため、情報収集の糸口として重要です。

2-2. 疾患情報

例えば、「手足が動かない」という観察した事象の背後には、様々な疾患が考えられます。遺伝子疾患等に関しては、難病情報センター等のホームページで、疾患の概要を知ることができます。まずは、疾患情報により姿勢や動作障害の背景にある医学的原因や進行性の有無を明らかにし、長期的な自立活動の学習計画の指針とします。支援学校で在籍の多い脳性麻痺児の詳細については後述します。

2-3. 運動発達段階

ヒトが生誕後にたどる身体能力の発達を運動発達のマイルストーンと言います。一般に「頭から足、中心から末梢への発達」と言われるように、体幹についてはまず首が座り、次に体が安定して座位を獲得し、上肢については腕の粗大な動きから指先の細かな動作の獲得に進む道筋があります。

通常の運動発達段階の道筋を知ること、対象の児童生徒が今後獲得を期待される姿勢や動作を予測できます。しかし、運動発達のマイルストーンに沿うことが絶対ではなく、一般的な発達段階を飛び越えて姿勢や動作を学習することが必要になる場合があります。

例えば、寝返り等の床上動作が困難な児童が座位を学習したり、自立座位が困難な児童がSRCウォーカー歩行を学習したりするケース等があります。前者では、寝返り動作の獲得は困難であるがバギー座位等での姿勢安定化は可能であるという予測や、座位による肺換気や排痰の促進が「健康の保持」区分の観点で有効であるとの判断によります。後者では、固定した座位姿勢での下肢屈伸動作による主体的な移動手段の獲得、股関節の関節可動域向上や脱臼予防、大腿骨密度の維持等の意図によります。

なお、肢体不自由のない知的障がい児にも、運動発達の遅れが見られることがあります。この場合、基本的には運動発達マイルストーンに沿った学習を行います。身長や体重が増加した時期からの立位歩行学習は、足部アーチの崩れやバランスの不安定性などに留意する必要があります。

2-4. 筋出力・筋力・筋持久力・心肺持久力

まず、各単語の定義を簡潔に述べます。筋力 (muscle strength) とは筋肉が発揮できる最大張力です。筋持久力 (muscle endurance) とは、筋肉が疲労せずに持続的・反復的に収縮できる力です。心肺持久力 (cardiorespiratory endurance) とは、全身的動作を続けるために心臓・肺・血管が筋肉へ酸素を供給する能力です。

そして、筋出力 (muscle output) とは、脳神経系が筋肉を制御することで発揮される身体動作の仕事 (work) です。筋肉の肥大は筋力の向上に繋がりますが、脳機能障害により脳神経系による筋肉の制御が低下すると、筋出力も低下します。

上記の様々な「力」を向上するには、それぞれ異なった学習が必要になります。例えば、独歩可能なレベルの脳性麻痺児は、下肢の筋力トレーニングにより歩行速度やバランス能力が向上します。また、荷物を持って一定の距離を歩く、階段を連続して昇降する等の具体的な活動能力の向上には、実際に目的動作を行う機能的筋持久力トレーニングが有効です。心疾患のある生徒の日常生活能力を向上するためには、適切な負荷量での有酸素運動による心肺持久力強化を行います。首が座っていない（未定頸の）重度脳性麻痺児に対しては、肘つき腹臥位や座位、SRCウォーカー座位などの抗重力姿勢で頸部深層筋群の筋出力を賦活する学習を行います。

以上のように、個々の目標に合わせた運動方法を学習に取り入れることが大切です。

2-5. 関節可動域

関節可動域とは、関節ごとに各種方向で測定された動かせる限界角度を言い、例えば屈曲 130° 伸展 10° 等と表現されます。関節可動域に制限があると、姿勢保持や動作が困難になる場合があります。例えば、足関節背屈制限があると踵をつけて歩けない、膝関節伸

展制限があると立位や歩行時にかがんだ姿勢になる、肩関節屈曲制限があると着衣や脱衣が困難になる、等です。一方、関節可動域制限があっても、日常生活の必要な動作に支障がなければ問題ないと評価できます。目的が不明な長時間のストレッチや関節可動域運動は授業時間の浪費に繋がる場合もあるので、時間配分には注意しなければなりません。

2-6. 関節脱臼、側弯

筋緊張の強い脳性麻痺児等では、股関節脱臼の症状が散見されます。大腿骨頭を包み込む臼蓋の形状は、乳幼児期の自発的な股関節屈伸運動や抗重力姿勢による股関節荷重で形成されます。一方、脳性麻痺児では股関節内転内旋位の持続、股関節荷重の機会が少ないことにより、正常な臼蓋形成が阻害され脱臼リスクが増大します。股関節脱臼が生じると痛みや関節可動域制限、脚長差等の問題を生じます。脳性麻痺児への立位台を使った1歳以降からの股関節外転位での立位保持練習は、股関節脱臼の予防効果があるとされています。

側弯は、体幹の筋緊張の左右差や、股関節脱臼による非対称姿勢等が原因で生じます。よくあるケースでは、脱臼した股関節が内転内旋位になると、反対側の下肢も巻き込み、両膝を揃えて片側に倒した非対称な背臥位姿勢になります。これにより脊柱が捻じれた姿勢が常態化し側弯を悪化させます。また、日常的に使うバギー等の座位姿勢でも重力に引かれて体幹が片側に倒れた非対称姿勢になり、更に側弯が進行しやすい状況になります。

側弯進行予防には、背臥位になる時はクッション等で股関節を左右対称な開排位に保持したり、バギー座位姿勢では、体幹の側方崩れを防ぐようベルト等で中間位姿勢を保ったりすることが大切です。

2-7. 運動協調性

複数の関節を協調的に動かして、目的動作をスムーズに行う力を言います。粗大動作（例：キャッチボール、自転車の運転、色々な地形を歩く等）と巧緻動作（例：靴ひも結び、箸使い、書字等）に大別されます。

運動協調性が低下するのは、脳性麻痺などによる脳機能障害が主な原因ですが、肢体不自由がない場合でも、発達性協調運動障害(developmental coordination disorder)では、運動協調性の低下が日常生活動作上の問題となります。この背景には、運動協調性を司る脳機能の低下があると考えられています。

肢体不自由児の運動協調性学習では、課題指向型アプローチ(task oriented approach)が推奨されます。具体的な動作の獲得を目標に、児童生徒の主体性を引き出し、実際に使用する道具等を用いて、段階的に難易度を調整しながら、動作を反復練習してステップアップしていく方法です。

2-8. バランス

バランスとは、転倒せずに立位などの抗重力姿勢を保てる能力を言います。力学的に言うと、身体の重心を支持基底面内に保ち続ける能力と定義されます。バランス障がいの原因には、小脳、前庭器官、固有受容感覚の機能低下などがあります。

バランス学習においては、床上静止立位やバランスパッド・バランスボード立位練習等の他に、平行棒、手すり、壁、歩行器、杖等の道具を主体的に操作して立位・歩行バランス制御を段階的に学習していく課題指向型アプローチの方法が応用できます。

2-9. 運動・姿勢イメージ

通常、ヒトは姿勢保持や運動において、無意識に姿勢や動作イメージを形成しています。しかし、不適切な姿勢動作イメージを学習したり、習慣化したりすると、筋緊張の亢進、不安定性、エネルギー効率やパフォーマンスの低下、痛みなどを引き起こすことがあります。

不適切な姿勢動作イメージを消去して、適切なパターンを再学習することが必要になりますが、その後の日常生活においても以前の誤った姿勢動作パターンが再出現しないように、継続的な指導や環境設定が必要になります。

2-10. 筋緊張

筋の適切な張力は脳が制御しており、これを筋緊張（muscle tonus）と言います。脳機能障害により筋緊張の制御に問題が生じると、過剰な緊張（筋緊張亢進）や過剰な抑制（筋緊張低下）が起こり、姿勢保持や動作が困難になります。筋緊張が亢進すると原始反射等が出現することもあります。手足をスムーズに動かせないのは、運動機能そのものが低下しているだけでなく、筋緊張異常が動きを阻害している側面にも注意する必要があります。また、筋緊張は姿勢によっても大きく影響を受けます。

2-11. 心理・環境的要因

感情、意欲、認知能力などは、身体能力の発揮にも影響します。例えば、必要な身体機能があっても環境探索や対人交流の意欲が低い場合、自発的な移動動作が生じにくいことがあります。また、歩行器等の操作には一定の認知能力が必要になります。

車いす等の座位姿勢、ベッド臥床姿勢などの習慣的な環境要因は、長期的に骨格や姿勢形成、姿勢イメージ等に影響します。様々な日常的な環境設定が適切であるか評価することは、二次的障害を予防する観点からも重要です。

各評価項目の説明は以上です。

3. 脳性麻痺について

3-1. 運動麻痺の原因

損傷を受けた部位により、(1)脳性麻痺、(2)脊髄性麻痺、(3)末梢性麻痺（神経性、筋

原性)に運動麻痺の原因は分類されます。

また、脳性麻痺は障害される部位によって a) 錐体路障害、b) 錐体外路障害、c) 小脳性障害に分類されます。

3-2. 錐体路障害

錐体路は、大脳の運動野の細胞から筋肉を直接動かす神経経路を言います。この神経経路が損傷を受けると、四肢麻痺、両麻痺、片麻痺などの症状が生じます。具体的には、筋出力の低下や筋緊張異常等が見られ、関節可動域の一部で筋出力が乏しかったり、姿勢によって筋出力が異なったりします。

3-3. 錐体外路障害

錐体外路は、基底核、脳幹、小脳等を結ぶ様々な神経ネットワークの総称で、運動の調整を司ります。錐体外路に損傷を受けると、スムーズな動作の障害や運動の過多や過少などが見られます。例えば、アテトーゼ型脳性麻痺では、四肢のねじれを伴う不随意運動が見られます。レット症候群では、震え、すくみ足、常同運動等が見られます。

3-4. 小脳性障害

主に小脳系の神経回路が、四肢や体幹のバランス制御や運動協調性を司っています。この部位の損傷により、バランス保持の困難や、四肢の正確な動きや構音などが障害される運動失調(ataxia)と呼ばれる症状が出現します。その他、小脳性以外にも運動失調を引き起こす場合があります(脊髄性、大脳性、前庭性等)。

次に、具体的な学習内容の選択方法について述べます。

4. 評価に基づく学習の選択

4-1. 身体の動きの目標

学習指導要領の自立活動「身体の動き」区分の項目は以下の5つです。

- (1) 姿勢と運動・動作の基本的技能に関すること
- (2) 姿勢保持と運動・動作の補助的手段の活用に関すること
- (3) 日常生活に必要な基本動作に関すること
- (4) 身体の移動能力に関すること
- (5) 作業に必要な動作と円滑な遂行に関すること

各項目を具体的な身体動作に分類した例は、以下のようになります。

- (1) 座位、立ち上がり、立位等の抗重力活動や、四肢の粗大運動
- (2) 補装具、移動機器、物的介助物（手すり、壁、机等）の利用
- (3) 更衣、食事、トイレ等の自立
- (4) 四つ這い移動、歩行、階段昇降等の自立
- (5) 授業や進路先で行う様々な巧緻動作や作業

各項目の身体動作が、具体的な分析対象となります。

4-2. 評価のながれ

まず、①課題となる姿勢や動作を観察し、②課題の原因と考えられる評価項目を選定します（仮説設定）。③原因となる評価項目を改善する学習内容を実施します。④一定の学習期間を経て再評価をします。初期評価時と変化がない場合、a) 仮説が誤っていたか、b) 学習内容が適切でなかったかを考察し、既存の学習内容を修正するか、新たな仮説と学習内容を設定します。

4-3. 評価プロセスの自問自答例(1)

立位や歩行の自立を目指したい児童A

（観察）教師が両手を持つと立てるが、ふらふらしている。

（考察）立位が不安定なのは、筋力不足が原因だろうか。

（原因推定）…いや、立位バランスが主な原因のようだ。

（学習内容）壁にもたれて立位バランス学習をしようか…

（学習方法）…横方向のバランス向上には良いが、前後のバランス学習にはならないな。

前後にふらつきやすいようだから、体の横に手すりを持って、前後の立位バランスを向上しよう。

（再観察）学習の成果で、両手介助立位でふらつかなくなった。しかし、前手引き歩行では、腰が引けた歩き方になる…

（考察）怖がって腰が引けるのか？たくさん歩けば慣れるかな。

（原因推定）…いや、動的なバランス能力の不足が原因だろう。

（学習内容）横手すりですくすく歩くバランス学習をしようか。

（学習方法）…いや、難易度が高すぎる。まずは、PCウォーカーで大きな支持面を確保して歩き、その中で重心を制御する動的バランス学習から始めよう。

4-4. 評価プロセスの自問自答例(2)

良い姿勢で座れない生徒B

（観察）椅子に円背姿勢で座り、足を浮かし両膝を伸ばしている。

（考察）麻痺はないのになぜまっすぐ座れないのか…円背が原因？背中をストレッチすれ

ば、まっすぐ座れるかな？

（原因推定）…いや、円背はむしろ結果では？どうも本人の座位姿勢イメージに根本的な原因があるようだ。

（学習内容）骨盤を後傾させない座位姿勢を作ろう。

（学習方法）…いや、それだけでは不十分。足底を床に接地して座る重心感覚も学習させたい。骨盤は教師が支えずに環境設定で前傾させる。またぎ座位が適当だ。

5. 動作機能の向上について

脳性麻痺児の将来の動作能力は、GMFM（粗大運動能力尺度）スコアである程度予測されています。しかし、動作学習を十分に経験していない場合、適切な学習により予測以上の伸びを示すケースもあります。また、GMFMスコアの改善には繋がらなくても、定頸の獲得、立位介助量の軽減、ウォーカー操作能力の向上、手すり歩行の熟練等は、実生活の中で重要な目標になります。歩行器等を活用した自由な活動範囲を広げることで、好奇心や環境探索意欲を刺激し、認知、コミュニケーション能力の向上も期待できます。

6. 評価項目の学習例

今回は、評価項目のうち筋出力、運動・姿勢イメージ、筋緊張の課題について、具体的な学習例を紹介します。

6-1. 筋出力とは何か？

筋肉は脳神経細胞のネットワークで制御されているため、脳組織にダメージを受けると、筋肉への神経制御が低下したり失われたりします。つまり、最終的な筋肉による仕事において、脳神経系が関与する情報伝達部分を強調して「筋出力」と表現しています。

例えば、両麻痺型脳性まひ児では、独歩できる下肢筋力があり、膝関節の伸展関節可動域に問題がない場合であっても、膝を曲げて歩く様子が見られます。これは、膝関節の最大伸展域で関与する筋肉の筋出力低下が一つの要因として考えられます。

6-2. 筋出力を向上する学習

2025年現在、比較的動作能力が高い脳性麻痺児の上下肢の運動学習法として課題指向型アプローチ（Task Oriented Approach）が、上肢の運動学習法としてはCI療法（Constraint-Induced Movement Therapy）やHABIT（Hand-Arm Bimanual Intensive Therapy）等の有効性が示されています。課題指向型アプローチが可能な児童生徒には、低速でのトレッドミル歩行やPCウォーカーでのスロープ昇り歩行等の課題により、地面を蹴る時の足底母指球への荷重刺激で歩行反射を促し、脚を振り出す筋出力向上の学習を組み合わせで行えます。

重度の脳性麻痺児に対しては課題指向型学習が難しい場合もあり、本校では静的な姿勢

での筋出力向上を目的とする学習も行っています。例えば、肘、座骨、足底等への荷重刺激、適切な抗重力姿勢、振動刺激などを組み合わせることで、抗重力筋の筋出力が促進される効果に着目しており、両肘を床についた腹臥位、軽度前傾させたサドルに座り足底を床に密着荷重する SRC ウォーカー座位、倒立振り子様に揺れる椅子（通称：ゆらゆら椅子）や振動刺激装置の上に座った端坐位練習等を取り入れています。

7. 筋緊張とは何か？

脳神経系は、姿勢を保持し動作を行いやすいよう、常に適切な筋緊張レベルに調整しています。脳機能障害により、筋緊張の調整機能のバランスが崩れると、筋緊張の亢進や低下が引き起こされます。また、筋緊張は姿勢の影響を受けるため、筋出力、関節可動域、動作能力の向上を考える上で、姿勢の選択は重要です。

7-1. 姿勢変化と筋緊張

関節可動域練習を行う時、一般的に背臥位よりも側臥位、腹臥位、座位等で筋緊張が抑制されやすい傾向があります。また、SRC ウォーカー座位では、座面の前傾角度を調整することで、下肢の筋緊張が変化します。そのため、頭部挙上練習を目的とする場合と、ウォーカー歩行時に下肢の主体的な動きを引き出す場合とでは、動作に最適なサドル角度を変更する必要があります。

車いすやバギー上の座位姿勢では、股関節を十分屈曲することで、反り返りや下肢の伸展筋緊張亢進が軽減します。そのため、腰を座面の奥まで入れて座ることや、フットレストの高さを調整することが大切です。

7-2. 筋緊張と荷重刺激

一般に、上肢では屈曲・内転・内旋の「屈曲パターン」、下肢では伸展・内転・内旋の「伸展パターン」で筋緊張亢進が起こりやすいですが、非対称性緊張性頸反射のように、左右の上下肢で屈曲と伸展のパターンが非対称に出るパターンもあります。体幹では、体を反らしたり、丸めたりする筋緊張亢進パターンが見られます。

これらは四肢や体幹を動かす、主に体の表層にある筋群の筋緊張亢進によるものです。体幹では、グローバル筋と言われる体幹表層の筋群（脊柱起立筋、腹直筋、外腹斜筋）の筋緊張が亢進します。一方、ローカル筋と言われる体幹深層の筋群（多裂筋、腹横筋）には、体幹を静的に安定させる抗重力機能があり、これら深層の抗重力筋が適切に働くと、表層筋群の筋緊張亢進は反射的に抑制されやすくなります。

体幹深層の抗重力筋の活動を促すためには、座位では、骨盤の前後傾を中間位にして座骨や足底全体に荷重すること、他動的に左右前後へ細かく揺らしたり機械的振動刺激を与えたりする方法が有効です。また、両肘つき腹臥位（Prone on elbows）では、肘荷重により肩甲骨周囲の抗重力性筋活動が優位になり、上肢を体幹に引き込む筋群の筋緊張が抑

制されやすくなります。

立位姿勢では、金属支柱付き短下肢装具を着用してつま先立ちを防ぎ、頭部・体幹・足部を垂直に調整した位置で足底荷重を掛けることで、立位保持に必要な抗重力筋力は発揮しつつ全身の筋緊張を抑制します。スパイダーという重力軽減用教材を使用すると、足底荷重量を段階的に調整して立位姿勢が学習できます。

筋緊張低下の場合も、足底荷重や振動刺激が抗重力筋の筋出力を上げる場合がありますが、筋緊張抑制に比べて難しい面もあります。

いずれの方法で筋緊張を抑制（増加）するにせよ、最終目標は日常的な姿勢や動作の改善であり、自立活動で獲得した姿勢や動作を日常生活内で継続的に活用していくことが大切です。

8. 姿勢・動作イメージの誤学習

長期的な習慣により、適切でない姿勢や動作が本人の中でイメージとして定着しているケースが見られます。例えば、バギー等に後方リクライニング姿勢で長時間座っていると、座骨より骨盤後方や背部にもたれた荷重感覚が優位になります。この座位イメージが強く定着してしまうと、箱椅子で端坐位をとった時に、骨盤を後傾して腹筋を使って骨盤後方を支点に体幹と下肢をシーソーのようにバランスをとる座位姿勢になることがあります。

PC ウォーカー歩行学習では、ウォーカーの後方にもたれて脚を振り出そうとしますが、前に進めない様子が観察されます。これは、それ以前に行ってきた後方介助歩行の時に、後ろの介助者にもたれて歩く動作イメージが原因の一つと考えられます。

8-1. 姿勢・動作イメージ再教育

端坐位では、座骨、両足底を頂点で結ぶ四角形の支持基底面の中に重心がある姿勢感覚を学習します。PC ウォーカー歩行では、足底前足部で床を後方に蹴って進む動作イメージを学習するために、トレッドミル歩行やスロープ昇降などを利用します。

適切な姿勢・動作イメージ学習には、誤ったイメージが定着した原因や環境を分析することが大切で、適切な再学習の後に日常生活で習慣化するためには、姿勢管理や動作介助方法を再検討することも必要となります。

9. まとめ

今回の報告では、自立活動「身体の動き」領域において、理学療法の視点を取り入れた評価項目を用いて課題の原因を分析する方法を紹介しました。これらの評価項目は、肢体不自由児に対する妥当な目標設定や学習内容の構築、さらに日常動作・歩行介助、姿勢づくりや環境調整の検討にも有効です。

まず、姿勢・動作を丁寧に観察し、そこから得られる疑問や気づきを基に、最も適合す

る評価項目を選択することが大切です。その上で、児童生徒の実態に応じた具体的な学習方法を、療法士の知見も参考にしながら組み立てていきましょう。

評価は常に正解が一つとは限らず、時に誤った仮説を立てることもあります。しかし、複数の視点を照合しながら検討を重ねることで、評価および学習方法の精度を高めることができます。教師自身が評価実践を積み重ね、療法士との協働を通じて知識を深めていくことが、自立活動の充実に繋がります。

地域支援整備事業の取り組み報告

リーディングスタッフ

宇城 恵太

高橋 元

宮本 恵

1. はじめに

平成 19 年の文部科学省による「特別支援教育の推進についての通知」により、支援学校においては「地域における特別支援教育のセンター的機能」が求められている。特に、大阪府では「支援教育地域支援整備事業」として、支援学校にリーディングスタッフを配置し、市町村関係部局や小・中学校等からの要請に応じて、以下の活動を行っている。

- (1) 訪問相談による相談
- (2) 合同相談会の企画や協力
- (3) 障がい理解推進、校内委員会等の体制づくりの助言
- (4) 個別の教育支援計画及び個別の指導計画の作成・活用に向けた助言
- (5) 地域における教育・医療・保健・福祉等の関連機関との連携、協力体制の構築
- (6) 市町村関係部局や教育委員会、小・中学校が主催する研修会や協議会への参加
- (7) 小・中学校等の教職員に対する研修講師の派遣
- (8) 自立活動等における指導実践の公開、教材・教具に関する情報提供及び貸し出し
- (9) 専門性の向上におけた研究協議会、研修への参加
- (10) その他、大阪府教育庁が必要と認める支援

2. 本校における地域支援

本校は、豊中支援学校・中津支援学校の3校で、豊中市・箕面市・池田市・豊能町・能勢町の3市2町の「豊能ブロック」の地域支援を担当している。

令和6年及び7年度においては、①各種会議や学習会の運営と参加（ブロック会議、拡大実務者会議、支援教育学習会、実務者会議）、②地域の諸会議への参加（箕面市支援連携協議会、池田市要保護児童対策地域協議会、吹田市域療育等関係機関連絡会議、3市2町のリーディングチーム会議等）、③訪問相談・研修講師を担った。

本校の訪問相談については、肢体不自由に関する相談だけでなく、発達障がい等、地域のさまざまな教育的ニーズに合わせた相談体制を豊能ブロック内の支援学校と協働で請け負ってきた。

3. 訪問相談

年間訪問相談件数 71 件（令和6年度実績）

	幼・保・こども園	小学校	中学校	合計
豊中市	16	13	0	29
箕面市	9(2)	17(2)	6	32(4)
池田市	0	1(1)	0	1(1)
能勢町	0	0	6(3)	6(3)
豊能町	0	3	0	3
合計	25	34	12	71(8)

()は肢体不自由の相談件数

3市2町における訪問相談に関して、箕面市の件数が一番多いという実績となった。リーディングスタッフによる訪問相談が広く周知され、その有用性が浸透した結果と思われる。肢体不自由の相談件数は5件と多くはないが、地域の学校に通う肢体不自由児に関して、教員体制や授業・行事への参加方法など、肢体不自由校である本校の専門性を発揮することができた。また、通常学級で配慮を必要とするケースや外国にルーツのあるケースなど、相談内容が多岐にわたってきていることも傾向として挙げられる。

今後の課題としては、訪問相談後の様子の変化などの振り返りができていないことが挙げられる。オンライン等を活用しながら、訪問相談後のヒアリングを充実させていきたい。

4. 支援教育研修

年間研修講師回数 21 回(令和6年度実績)

	豊中市	箕面市	池田市	能勢町	豊能町	合計
回数	5	8	8	0	0	21

箕面支援学校が担当した回数を表記
(豊能ブロック全体では計 51 回)

発達障がいや合理的配慮等に関する研修だけでなく、支援学級の授業づくりや学級運営の方法に関する研修、研究授業の見学と指導助言など、より具体的で個別的な研修のニーズが高い傾向にあった。一方で、応用行動分析を用いた行動問題の分析や愛着形成に課題のある児童生徒の理解と対応など、研修内容は多岐にわたるなか、地域支援の一環として対応した。また、研修方法については、参集型、オンライン形式やオンデマンド配信など、地域の教員がより多く参加しやすいように、依頼先のニーズに応じて柔軟に対応した。

5. 支援教育学習会

豊能ブロックでは、年に2回、長期休業期間中に地域の教員向けに支援教育に関する学習会を開

催してきた。豊能ブロックの地域の教員であればだれでも参加でき、テーマもリーディングチーム会議等でニーズを聞き取りながら決めている。幹事校の中津支援学校と連携し、運営のサポートを実施した。令和6年度及び令和7年度の学習会の内容は、以下のとおりである。

令和6年度

8月「支援学校卒業後の進路と生活について」

講師：中津支援学校、豊中支援学校、箕面支援学校の教員

1月「ネットゲーム依存の理解と支援」

講師：吉川 徹 先生（尾張福祉相談センター児童専門監）

令和7年度

7月「自立活動の実践、子どもの見立て・アセスメント」

講師：小田 浩伸 先生（大阪大谷大学）

1月「作業療法士の視点から見た教室の環境設定～豊かな学びを育むための環境づくり～」

講師：中村 愛子 先生（大阪整肢学院 作業療法士）

6.2 年間の活動を振り返って

「地域に広がる支援の力」をキャッチフレーズに、(1)訪問相談による相談と(7)小・中学校等の教職員に対する研修講師の派遣を重点的に取り組み、地域の支援力向上に寄与することを目標とした。訪問相談では、継続的な相談依頼によって、1年間をとおして関わることのできるケースがあった。訪問相談による助言後の変化を話し合いながら、担当者とより良い支援方法を考えていくことができた。また、電話やメールでの相談も複数あり、さまざまな形で実施することができた。研修講師の派遣では、依頼のあった学校の校内研修だけでなく、校区の小中学校を対象とする研修もあり、研修のなかでグループワークや事例検討の場を設定することで、幅広い交流とより充実した研修を行うことができ、参加者からは肯定的な感想をいただくことができた。

令和6年度は、大阪府における「市町村リーディングチーム」充実支援事業の対象市として箕面市が選ばれ、リーディングスタッフもオブザーバーとして参加することで、リーディングチームによる巡回相談の実態と課題を共有することができた。この事業をふまえ、令和7年度は、リーディングチームによる巡回相談に同行する機会を設定することで、連携強化と地域の支援力向上の一助となることができた。

この2年間で、訪問相談の相談内容や研修講師のテーマはより複雑化しており、指導助言や研修内容もより具体的に個別的な内容を求められる傾向が強くなってきている。そのような流れに対応していくために、今後は、リーディングスタッフ一人ひとりの専門性を高めるとともに、豊能ブロックの地域支援担当者同士で情報や知識の共有が必須である。また、引き続き、各市町教育委員会を中心に、リーディングチームや支援コーディネーターとの連携の強化を図り、地域の学校一つひとつの支援力向上のみならず、市町全体の支援力向上に尽力していくことが必要であると感じている。

最後に、地域支援の取り組みを行うにあたり、各市町教育委員会、リーディングチーム、リーディングスタッフの活動を理解し、学校で支えてくれる校内の教員、すべての方に感謝を申し上げる。

あとがき

本紀要の刊行にあたり、一言ご挨拶申し上げます。

本校では、今年度の研究テーマ「自分らしく豊かに生活できる力を育てる授業づくり～一人ひとりを大切に～」のもと、日々の教育活動の中で、一人ひとりの児童生徒の実態や想いに寄り添いながら、よりよい支援を模索してまいりました。

「自分らしく」「豊かに生活する」と一言で申しまして、それは一様ではなく、児童生徒の数だけ異なる姿があります。子どもたちとの関わりの中で、目の前の一個人が何に心を動かし、何に歓喜し、何に涙するのか、また、自己実現のために今教育に必要なことは何なのか、子どもたちの未来に想いを馳せながら、実践や研究を積み重ねてまいりました。

支援学校での実践は直ぐに結果が出るものではなく、何カ月、何年もかかることも多くあり、まさにこの積み重ねの結晶が本紀要であると感じております。

教育現場は常に変化し続けており、特別支援教育においても、児童生徒を取り巻く環境やニーズは多様化しています。そのような中で、実践を振り返り、言葉として記録し、共有していくことは、子どもたちへの支援をより確かなものにするとともに、学校全体の教育力を高め進化させていくための大切な営みです。

本紀要が、本校教職員の学びを深めるだけでなく、特別支援教育に関わる多くの皆様にとって、実践のヒントや共に考える一助となれば幸いです。今後も、本校が大切にしてきた「一人ひとりを大切にする教育」を軸に、チームとして学び合い、よりよい支援の充実に努めてまいります。

最後になりましたが、今後とも引き続き本校の教育活動にご理解とご支援を賜りますようお願いいたします。

令和8年3月

大阪府立箕面支援学校 教頭 松田 里絵

研 究 紀 要

第 2 1 号

発 行	令和8(2026)年3月 日
発 行 者	大阪府立箕面支援学校 箕面市船場東3丁目15番1号 TEL 072-728-1245 FAX 072-728-5694
発行責任者	平 井 晋 也
編 集	研 究 支 援 部